

---

# N e g a i

伊吹ノア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N e g a i

### 【Nコード】

N 3 2 6 0 P

### 【作者名】

伊吹ノア

### 【あらすじ】

紅恩寺吟也くおんじ・ぎんやが願うこと。その夢、野望。それは、一男子として生まれたものならば誰しもが思うものだった。その瞳に映る、全ての女の子たちの幸せ。それが、自分がきっかけならなお良し、なんて思っていたけれど。吟也はそれを堂々と口にできるほど強くはなかった。そのくせプライドばかり高く、小さな頃はよく苛められていて。それを幼馴染みの女の子に助けてもらっていた。吟也はそんな自分が許せなくて、強くなりたいと願い続けた。それがあまりにも真に迫っていたから……というわけではないのかもしれないが。

吟也は異世界『ジャスポース』にある、サウザー学院と言う所に通うこととなる。そこは、世界を救うための英雄……強きものを育てる場所。そこで吟也は、二つの出会いをする。一人は、友達百人作りたいなんてことを臆面もなく言っただけ、重い宿命背負いし男装の少女。吟也は彼女……『すう』との出会いにより、自分の信念、本当の願いを改めて自覚し、そして思い出す。何故自分は、全ての女の子の幸せを願うようになったのかを。／／長編までは届かないかもしれない、異世界学園ファンタジーものです。『銀色クリアデイズ』の主人公、紅恩寺吟也くんの過去（中学時代）のお話であり、他の自作のクロスオーバーでもあります。中二病全快ご都合主義の軽いお話ですので、その点にご注意ください。

1、始まり。吟也がジャスポースに入るまで（前書き）

伊吹ノアです。『青空』の連載が続いておりますが、10万に届くかどうかの新作をお送りしたいかと思えます。一応クロスオーバーと銘打っておりますが、よくよくみると微妙に齟齬がありそうなので、単一の話としてみてやってください。

# 1、始まり。吟也がジャスポートスに入るまで

僕……紅恩寺吟也くおんじ・ぎんやは、生まれも育ちも東京だ。

でも、小さい頃にちよつとだけ神戸の方に住んでいたことがあつて、

久しぶりに戻った東京で幼馴染なんかには、随分変わった変わつたつて言われたものだった。

それは、中途半端に覚えた関西弁が変だったのもあるだろうけど。実の所、変わったのはそれだけじゃなかった。

確かに、神戸でもちよつと暮らしていたけど。

僕が両親の元を離れ東京に帰るまでの何年か……僕は、所謂異世界いせいって呼べる場所で、ある学院に通っていたんだ。

もちろんただの学校じゃない。

やがて訪れるという、世界の危機を救う英雄、あるいは勇者を育てるっていう、

一見しようもないことを真剣に取り組んでいる、ある意味夢のよきな学院だった。

その名をサウザー学院アカデミー。

ジャスポートスと呼ばれる、夢幻の世界に存在する学び舎。強くなりたい、みんなを守りたい、世界を平和にしたい。

そんなことをアホみたいに考えている奴らが、選ばれたり、自ら志願したりして、ここに来てるって聞いた。

かく言う僕は、昔は（今も対して変わらないけど）ケンカどころか、運動もろくに出来ないもやしっ子で。

そのくせ腕っぷしの強い幼馴染に守られてばかりだったのが悔しくて。

強くなりたい……強くなりたいってアホみたいに思い続けていった結果、気付けばこの世界にいた。

現実的なことを考えれば、これって誘拐とか神隠しじゃないのになって思ってたけど。

二週間にいっぺんくらい思い出したようにやってくる両親からの励ましの手紙で、

何やこれもキビシー現実なんだって、ひどく納得したのは覚えている。

現実には厳しいな思ったのは、それだけじゃなくて。

剣とか魔法とか、夢のように想像していたいろんな不思議な力を覚えたり使ったりすることが、

思ってたよりもしんどくて、魔物とかモンスターとか呼ばれる者達が、とにかくおっかなくて怖かったことだろう。

先生は魔法で創った幻だって言っていたけど。

初めて魔物を殺した時には、死骸が目に焼きついて、一週間くらい眠れなかったのを覚えている。

そんな訳だから、入ったばかりの頃は、何人いるのか数えるのも億劫なくらい生徒がいたのに。

僕がようやくこの生活に慣れた時には、学院生の数は二百人ちよつとまで減っていた。

でも、本当の地獄はそこからだった。

ある日いきなり、これ以降の授業の定員は百人で。

最終的には十人まで絞られる、なんて言われたんだ。

しかも、挫折してやめるにしても、試験に落ちて辞めることになったとしても、

ここにいた記憶は消される、ときたもんで。

ここまで根性で残ってきて、いろんな力を身につけて。

それなりにプライドを持ってたもんだから、今までやってきたことを忘れるなんて、

もつてのほかだった。

だから、今まで何となく仲良かった学院生たちも、何だかギスギスしてしまつて。

仲間意識よりもいかに効率的にライバルを出し抜き、自分が残るかみたいな考えが広まつて。

騙しあい出し抜きあいみたいな日々、こんなことでヒーロー育成できるのかなって思っていた頃。

あいつが、途中入学してきたんだ……。

(第2話につづく)

## 2、気になるあいつ。野望は友達100人

あいつがやって来たのは、ちょうど百人の定員が決定した時で。

大幅な人員削減からひと段落したものの、これからはさらに気が抜けなくなる、そんな時期だった。

その日は、みんなの不安と、焦りにも似た雰囲気を、

そのまま表しているかのような、雨の煙る景色が広がっていて。

僕は何をするでもなく、ホームルームの開始を待ちつつ、そんな景色を見やっていると。

しばらくしてチャイムが鳴り、教壇側の扉が勢いよく開いた。

現れたのはいつも元気な担任のジュアナ先生と。

僕と同じ、男子生徒用のモスグリーンの制服に紺色のマントを身につけた、（ちなみに女子生徒の制服は、黒のツープース仕立てのフレアスカート、リボンがわりの一對のホワイトスノウ）知らない生徒だった。

そいつは何だか緊張しているらしく、ジュアナ先生の後についていく様は、ぎこちないの一言で。

おそらく僕よりは、二つ三つ下の子だろう。

その極度の緊張で、顔もこわばっていたが、目も覚めるような美形アイドルだった。

偶想アイドルって言葉がぴったりはまる、まさにそんな感じ。

「はい、みなさん！おはようございますー！」

『おはようございますー！』



響くジュアナ先生の声に、僕を含めた学院生達が、一斉に声をあげる。

その統制ぶりはたいしたものだけど、ここにいる全員が完璧に礼儀をわきまえているわけじゃなくて、テキトーに挨拶すると、先生のお仕置きが飛んでくる怖いからだったりする。

何が飛んでくるのかはよう言わん、ってやつだけど。

今まで死人が出なかったのが不思議なくらいだった。

それにみんながびびってるのに気づいているのかいないのか。

ジュアナ先生は満足そうに頷くと、言葉を続ける。

「それですすね、今日は皆さんに、新しいお友達を紹介したいと思いまーす！」

見れば分かることだったが、それでもクラスの中に、ざわつきが広がるのがよく分かった。

途中入学者なんてもちろん初めてだし、ただでさえ学院生の数がどかっと減ったばかりの頃だから、その人物が何者なのか、みんな興味津々だったんだろう。

「おや？ あの髪と瞳の色は……珍しいねえ、こんなところにもいるなんて」

「またそれか」

まるで品定めでもするかのようになり、突然上がった右隣の席からの声。

僕は思わず突っ込んでしまった。

「またじゃないよ、ここで見るのは初めてだし……一体どこの子かしらね、育ちも良さそう」

そう言って熱っぽい息を吐くのは「ふたき・みやこ希観弥子」。

いきなり初対面で、「あんたの髪って血の雨がぶつたみたいね」とか言ってきた失礼極まりない女の子だった。

「あんま苛めたんなよ、カツあげたりしたらあかんぞ？」

「ちよつと、ちよつとお。アタイをなんだと思ってるのよ、そんなことするわけじゃないでしょうに」

周りから見たら、パツキンのナイスバデーでちよつと近寄りがない雰囲気のある奴とか言われてるらしいけど、僕の第一印象は、性格が大阪のオバチャンな大女って感じだった。

そんなの正直に言ったら何されるか分からんからよう言わんけどね。

まあ、それは結局僕の大きな勘違いだったんだけど。

「何だか純粹培養、無菌状態の温室育ちって感じはするね」

すると、僕が答える代わりに斜め前の席から聴こえて来たのは、少々ずれた、そんな言葉。

「そうでしょ、そうでしょ？ 清水は分かっているねえ」

「うん、まあね」

観弥子に、グラインドするくらいはしばしと背中を叩かれても動じずに、

変わる事のない笑みを浮かべている少年は伯嗜原清水。

深い海の底のような髪と瞳が特徴的なのに、存在感が何故か掴み難いといった奴だった。

「……信号三人衆は余裕だな、安きことこそ勝機也、か」

「信号ゆーなっ、しかもそう言う晃がいつちゃん余裕に見えんぞ？」

「まあ、オレの場合はな。駄目な時は駄目だろうし」  
冷たく凍えるような声で変な造語を作ってるのは十夜河晃。とやがわ・あきひ  
眠たげながらその強い生粋の黒目を窄め、染めたのでは生まれ  
ない、ダークバイオレットの髪をかきつつ、面白いのかそうでない  
か判断に困る表情で僕らと新入生君を見やっっている。

それは、一人くらい入っても余裕だと言いたいの  
か、別に落ちても構わないのか、微妙な感じだった。

でも、確かに晃の言う通り、清水や観弥子みたいな新入生君に好  
意的なのは、

珍しいのかもしれない。

かく言う僕も、落ちる時は落ちるからあんまり関係ないって、  
晃と似たような考えを持つ一人だが、それでもまだマシな方なん  
だろう。

新入生君は、その時、はっきり言って歓迎されてはいなかった思  
う。

完全にシカトして、自分の内職に没頭する者、あからさまに嫌悪  
の視線を向けるものがほとんどだった。

ジュアナ先生は、そんな雰囲気になんか気がついていないと思う。

それでも、まるで気にした風もなく、黒板に新入生君の名前を書  
いていた。

それは横文字、英語だった。

(何や、外人はんか?)

まあ、こんなとこに外人はんも何もないとは思わんが。

周りの奴はみんな日本語バリバリだったから、あんまり気にはな  
らなかつたんだけど……。

「さ、自己紹介、してください」  
ジュアナ先生は、名前を書き終わると、新入生君を促す。  
何て名前だろう、筆記体で正直分らないんだけど。

「えっと、あのその。読めませんです……」  
すると、新入生君は、黒板と先生の顔を見比べながら、そんなことを言った。

そうでしょ。筆記体って難しいんだよね……って、ちょっと待てや！

「あ、そうだったわね、ちょっと待って」  
「ぶっ」

観弥子が噴き出したのが横目でも分かる。  
なんで自分の名前やのに読めへんねんっ。  
思わず突っ込み入れたくなったが、その前にジュアナ先生が慌てて書き直した。

「えっと……す、スウラ・オージーンですっ！ 地球の……日本から、来ました！」

「へえ？ 俺たちと一緒にあ」

清水が、やっぱり変わらぬ笑みのまましきりに頷いている。  
晃も何かに興味を引かれたようで冷笑を浮かべていたが、教室に生まれた無歓迎ムードは変わらなかった。  
むしろ、何か外したさびい空気すら漂っている。

「オージーンさんは、お家の都合で入学が今になってしまったの。まだ、この事良く知らないから皆さん教えてあげてくださいね。それじゃあ、オージーンさん、何か一言」

この学校、いちいち家の都合とか考えてたのかな、とは思ったが、先生がそう言うならそうなんだろう。

新入生君は、それから十秒後くらいに自分が呼ばれたのに気づいたみたいにあたふたしだすと、

何かを言うために前を向いて、ぴんと背筋を伸ばした。

(おっ……?)

するとどうしたことが、今までおどおどしていた態度が激変する。顔の表情もきりりと引き締まり、何かかっこいい。

そのまま教壇の真ん中に立ち、一同を見渡すと、言った。

「すうには目標がありますっ、みなさん、すうとお友達になってください！ 目標は百人ですっ！」

まるで選手宣誓をするみたいに、新入生君は叫ぶ。すぐには何を言っているのか理解が追いつかなくて、辺りは一瞬しんとした。

「……ふがっ」

始めにアクションを起こしたのは晃だった。

鼻が抜けたみたいな声を出して、ぐてつと脱力する。

見るからに笑いを堪えているのが明らかで……そして、それがスイツチになった。

とたんに巻き起こる、様々なタイプの笑いたち。

「友達か！ ええで、なつたるで、何か気に入った！」

思わず出た僕の言葉に、新入生君が気づき、嬉しそうな表情を見せてくれる。

笑いつちゅーもんは、笑かすこと笑われることの違いよりも、何に笑ったかが大事なんだと思う。

なんて、笑いのことなんもしらん巨人&オリックスファンの東京人のくせに、

偉そうなこと考えてみたりしてたけど。

新入生君のその心意気に打たれて、随分と久しぶりな、本当の笑みが出たのは確かだった。

自分の呼称が『すう』なのもパンチが効いてるけど。

まさか、この蹴落とし蹴落とされるのが常のこの学院でそんなことを宣言する奴がいるとは思わなかった。

世の中まだ捨てたものじゃない、なんて嬉しい気持ちになったのもある。

見ると、清水も似たような感じだった。

観弥子はちょっと呆れたように肩をすくめている。

ま、こんな気持ちは女の子には分からないんだろっなどは思ったけど。

そんな僕らのやりとりと、和んだ雰囲気、ジュアナ先生も安心したように頷いていて……。

### 3、テンプレート。エリートお嬢様ポジション（前書き）

しばらくは、ギアをあげていきますよー。

### 3、テンプレ。エリートお嬢様ポジション

最初はどうなるかと思っただけど、中々どうして、何とかなるもんだ。

なんて考えていると、和んだ空気を吹き消すかのように。  
バシンッ！ と机を叩き付ける音が木霊する。

どうやら僕の考えは甘かったらしい。

当然視線も集まるその先には、紫色のつややかな長髪を一纏めのポニーテールにし、

日本刀を携え高慢な態度を隠そうともしないで立ち上がる一人の女の子……

更級雪菜きんぎょしな・せつながいた。

「納得いきませんわ！ どうして今頃になって新入生なのです？  
今まで落とされた方たちが可哀想ではないですかっ！」

怒りを隠そうともしないで、雪菜は新入生君を、ジュアナ先生をアメジストに燃える瞳で見据える。かく言う僕は、そんな雪菜の言葉を聞いて、いらだつを感じていた。

(可哀想……だって？ おのれは何様だっちゅーねん)

確かに、雪菜は実力もピカ一で、この前の入学試験でダントツの一位だったけどさ。

ちよっと上からも見すぎじゃないの？



……今思えば、僕の方こそ一方的で短絡的な考えだったと思うけど。

僕の表情が変わったのを見て、やめとけよって視線を晃が向けても構わず、

気づいたら僕は口を出していた。

「そんなんしゃーないやろ！ センセだって家の都合で今になつたて言ってるやん！」

「き、急に割り込まないでくださいます？」

そう言つて、嫌そうにこちらを見てくる雪菜。

やんのかコラつて言葉を返そうとすると、さらにそれを遮るようにして、口を挟まれた。

「吟也さん、だったよね？ 今まで辞めてった人たちのこと、何とも思わないの？」

血も涙もないんだ？」

「んなっ……だと、こらっ！」

僕はいきなりそんなことを言われ、思わず声を荒げてしまう。そんなことを言つてきたのは、神秘的さすら感じさせるアルビノの女の子だった。

「だってそうでしょ？ 最近まで一緒に頑張ってきた友達が何人も悔しい思いをして辞めていったんだよ？ それが今頃になつてだなんて……ずるいよ」

「っっ……」

ルビーのような深く強い紅の瞳に見つめられ、そう言われて。

僕は言葉に詰まってしまった。

彼女、永輪尋<sup>ながわ・じゆ</sup>は、雪菜の次くらいに成績優秀者で。

そんな子から友達がどうこうって言葉が出てきて驚いたっていうのもある。

でも何で？ 何でいつの間にか僕が悪者みたいになってるの？

さらに、当のやり玉であるはずの新入生君も、僕を怯えた目で見てるし……。

「……あの、ちょっといいかな？」

そんな追い詰められた、金のあるところにしか現れないナマモノのような僕を助けてくれたのは。

まるで今の雰囲気を感じていないんじゃないかっていった感じの、清水の声だった。

もちろん、笑みは絶やしていない。

「よく聞いてみるとさ、どっちも間違ったことは言ってないと思うんだ。」

だからさ、この際はつきりすればいいんじゃないかな？

ちよつとした試験というか、ようはオージーンさんが、ここにいられる資格があるかどうか、

試せばいいんだよ」

なるほど、入学試験みたいなもんだな。これに新入生君が受ければいいわけだ。

「わり、清水、助かったで」

「ううん、気にしないで。吟也君のためだけでもないしさ」

小声で礼を言う僕に、清水は少し照れてそんなことを言う。

「……そうねえ、その方がみんなも納得して授業受けられるもの

ね。

よし、今日の一時限は、オージーンさんの試験を行うことにしましょうー！」

すると、今まで全く口を挟まず、見守っていたジユアナ先生が、清水の言葉を受けてそう言ってきたから。

「わかりました。その試験のお相手は私がいたしますわ」  
高圧的な様子、それにすぐさま答えたのは、やはり雪菜だった。  
当然周りはざわつき出す。

雪菜の言いたいののはつまり、一対一の試合形式で戦って、力量をみてやるってことだろう。

僕は再び顔を顰めた。

まだ、基礎も習っていないはずの新入生君が、実力トップの雪菜と戦って勝負になるのかと。  
どう考えたって新入生君を貶めようとしているようにしか見えな  
い。

しかも、みんなの前でなんて、笑い者にでもする気なんだろうか。

「オージーンさん、雪菜さんはああ言ってるけれど、どうするの？」

「あ……はいっ、じゃあお手合わせをお願いしますです」

しかし、僕がそう思って何か言うよりも早く、新入生君は、二つ返事で頷いていた。

雪菜を見てちょっと緊張したように、はにかんでそういう様子は果たして余裕の表れか、  
何も分かってないのか。

「迷いなき返事、確かに承りました」

雪菜はそれを前者ととつたらしい。

口の端に笑みを浮かべ、やる気満々でそう言った。

「はい！ それじゃ、早速武道館に移動しまーす！」

やがて、ジュアナ先生の言葉とともに、騒がしさを引き連れて大移動が始まる。

「さて、どっちが勝つかしらねえ？ ここは一つ、学食でも賭ける？」

「……オレは雪菜、かな」

ようやく面白くなってきたといった風に、そんなことを言い出す観弥子と晃。

「アホウ！ 男やったら新入生君に賭けんかい！ ……お？」

僕がそのまま晃に突っ込みかまそうとすると。

その前をスタスタと一人の少年……奥村聖秀おくむらせいしゅうが通り過ぎていく。

ブラウンゴールドの短髪に、エメラルドの瞳。

顔立ちはハリウッドスターみたいなのに、もやしっ子さなら僕より勝ってる、そんな感じの奴だった。

「よ、オク！ 何かどえらいことになってしもたけど、あんさんはどっちが勝つ思う？」

僕としては新入生君を推したいねんけど」

「……どうかな、ボクには分からないよ」

「さよかあ」

返ってきたのは、そんなの興味ないといった態度そのままの言葉だった。

そして、オクはさっさと教室を出て行ってしまっ。

「聖秀君、何だつて？」

いつもの笑みを気持ち緩め、清水が聞いてくる。

「いや、分からへんつて。……あいつ、変わったつちゅーか、何かあつたんかな」

「少し前までは、吟也君とコンビ組めるくらい、テンション高かつたのにね」

確かに、ここに入って二週間くらいたった頃から、オクは何かが抜け落ちたみたいに人が変わってしまった。

前の試験で、何かあつたのか、それとも他の何かか。

「ま、そのうちそれとなく訊いて見るわ。それより今は新入生君やな」

「うん、そうだね」

僕は頷きあうと、一種の期待感にも似た気持ちを抱きつつ、武道館へと向かうのだった……。

(第4話につづく)

#### 4、初接近。美味しいコーヒーって？

ピツ、ガコーンッ。

ああ、ここってやっぱり現実なんだと実感させられる赤いベンダ  
ー。

僕は、取り出し口から細長い、ストレートの缶コーヒーを取り出  
す。そして一口。

「いやあ、どっちつかずの味かて、人のオゴリで飲む一杯はカク  
ベツや」

今は、一時限目後の、ちょっと長めの休憩時間。

結果を述べておくと、新入生君と、雪菜の一騎打ちは、新入生君  
の勝利に終わった。

まさに大波乱、というやつだ。

そんなわけで、優しい僕は晁に学食でなく、缶コーヒー一本で手  
を打ったんだけど。

洋風の城を彷彿とさせる校舎の片隅のサロンのごとき休憩室にあ  
る、いかにも場違いですといった感じの自販機を利用するのはおそ  
らく僕くらいだろうと思う。

何故なら、コーヒーやジュース飲みたかったら、学食で高級なも  
のが飲めるからだ。

ただ、それなりに値ははるし、元来貧乏性な僕としては、親から  
の仕送りがこういった雑費にしか使わないくせに、つつい安い方

に流れてしまっただけ。

晃なんかは、「せつかく異世界にいるんだからそんな現実くさいもんは飲めねえ」

とか言っていたけど。

他に誰も来ないから、僕だけの空間、的な感じがここにはあって何故だかこの場所が好きだった。

何て思っていたら、そんな僕の空間に人の気配を感じ、そちらを振り向く。

そこには半分、柱の影に隠れ、こっちを伺うように見上げる新生君がいた。

「おお！ 誰か思ったら新生君やないかつ。いやー、ごっつい試合やったな、スカツとしたで」

「ええつと……はいっ」

新生君は、僕の言葉に戸惑ったように、こくこく頷く。

何か、大人しい奴っていうか、引っ込み思案っていうか。

雪菜と互角、あるいはそれ以上の実力があるとはとても思えなかった、背だつてちっちゃいし。

……僕はそこまで考えて、まだ名乗ってもいないのに気づく。そういえば、互いの自己紹介はこの後の二時限目だったっけ。

「あ、そっぴやまだ名乗ってへんかったな、僕は紅恩寺吟也や、よろしゅうな」

「くおんじ、ぎんや……くん？」

「おう、そうや。僕のごときは好きに呼んでくれてかまへんで」

僕の名前を反芻し、うーんと考え込むその姿さえ何だかキマってて。

「こいつ、モテそうだなって普通に思ってしまった。」

片目にかかるちょっと長めの髪は、ソフトクリームのチョコみたいな色をしていて。

観弥子が食べちゃいたくなるねって言ってたんも分からんではないな、という気はする。

「それじゃあ、吟也って呼んじゃってもいいですか？」

「ああ、かまへんで。僕はどうすつか、いつまでも『新入生君』じゃ失礼やし。」

僕も『すう』って呼んでもええか？」

ちよつと考え、自然と出たのはそんな言葉だった。

「はいっ」

言われた当の本人も、その呼び名は気に入っていたらしく、嬉しそうにOKの返事を返してくれて。

「で？ すうは缶ジュースでも買いに来たんか？」

「え？ 缶ジュース？」

すうは、質問の意図が分からない様子で、僕の言葉を反芻する。

「ほら、この自販機で飲みもん買っんやろ？」

「あ、これのこと？ すう知ってます。買ったことはないけど、あったかーいのか、つめたーいのか出てくるんですよ？」



すうは、やっと言っている意味が分かったって感じのジェスチャーでそんな事を言ってくる。

「何や、買ったことないんか？ なら、ちょうどいい。一本奢ったるわ、何にする？」

なんだ、自販機もコンビニも満員電車も体験したことないブルジョワかと、

僕は内心でそう思いつつも、そんな気前のいい事でも言ってみる。ちなみに、そう言うブルジョワはこの学園には結構多い。挙げるなら、雪菜とかもそうだろう。

「え、えええっ？ 奢るって、すうに？ そ、そんなっ、恐れ多いですっ！」

なんとなくこの場のノリで口にした言葉に大げさに反応されて、こっちがびびってしまう。

「恐れ多いで、大げさなやつぢやな。……それとも？ こんなピンボくさいもんは口に合わへんってことか？」

「そんなっ、違います違いますっ、すうはそんな事、考えてないですっ！」

今度は縋り付くようにそう迫ってくるから堪らない。

ブルーベリイな瞳も潤んでいて、何か得体の知れない感情に支配されそうになったから。

僕はたまらず声をあげた。

「わーった、分かったから、離れんかいつ、今のは冗談やて、冗談っ！」

「あつ……ごめん、ですっ」

すると、すうははうつと我に返り、申し訳なさそうに離れてから俯く。

雪菜と戦ってる時は怖いくらいだったのに、このギャップは何なんだろうか。

ただ、結構軽めの冗句も通じないタイプなんだろうと自己纏めをしつつ、僕は言葉を続ける。

「んで、何か飲みたいもんあるか？ 入学おめでとう祝いになんか奢ったるで」

僕が、何が何でも奢る気なのを悟ったらしく、微苦笑を浮かべてすうは再び考え込む。

「どれがいいかな？」

「そか、買ったことなかったんやっけか、まあ、ここにあんのはコーヒーとか、スポーツドリンクとか、茶とかやけど……分かんなら、見た目で選ぶか？」

「見た目？ はい、じゃあ……これっ」

そう言っすうが指し示したのは、極彩色の花柄缶、『激甘ジエールコーヒー』だった。

「それが……すう、あんさん激しく甘党か？」

僕が思わず眉を上げたので、何かあるのかとすうも不安げに声を顰める。

「え？ あんまり甘いのはちょっと……」

「ならやめといたほうがええ。舌が死ぬで。こんな飲めるんは、

甘いものの別腹もつとるつわもんだけや。僕も一回チャレンジしたが、その日は一日中何食つても甘さが抜けへんかった」

「やめときます。……それじゃ、これは？」

めげずに再び指し示したのは、虚空の闇よりもなお深い黒の缶。

眠気さっぱりコーヒー『番長試合中』だった。

「見た目で選べ言うた僕も悪いけどな、やめておいてほうぐええ、マジで二、三日は眠れなくなってまうで。これは仕事に生きる、男の中の男の飲みもんや」

「そ、そうなんですか。缶コーヒーって色々あるのですね」

「せやなあ」

ま、こんなばったもんはここにしかないと思うが。

それを全部飲んだ僕としては、言えるのはそれくらいだった。

そしてそんな事を僕が考えていると、すうの視線が僕の持っているコーヒー缶に注がれているのに気づく。

「これは？ これもコーヒーですか？」

「ああ、コレか。ただのストレート缶やけど」

「それにはどんな効果があるんですか？」

どうやら、缶コーヒーには何かしら効力が付くものだと勘違いしたらしい。

まあ、分からなくもないなと思いつつ、説明をしてやる。

「ないない、これはただのコーヒーや、味は強いて言えばどっちつかず、やな。

甘くもなく苦くもなくって感じや。すうみたいな自販機初体験にはびっくりかもな……飲みたいんか？」

「はいっ」

少しだけ黙考した後、すうが笑顔で頷くので。  
僕はすぐさまもう一本同じ細長の缶コーヒーを買い、そのまますうに手渡した。

「あ、冷たい」

「ああ、れいこ、やなかった。アイスコーヒーやしな。ホットの方が良かったか？」

「いいえ、冷たいのがいいです。……飲みますね」

すうは首を振ると、買ったことはなくても開け方は知っているらしく、

ホットコーヒーを飲むときみたいに、両手を添えて飲みだす。

「……おいしい」

すうはそのまま一口で結構な量を飲むと、息を吐くようにそう言う。

それは聴くものを安心させる雰囲気を持った落ち着いた声色だった。

「そうやる？ この絶妙な感じがいいねん。僕も好きかな」

だから、僕も思わず嬉しくなっつてついつい本音を漏らしてしまう。

「はい、すうも好きですよ、この味」

どうやら一口で、随分気に入ったらしい。

そう言うすうに、僕も奢ってやった甲斐があったな、なんて思っ  
て。

それから、自販機のある休憩室を後にする僕たちなのだった……。

（第5話につづく）

## 5、天邪鬼。どうしようもないくらいに

「良く考えたら……すうにとっては災難な話やったな」

「……?」

何のことです? といった感じで首を傾げるすう。

「ほら、雪菜との試合のことや。勝ったんはいいけど、これから何かと目え付けられるんやないか?」

「目を付ける……」

分からない、というよりは縁のない言葉なんだろう。  
鸚鵡返しに呟くすうを見ながら僕は言葉を続けた。

「だからな、生意気ーとか言うて苛められるかもしれんから気をつけてやってこと。」

雪菜は……どうか知らんが、周りの取り巻きはきつと黙っとらん  
で?」

良く考えたら、賭けとかして不謹慎だったなと少し反省していた  
りする。

しかし、すうは僕の心配をよそに朗らかに笑った。

「そんなことする人、いませんよ」

「能天気やな、すうは。女を舐めたらあかんで、女の妬みは怖い  
んや」

僕は女心なんかちいとも知らないくせに、ちょっと真面目にそう言った。

僕から見てもすうは嗜虐心をそそるタイプだから、気をつけないと何されるか分からないって思って いたんだ。

本当にひどく間違った考えだったと、今でも思うけれど。

「大丈夫ですって、試合の後、ちゃんとお話しましたから。

聞けば雪菜さん、仲良くしていたお友達が一人、辞めてしまったらしくて。

そこにすうが突然やって来て、あんな事言ったら気分が悪くなってもしょうがないですよ」

「分かるけどな。それですうに当たるんは、やっぱり筋違いやろ？」

僕がそう言うも、すうはぶんぶんと首を振った。

「だからあの後、ちゃんと話したんです。すうが言ったことは、全部本気の本気ですって。

そうしたらみんな、分かってくれましたよ？」

「本気で……あの、友達百人作るっちゅーやつか？」

「はいっ、そうですっ」

意気込んでそう言うってくるすうのブルーベリイな目は、実際本気だった。

本当に、すうみたいなのがたくさんいれば……世界も平和になるんじゃないかなって、

そんな事思ってしまうほどの強く、澄んだ瞳だった。

普通に聴いていたら笑い飛ばしてもおかしくない、それってギャ

グじゃないのかなって目標。

でも、何て言うか、同じ言葉でもすうが言つと言葉の重みが違う。何故か、そう思えて。

「それで、あのっ……その……」

僕がそんな事を考えていると、さっきまでの凜とした様子はどこへやら。

何やら、まごついた様子で言い淀んでいる。

「どうかしたんか？」

「あ、はいっ。えっと、あの……吟也に訊きたいんですけど、どうしたら友達になれるかな？」

「何やて？」

そんななんどうしたもこうしたもないだろうと返そうとし、僕は言葉に詰まる。

改めてそう訊かれると、何か難しい気もするな。

「そうやなあ。友達なる言つたら、もう友達のような気もするし……」

さっきも言つたけど、現に僕はすうとの関係を訊かれたら、もう友達って言つと思う。

クラスメイトでもあるけど、ただのクラスメイトや思ってたらコーヒーなん奢らないしな。

「そ、そうなんですかつ？ でもっ、それって何か完璧じゃないような気がするんですけど」



すうは僕の言葉に一度納得しかけ、すぐにそんな事を言ってきた。ははあ、なるほどな。読めてきたぞ。

すうはきつと、雪菜たちとも友達になりたいんだろう。確かにそれなら言葉だけじゃ駄目な気もする。

「さよか、もつと深い仲ってことやな。……まあ僕にも、本当のことはよう分からへんけど、

そういうのってやっぱり日々の積み重ねちやうかな。

少しづつ相手を知って、自分を知ってもらって、好きな事とか嫌いな事とか分かるようになれば、

理解しあえるようになれば、もうそれは友達なんとちやうか?」

「そうなんですか……なるほど」

すうは、僕のあつてるのか間違つてるのか正直不確かな説明を聞き、何だかしきりに感心している。ちよつと世間ズレしてるところはあるけど、すうは本当にいい奴そうだから、ひよつとしたらあいつらとだって友達になれるんじゃないかなつて思えたけれど。

「僕には無理やな、女って時点でアカンけど、ここに通つてる奴らなんかは特にアカンわ」

「……どうしてですか?」  
半分独り言のつもりだったんだけど、しっかりすうには届いたらしい。

文字通り、どうしてなのか分からないって表情で僕を見上げてきた。

「どうしてって、そんなこと聞きたいんか?」

「はい、それはもちろんですっ」

僕はすうに即答されて頭をかいてしまった。

しょうもないことだけだな。でもま、いいか。

ホントは誰かに聞いてもらいたかったわけだしな。

「僕な、ここに来たの強くなりたかったからやねん。

そうは言っても、他のモンみたいに『みんなの為』とか、『世界の為』とか、そんなんやない。

小さい頃な、今も対して変わらへんけど体の弱いもやしっ子でな、そのくせ態度でかいかて良く苛められてたんや。

んでな、そんな時はいつつも幼馴染の子に助けられてたし、助けを求めた。

その子は僕と違って、女の子なのに元気一杯で、腕っぷしも強くてな。

最初の頃は別にそれでも良いって思ってたんやけど、ある日僕にも変なプライドが生まれて……

そんな自分が情けのうてしょうがなくなってきたんや。

あまりにも情けなすぎて、気づけばここにいて……そのまま入学するくらいにな。

それだけ気持ちが強かったんやと思う。もう、誰かに守られるんはまっぴらごめんやって、

みんなを守る強い奴になるんやってな」

僕は、誰にも言った事がなかった胸の内をさらけ出すように語っていた。

しょうもない事だけど、すうになら知ってもらっても構わないって思ったのもある。

すうはただ黙って僕の言葉を聞いていて。

「でもな、ここに来てな、上には上がいるってこと、思い知らさ

れたんや。

雪菜も尋も、観弥子だって僕なんかなんの役にもたたんくらい強かった。

あまりにも強すぎて、僕なんかが守る隙間もないくらいにな。

だから僕の場合、友達になるなんて絶対無理やと思う。

何っーか、情けなすぎるやろ。男として。……僕かて男のプライドがあんねん。

しょうもないもんやけどな」

この時の僕は、どうしようもないくらい子供だったんだと思う。

真実に目を背け、物事を何も知らない、そんな感じの。

( 第6話につづく )

6、信念。そんな簡単じゃないんだって（前書き）

連投、連投、でだいぶ短いです。

## 6、信念。そんな簡単じゃないんだって

「ええと、すうは思つのですが、それって吟也が強くなればい  
いってことですか？」

僕の言葉を聞き、しばらく思案気だったすうは、不意にそんな事  
を言ってくる。

「……まあ、そう言つことやるな」

それが可能かどうかは別として。

僕の拙いプライドを満足させるには、それしかないだろう気はし  
た。

「それならすうと一緒に特訓しませんですか？ 頑張ればきつと、  
なんとかなると思いますっ」

これは名案だと、すうは手を叩いて身を乗り出す。

確かにすうは実力？1の雪菜に土をつけた強者だから、僕にとっ  
ては願つたり叶つたりな話だと思つた。

「特訓か！ そりゃいいな、僕からも頼むわ」

「ホントですかっ？ 良かった。それじゃあ、一緒に頑張らま  
しょう！」

僕がそう言つと、何だか安心した様子ですうは声を上げた。

その時はまだ、すうの申し出は僕にとってマイナスにはならないし、別にいいかってくらい気分だったと思う。だからこそ、その時のすうが本当は何を思っでいて。

僕がとんでもない勘違いをしていたなんて事はこれっぽっちも気づけなかったんだ……。

それからしばらくは、約束したように暇な時間を使って、二人で特訓するようになっていた。

それにより分かったことは二つある。

一つはすうが僕なんかとは違って、とてつもなく大きな使命を抱えているってことだった。

それが何なのか直接訊いた事はなかったけど。

特訓の時や、授業なんかの時に感じたすうの底の知れない強さみたいなものが、

そう思わせずにはいられなかったんだ。

もう一つは、すうの言っていた『友達百人作戦』が、意外とうまくいっているという点と。

唯一の失策と言うか、すうが落ち込んだのは。

今のクラス定員が百人で、すうが入ったことにより入れ替わりに落ちてしまった奴がいたことだった。

すうは別に何も悪くなかったんだけど、それはそれは見るのもしんどいくらいにへこんでいて。

慰めるというか、ナットクさせるのに随分苦労したのを覚えている。

それ以外は控えめながらも大抵元気一杯で、世間に疎い所とか、考え方がちよつとずれている所とかを含めても、みんなから慕われ、頼られる、

クラスのリーダー的存在……いや、どっちかと言うと次々に頼み事をされてあたふたしているみんなの人気者、って感じだった。

ただ、そんな引く手数多な状態になっても、僕との特訓と、その後の缶コーヒー一本を着に、  
ろくでもないその日その日の会話をする習慣は続いていて。

相当お気に入りの様子のコーヒーを飲みながら今日あった事を話すすうは見ていて飽きなかったし、僕も何だか楽しくて、こんな時間がいつまでも続けばいいのにな、  
なんて思うようになっていたんだけど。

それが危うい感じになったのは、それからすぐのことだった。

元々あまり成績の良くなかった僕は、すうと特訓していたのにも  
かかわらず、

どんどん難しくなっていく授業や試験についていけなくなっていたんだ。

何が得意とか不得意とかそう言うの以前に、そもそもここに残るための、

強くなるための『信念』デターミネーションが足りないんだって先生に言われた。

それは、何の期待も、苦勞も、使命もない僕にとって、最も遠い言葉だった。

どうすればそれを得ることができなのか、何にも分からないままで……。

ついにやって来たのは「次の試験での不合格者は落第する可能性がある」と言った内容の発表。

来る時が来たなと感じ、さすがにもう限界かもしれないと、僕は思わずにはいられなかった。

その予感めいた感情は、試験まで後一週間という所まで来ても何も変わらなくて。

やっとの気分で授業を終えた僕は、その日の放課後何をするでもなく。

…。  
学院内をブラブラと散策することくらいしかできなかったんだ…。

(第7話につづく)



## 7、有頂天。変わっていく兆し

もうすぐ見納めになるかもしれないからまだ行ったことのない場所に行こうか、

なんてことを僕は考えていたのかもしれない。

しかし、そうは言っても、今日だって何も予定がないわけじゃなかった。

試験も近いし、苦手な部分を重点的に復習しようとする約束していたのに、僕が断った。

僕と違いメキメキと頭角を現し、試験でも常にトップ5に入るすうとの実力差は開く一方で。

これ以上すうの足を引っ張るのも申し訳ないし、何よりヘタレな僕を見て、

困った顔を見せるすうの目の前にいるのがしんどかったんだ。

今頃は、一人でコーヒを飲んでるんだろうか……それとも誰か他の奴を誘ったか。

思えば、授業中や特訓の時以外は、すうと顔を合わせる機会がほとんどなかったことに気づく。

友達だって言った割には、すうが普段何してるのかとか全然知らなかった。

僕って口だけだったのかな、なんて考えていると。

いつの間にやら見覚えのない、どこかのお屋敷の中庭みたいな場所立っていて。

どこからともなく調子外れなピアノの音が聴こえてきた。

(音楽室って、このへんだったっけ……?)

僕はそう思いながら、耳を頼りに音源を探し出す。

間もなく辿り着いたのは、校舎とさほど変わらない大きさの、赤レンガ造りの建物がある場所だった。

その一階の開かれた窓の向こうから、外れたピアノの音が聴こえてくる。

……と。

「むー。やっぱり壊れちゃったですかね……」

そんな聞き覚えのある声がして、僕は部屋を覗き込んだ。

見ると、部屋の中心には大きなグランドピアノがあり、その影にはチヨコソフトみたいな色のロン毛が見え隠れしていた。

どうやらそこにいるのはすうのようだった。

特訓をなんとなく断った手前、声をかけるのもどうかと一瞬思ったけど。

何か困った様子だったので、僕は窓越しに声をかける。

「おーい、すう？　どうかしたんか？」

「っ！　ぎ、吟也っ？　あれ、何でっ……あの、そのっ、っ、っ、っめんなさいですっ！」

いきなり立ち上がったと思ったら、慌てて自分を見回し、わたわたしながらいたずらのバレた子供のように部屋を出て行くうとするすう。

その驚くほどのリアクションに、夢遊病者なノリでぼーっとして

いた僕は、はっとなつて言った。

「ちよっ……待てや！ 何でお前が出てく必要あんねんっ、そんなしなくても僕が帰るから！」

するとすうは、言われた通りにぴたりと足を止める。

それを確認して、僕がきびす返そうとすると、更に慌てた様子で声がかかった。

「あ、吟也、待って、今は違うんです！ すう、ピアノ壊してしまつたと思つて、

そしたら急に声をかけられたから、びっくりしたんですっ！」

「……さよか、んで？」

「んで？」

「だから、引き止めた理由は何やつて訊いてんねん……特訓サボつたことか？」

顔を合わせてしまつたからには仕方がない。

僕が開き直つてそう言つと、すうはぶんぶんと首を振つた。

「違うんです、引き止めたのは誤解を解こうと思つたからなんです。」

決して吟也が嫌で逃げたんじゃないって言いたかつたのです。

吟也に、これ以上嫌われたくないですから……」

窓際に寄つて来て、すうは必死にそんな事を言う。

僕はそれを聞いて呆れてしまつた。

「嫌われる？ 僕がいつすうのこと嫌つたつちゅーねん」

「だつて……最近特訓も休みがちで、お話してもあんまり楽しそ

うじゃなかったから」

まるで全て自分が悪いんですと言った感じでそう呟くすうに、  
そんなわけないと僕は笑って言っちゃった。

「だからすうを嫌いになったってか？　ないない、そんなんある  
わけないやろ」

「違うんですか？」

「そうや」

「そっか……すうの勘違いだったんですね」

良かったーと安心したように息を吐くすう。

そんなすうに、何故だか違和感を覚えたが、僕はとりあえず言葉を  
続けた。

「ほら、もう試験もすぐそこやろ？　今度ばかりは危ないんちゃ  
うかて、

ちよつとブルーになつとっただけやがな」

だったら尚更特訓サボったらアカンやるとセルフ突っ込みを入れ  
つつ、

僕は誤魔化し笑いを浮かべる。

「今度の……試験」

するとすうは、悲しげに俯いてそう漏らした。

また誰かが落ちるかと思うとやりきれないのだろう。

すうは実力はあるけど、競争の世界に身を置くには純粹すぎるか  
も知れないな、なんて思ってた。

「ところで、ピアノが壊れたって？　何か困つとったまいたいやけ  
ど」

僕が話題を変えるためにそんな事を言つと、すうはバツの悪そうな笑みを浮かべてそれに答えた。「はい、その、急にピアノの音がおかしくなつて……調律もしたし、

そんなに乱暴に扱つたつもりはなかつたんですけど」

「さよか、ならちよつと見せてもらつてもええか？」

「え？ あ、はい」

僕はすうの許可を得ると靴を脱ぎ、片手で窓枠を飛び越えると中にお邪魔させてもらった。

「あつ、そんな所から入つちや、怒られるですよ？」

「かまへんつて、帰りはちゃんとドアから帰るから」

こんな部屋あつたんだなと思いつつ、少し慌てた様子でそう言うてくるすうを軽くあしらいながら、ピアノへと近づぐ。

それは、音楽室にあつたピアノにも引けを取らない年代物のグラウンドピアノだった。

生活感を感じるこの部屋の、グレードを二つも三つも上げていそうなシロモノだ。

「どれどれ？」

僕は、鍵盤に指を落とし、音の変わり具合を確認した後、ピアノの下へと潜り込んだ。

「ちよつくら中見させてもらうけど、堪忍してや〜」

「吟也、ピアノに話しかけてるのですか？」

「……まーな、クセみたいなもんや」

不思議そうな声をあげるすうに、僕はそれだけを返すと、さくつと中身を点検。

問題修正箇所を捕捉し、あっさりと修復し、再び立ち上がる。

そこまでの時間ジャスト五分。

「あれ？ 吟也、もう終わったのですか？」

「ああ。このピアノ、しばらく埋もれてて、最近使い出したばかりやろ？」

「え？ はい。すうがここ最近使うまでは寮の倉庫に眠っていたんですって」

何で分かるのです？ といった表情ですうは答える。

僕はやっぱりなと呟いてから言葉を続けた。

「……埃がな、詰まっていたんや。その状態で弾いたから、音が割れたんやな」

実のところ、ピアノの仕組みなど全然分からない僕だったけど。まさか本人に聞いたとも言えず、誤魔化すようにそんな適当なことを言う。

「ふ、ふーん。良く分からないですけど、もう直ったってことですよね？」

「せや」

まあ分からへんやろなーと思っていて、再び鍵盤に手を触れ、正しい音が出ているのにすうは感心したらしく、何やら羨望の眼差しを向けて、言った。

「すごいなー、吟也ってこんな特技があったんですね」

「まあな、人がつくったもんを改造したりするのが昔からの趣味なんや」

実際は、『もの』の要望と意見を聞いているだけだけど、なんて

内面で思いつつ。

僕が少し得意げになっていると、  
さらにすうは言葉を続けた。

「ねえ、吟也。この特技を試験とかに応用することと違って出来ないんですか？」

「あ……」

僕はそれを聞き、言葉を失う。

何故なら、そんなこと考えたことすらなかったからだ。僕が、生まれつき持っている、『もの』に干渉する力。

何故だか分からないけど、僕には『もの』の声が聞こえだし、それに宿る『もの』の姿が見えたりすることがよくあつて。

明確にそのことに気付かされたのは、ジャスポースに来てからだっただけ。

自分は普通な存在でないからこそ、ここへ連れてこられたんだな、なんて妙に納得してもいて。

ここで、今すうに言われたこと。

よくよく考えてみると、いくらでも融通が利くんじゃないかって気がしてきた。

「ナイスアイディアやんけ。それもらったわ」

目から鱗の大発見に、僕は声を上げる。

思えばこの一言こそが、僕の、僕としての力に目覚めた最初のきっかけだったんだと思う。

そんな有頂天な僕を見て、すうも自分の事のように喜んでいたのが印象的で……。

（第8話につづく）



## 8、後悔。さいごにしたい旋律

その後、僕は流れに乗ってすうの弾くのピアノを聴くことにした。無意識にもピアノとすうが両方見える位置にイスを陣取り、聴く準備をしていると、

落ち着かない様子ですうは言う。

「本当は、歌つきの曲なんですけど、すう歌はあんまりうまくないので、ピアノ一本でいきますね」

こりやまたご謙遜を、音系魔法サウンドだつて段ちのレベルのくせにと思つたが。

それなりに弾くことへの緊張があるらしく、僕は黙って頷く。

すうはそれを受け、表情を引き締めてピアノに向き直ると、鍵盤に指を置いた。

その曲は、何て言えばいいんだろう……。

たとえるなら、しんしんと降り積もる雪のようなバラードだった。ただ、終始曲の根源に在するのは哀しみ……そして強さ。

永劫繰り返す時の中で、儂げに生き、死を抱き続ける。そんな旋律が僕の心を揺さぶった。

それが何を現しているのか。

顔を上げ、曲を奏でるすうに目を奪われ……僕は理解した。

この曲は、きつとすう自身なんだって。  
ピアノの優しく切ない音につつまれたすう。

そのアプリコットブラウンの髪も。

ブルーベリーの澄んだ瞳も。

滑らかな質感を持ち、容易く手折れてしまいそうな華奢な手足も。  
どこまでも純粹さを追い求めるかのようなまっさらなアンサンブルも。

その全てが神秘的であり、人を超越した何かを思わせた。

だからこそ、何か足りない。

決定的な最後の一片が、今のすうには欠けている気がして……。

そんなことを考えていると、やがて曲は終わりを告げる。

気が付くと僕は、自然と拍手をしていた。

こんな間近で本物の演奏ってやつが聴けて、感動ひとしおだった。

「今の曲は……なんて名前なんや？」

呟くように出たのは、そんな言葉。

「『終の火、うたかたに溶ける』……です」

すうには終わりにしたい何かがある。

それは、そんな事を考えてしまうような……重いタイトルだった。

その、どこまでも悲しみに沈む、だけど心に良い旋律が耳から離れない。

だから、僕は自分が受けた感動を少しでも分かってもらったために、素直な感想を述べることにした。

「すうこそすごいやん、こんな特技あつたんやな。プロ並み？」

「い、いくらなんでもそこまでじゃないですよ。褒めすぎですって」

それは大げさですよって照れ笑いを浮かべるすう。

「そうか？ 僕にはそんなくらい凄いもんに聴こえたけどな。……なんて言うか、感動した。」

「冗談やのうて、ピアノで飯食っていけるんちゃうかって思ったで」

こんないつ死んでしまうか分からない危ない橋を渡るよりも。

他にもっと進むべき道があるんじゃないかって、そう思いながらそう言う。

すうはふるふると首を振ってそれに否定した。

「駄目なんです。だってすうの役目とは違うから……」

「役目ってなんや？ 好きなもんやるのに何が駄目なんや？」

重い諦観を含んだその言葉に、僕は何かもやもやしたやり切れない思いを抱いてそう聞き返す。

すうは、そんな僕に少しだけ戸惑った後、言った。

「すうには、生まれた時から……やらなくちゃいけない役目があるのです。」

そのために、強くならなくちゃいけないから……」

「それで、ここに来たって言うんか？ 生まれた時から……  
そんな押し付けられたものちゃうんか？」

僕の声はよく分からない不安のようなもので、だんだんと強くな  
っていたと思う。

しかし、すうはまた首を振り、言った。

「そんなことないです。すうは、この役目が、すうが頑張って世  
界を守るってことが好きなのです。ピアノよりも好きなのです。  
だから、ここに来たんです……」

その言葉の先にあるものは、強い意志の宿った瞳。

有無を言わせない力を持ったその瞳に飲まれそうになって、僕は  
視線を逸らしてしまった。

僕にはないその強さに、僕が探していたその強さに、嫉妬と羨望  
が混ざったような感情を覚える。

「さよか。やばな事訊いてもたみたいやな。だから、ここにいる  
んやもんな」

「あ、でもここに来たのは家にいるのが嫌だったっていうのもあ  
りますけどね」

僕が頭をかいてそう言うと、しかしすうはなんでもない事のように  
照れ笑いをして、

そんな言葉を返してくる。

言葉面だけを取ればその言葉の意味が、一人暮らしが自由気まま

でいいとか、

うるさい親のお小言を聞かなくて済む、みたいな感じなんだけど、  
例えそう思ってもそれを口に出すタイプには見えなかったから  
……何か引つかかる物があった。

「……何で嫌になったん？」

出たのは、そんなストレートな言葉。

言ってから何でもっとオブラートに包めないのかなって思ったが、  
それでもすうはちゃんと答えてくれた。

「家にいると……お父さんとお母さんに会うんです。

世界を守る英雄になることを教えてくれたのはお父さんとお母さん  
なのに。」

すうがそれをしようとする、悲しそうな顔をする、お父さんとお母さん  
に……」

そして聞いた瞬間、小さな後悔が僕を襲った。

誰もが心の奥に鍵をかけて、しまっておきたいような事まですう  
が話してしまいそうだったから。

僕に尋ねられたというだけで、全てを答えてしまいそうだったか  
ら……。

(第9話につづく)

## 9、ハプニング。ヘタヘタしないでっ

「最近、何もすうがしていない時でもお父さんとお母さんは、すうに悲しい顔を向けるようになりました。

二人はとっても仲が良かったのに、ちょっとした事でもケンカするようになっ……

すうがいなければ、二人がそんな風にケンカすることなかったんですけど、

すうは、生きて強くないといけなかったから、サウザー学院長にお願いして、

ここに来たんです。それで……」

何かの物語を語るかのように、まるで自分には関係のないことであるかのように。

すうはすう自身の事を語りつつける。

「もうええ、もうええって、分かったから」

「え？ あ、はい……」

耐えられそうになくて、思わず止めた僕の声に驚いたのか、びくついて言葉を止めるすう。

僕がそのまま自分のデリカシーのなさに唸って自己嫌悪している

と。  
すうが申し訳なさそうに口を開いた。

「あの、吟也？ ごめんなさいです。すう、吟也に嫌な思いさせるつもりじゃなかったのです。」

ほら、吟也言っていたじゃないですか。相手の事を知ると同時に、自分のことを知ってもらうって。前、吟也が自分のことを話してくれたから、すうもって思ったのです……その、ごめんなさい」

「……………」

僕は啞然となる。確かに僕は、そんな事を言った。

なんとなく提示した、友達の条件。

すうは、ただそれを実行しただけだったんだろう。

「そんななんべんも謝んなや。すうはなんも悪い事してへん。むしろ話してくれて良かったわ。」

自分がどんなに甘っちょろいかよう分かったしな。逆に感謝せなあかんくらいや」

「感謝なんて、そんなっ」

とんでもないって感じでオロオロするすうを見て、僕は苦笑を漏らし、言葉が続ける。

「それにな僕、すうのことやっぱりすごい奴やって思った。尊敬できる奴やって。」

きつとな、すうのおとんとおかんも今ここで頑張るとるすう見たら誇らしく思うんちゃうかな、

自慢の子やーってな」

「ほ、ほんと？」

「こちらを伺うようにそう聞いてくるすう。」

「ああ、僕はそう思っで」

こんなすう見たいな奴、自慢に思えない親なんて親じゃないって、



僕は本気で思ってた。

「……………」

僕が気持ちのままにそんな事を言つと、すうはそのままぴたりと黙り込んでしまう。

「どしたん？ 電池でも切れっ……………」

そして僕はそう言おうとして言葉を失ってしまふ。

すうの、瞳から零れる、一筋の涙を目の当たりにして。

それを目にした瞬間、今の今まで毛ほどにも感じていなかった心音が、

激しく胸を叩いているのを感じていた。

(何や、これはっ……………?)

時が経てば経つほど収まらない動悸に胸を押さえる。

呆気に取られたように何も言わない僕を見て、自分が涙を流していることに気づいたら嬉しいすうは、はにかむように笑顔を見せて、言った。

「へへ……………嬉しいのに涙出てきたみたいです。これが嬉し涙ですよね？ すう初めての嬉し涙です」

笑い泣きのその表情は本当に喜びに溢れていて。

僕は心臓を鷲掴みされたかのような衝撃を受ける。

……………素直に、可愛いつて思ってしまった。

「って、ちょっと待てや！」

「……？」

僕は自分の考えに思わず突っ込みを入れる。

可愛いってなんだっ、年下とは言えこいつは男だぞっ！

……男だよな？ そっぴいや年いくつか聞いてない気も。

僕は、危ない精神状態に揺さぶられながら、まじまじとすうを見つめる。

男にしては長い髪、綺麗な肌、顔立ちだっって中性的で……。

そもそも僕って何を根拠にすうのこと男だっって思ってたんだっけ？

何か確たるものがあつたような気がして思い巡り……すぐそれに思い立った。

そうだ、制服だ。

すうは男子学院生用の制服を着ていたから男だと疑わなかったんだ。

「あ、あの……何ですか？」

不躰に眺められ、居心地が悪くなつたんだろう。

そんな言葉と上目遣いも、男には見えなかった。

ふと、そこまで考えて僕はすうの違和感に気づく。

今、すうが着ているのは私服なのだろう。

薄青色のカットソーと白のブラウスのアンサンブル。  
生成り色のキュロット風味のパンツ。

一見そうは見えないが、少なくとも男が好んで着る服装でないのは確かだった。

「なあ、すう？ 今更訊くんも失礼すぎる話なんやが。あんさん、女……か？」

「え、ええっ！ ど、どうしてっ？ ち、違うですよっ！ すうは……違うんですっ！」

見ていると哀れなくらいにうろたえるすう。

しかし僕としても、禁断の領域に足を踏み入れたなんて認めたくなくて、必死に言葉を続けた。

「だ、だってその服、男はフツー着ないやろ？」

「こ、これは違うのですっ！ まさか吟也がここに来るなんて思わな……じゃなくって！」

すうはこう言う服が好きなのですっ！」

「ホンマかいな？」

「本当ですっ、だってすう、ホントは男の子でも女の子でもないんですっ、

だから女の子の服もしょうがなく、持ってるのです！」

あの缶コーヒーみたいにとっちつかずの中途半端さんなんですっ  
「！」

もう自分が何言っているのかも分からない様子ですうはまくし立てる。

しょうがなくって言った割には随分お洒落な服だったし、

すうが何で誤魔化そうとしてるのかは分からなかったが、隠したかった事だけはなんとなく分かった。

「おいおい、それはまた強引な解釈やなあ」

それでも瀬戸際にいた僕の言葉は止まらなくて。

「強引じゃないですつ、嘘だと思うなら、すうの身体、見ればいいですつ！」

なんて言葉を返された。

「な、アホつ！ や、やめんかいつ！」

何だこいつ、なんでこんな、いきなりムキになってるんだっ？

自分の失言のせいだろうとも思ったが、突然の行動にパニックに陥りつつも、

今にも服を脱ぎだしかねないすうの手を、僕は何とか押さえつけるのに成功する。

だが、成功したのはいいが、結果的にすうを抱きかかえるみたいになっていて。

いったん女の子だっと思ってしまったから、もう女の子にしか見えなくて。

小柄だと思っていた背丈も、柔らかく細い身体も。

みんな女の子だっって確信させるには十分過ぎるほど十分で……。

「は、離してくださいっ！」

すると、すぐ傍で聴こえてきたのは、そんな事考えてたのがバレてしまったのかと思えるすうの声。「す、すまんっ！」

僕は慌てて離れるも、すでに手遅れだったみたいで。

「……っ」

さつきとは違った意味で泣きそつな表情のすうは。そのまま何も言わず、部屋を出て行ってしまった。

「な、何でこないになつたんやーっ!？」

故に僕は、何しにここに来たのかも忘れて、ただそんな声をあげるしかなくて……。

(第10話につづく)

## 10、シヨール。撤回できない約束

で、まあ、その日がこれで終わればまだましだったんだけど。

嵐はまだ過ぎ去ってはいなかった。

それは、僕が、収まらないドキドキ感と不思議な高揚感を持って余しつつ、

一応言われた通り扉から出た時だった。

「……ぐふふっ」

いきなり奇怪な笑い声がして、そんな声のした方に振り向くと女子学院生用の制服の上に、藍色のケープを羽織った女の子が一人、

手に持っていた本で顔を隠すようにしてこちらを見ている。

はつきり言って怪しいの一言だった。

声をかけるのもどうか思ったが、何か気になったのでとりあえず声をかけてみることにする。

「何や、何か用か？」

「……おいつす、覗き変態魔さん。すうに何した？」

その女の子はしゅたつと片手を挙げ、あまり抑揚のない声で、いきなりとんでもない事を言ってくる。

よくよく見ると、そいつは坂額さかびたい・えみ恵美とか言う子だった。

アマゾナイトの瞳に、氷のような藍色のボブの髪。

もう少しで落ちそうになって所に結んである側頭部の白いリボンは、間違いない。

「何や、坂額っ。僕はなんもしてへん！ 変なことゆーなっ」  
してないよな？ そんなこと思いながら叫んだのがいけなかったのか……。

坂額は何かに驚いたそぶりを見せた後、ぼむと手を叩いて言った。

「何処の変態魔さんかと思ったら……女はキライや、とか言いながら学院の女の子のプロフィールを全部把握しているって噂の……むっつり吟さん？」 「てめっ、知っとなってわざと言ってるやる！」

何でそんなことまで知っとなねん！ とは言えずに、とにかく突っ込みを入れる僕。

すると坂額は、辺りを気にする素振りを見せた後、人差し指を唇に添え、

静かにしろのジェスチャーを取って言った。

「あまり騒がないほうが……いいと思うよ、吟さん。死神が鎌を構えているから」

「物騒なこと言っなっ！」

こいつの場合、なまじ未来視だか千里眼とかいう力持つとるせいで洒落にもならん。

「だから、騒がないほうがいいって言うのに……吟さんは馬鹿？ 馬鹿なの？」

「こ、このっ、ニセだけと関西人にバカゆーな！ それも二回もっ、おもっ

きしへ「むやる!」

僕がそう言うと、坂額はいかにも何かたくらんでそんな表情で、ぐふふと笑みをこぼす。

どうでもいいが、その笑い方似合っていないから止めた方がいいんじゃないかと思っていると。

「私が……ここで『キヤーツ、誰かつ、助けてえっ!』って叫べばきつと面白い事が起きる」

「な、何を言ってる……」

とてつもなく嫌な予感を覚える僕に、坂額は変わらぬ笑みのまま答えてくれた。

「吟さん、今自分がどこにいるのか分かってる?」

「どっつて……どこやねん」

そう言われ、辺りを見回す。

どっかで見た事があるような、ないような、典型的な洋風のお屋敷。

床のカーペットが赤よりも軽めの暖色系な所がアットホームさを感じさせる。

「ここは女子寮、じょ・し・りょうなの。言ってる意味、分かる?」

「なっ……」

僕はまたまた言葉を失った。

どっかで見た事があるような気がしたのは、男子寮に似た造りだったからなのだと気づく。

って! 冷静に状況を把握しとる場合じゃなかった、早うこっか



ら出ないと！

脱兎のごとくきびすを返し、そこから立ち去るべく駆け出す僕だったが。

しかしそれは、坂額の心底楽しんでそんな声に止められた。

「逃げるのはなし、これ、なーんだ」

言われるままに振り向くと、坂額が手に持ってひらひらさせている一枚の写真が目に入る。

知っている僕が見ればいきなり早まった真似をしようとしてるすうを止めている絵にすぎないが、

知らない人が見れば誤解されまくり間違いなしのシロモノだった。

「て、てめっ……いつの間にそんなものをつ！？」

「逃げたらこれをばら撒いてある事もないことも話す」

そう言っつてニヤリと笑う坂額。

どう見てもそれは脅しの笑みだった。

「な、何が目的やねん、そう言っつてことは、僕に何かさせる気やなっ」

「さすが吟さん、話が早い」

僕が三文芝居のような地団太を踏み掛けると、坂額はそんなお決まりのセリフを吐く。

「いいからっ、早う言えやっ！」

「訊きたいことと、お願いがふたつ、あるの。まず質問。

これは前々から誰かに訊いてみたかったんだけど……吟さんは、『すう』のこと、どう思っつ？」

「どう思っつてなんやっ、僕は別にどうもっ……」

僕が思わず抗議めいた声をあげると、それを遮るように坂額は言い直した。

「言い方が悪かったみたい……吟さんは、すうのことが男の子に見える？」

それとも女の子に見える？」

それは、一見意味のないような訳の分からない質問だった。

でも、いろいろ考えてる暇も選択肢もなかった僕は、思っまま正直に答えた。

「せやなあ。最初は男やって思ってたけど、今はその……女にしか見えへんな」

坂額は僕の言葉にふむふむと頷いて返す。

「私には最初、男の子にも女の子にも見えたの。……というより、両性具有だっと思ってた。

でも違っみたい。だっつて今は、私にも女の子に見えるから」

アンドロギュニス  
両性具有

神さまとか、神族っつて言われるものたちの幼年期のことをこう呼ぶっつて聞いた。

中には大人になっつてもそのままの奴もいるらしいが、小さい頃は性別が決まっつておらず、

何かのきっかけで性別が確定するらしい。

「で？ そんなん訊いて何か意味があるんか？」

「……別に。ちょっと知りたかっただけ」

僕の当然の問いに、坂額はそっけなく答える。

「じゃ、次はお願い」

そしてすぐにそう続けて、意地悪な笑みを復活させた。

僕は、嫌な予感がぶり返して腰を引いてしまう。

「お願いは、今週末の試験で落ちないこと」

「……は？」

一体どんなひどい事をお願いされるのかと思っていた僕は、拍子抜けしてしまった。

「何やそれ、それがお願いなんか？」

「そう。何が何でも合格するの。吟さんは未来の見えない……運命の先駆者だから」

表情は意地の悪そうな笑みのままだったが、その声色は真剣だった。

言ってる意味は、よう分からへん、って感じだったけど。

「もとよりそのつもりやけど、何かそれって坂額にはなんのメリットもないような……」

これじゃあただ応援してくれただけじゃないか。

ひょっとして坂額って良い人？

「メリットならある。吟さんが合格してくれないとつまらない。

この写真で強請る人がいなくなるから……」

前言撤回。やっぱりこいつは悪い奴だ。

ハナからそういつつもりだったに違いない。

合格でも不合格でも僕を陥れるっていうのは変わらないわけだ。

僕は半ば観念して、息を吐いた。

「しゃーないな。ま、坂額に応援してもらたと思って頑張るわ。

とは言っても、僕のやりたいようにやるだけやから、はっきりと断言はできひんけどな」

「うん、それでいい……」

僕がそう言うと、坂額は意地悪な笑みを初めて柔らかな笑みに変えた。

お、こいつもちゃんと見れば以外と可愛いじゃないか。

……はっ、いかんいかん。

さつきから僕ちよっとおかしいぞっ！

「じゃ、そゆことでっ、さいならっ！」

再び襲いくる胸の昂ぶりを悟られたくなくて、僕は今度こそ踵を返す。

「……あ、吟さん、あと一つだけ」

「まだあるんかい！」

そのまま壁にぶつかったように止まり、僕はもう一度振り返る。

「名字で呼ばれるの慣れてないから、名前で呼んでほしい。……

『えっちゃん』でも可」

「分かった、えっちゃん。ほな、よろしくな！」

「……っ」

僕が恥ずかしくてリアクションに困るんを見たかったんだろう

が、そうはいかんってやつだ。

逆にふいをつかれたように言葉を失うえっちゃん……もとい恵美に、してやったりとか思いつつ。

僕は何とか誰にも見つからずに女子寮から出ることに成功したのだった……。

(第11話につづく)

## 11、ヤンテレ未満。ネクロなお人形さん

それから、試験の日まではあつという間だった。

すうは、僕の事を避けているようで、授業中に話すことはもちろん、  
特訓を二人でする事もなくなった。

でも、それは当然のことだろうとも思っていた。

いくら本音を隠す天邪鬼なセリフだったとしても（この事に気づいたのも最近だけ）、

すうの目の前で、女は嫌いやとか随分失礼なこと言った気もするし、

すうが性別を隠していたせいもあるとはいえ、恵美の言う通り女子寮を覗き、

侵入までしたのは一応事実なんだから避けられるのは当たり前だと。

また、それとは別になんとしても次の試験で不合格にならないよう、  
自分一人だけで足掻いてみたかつたって言うのもある。

多分、ここに来て本当の意味で真剣に、僕自身のことを考えたんだと思う。

僕が一体どんな力を持っている。

僕が掲げるべき信念は何なのかを。

そして……運命の試験が始まる。

今回の試験は、魔法によって作られた【異世】と呼ばれる擬似空間、ステージごとに分けられているそれを、学院生各々の力で突破するという、実践実技試験だった。

僕ら学院生は五人一組のチームに分けられ、その五人と協力、あるいは競争しあって提示された条件をもとに、様々なトラップや仕掛け、謎解き、魔物たちといった難関を乗り越えていく……といった感じで。

この試験の怖い所は、擬似空間とは言っても死ぬほどのキズを受けたら本当に死んでしまうってことだった。

さすがに完璧に死んでしまう前には先生方が助けしてくれるらしいが、

それはイコール不合格を意味する。ギブアップも同様だった。

もし五人で協力する場合、言うまでもなくこの試験において大事なのはチームワークであることに間違いはないのだが。

いつものように、異世『ピアドリーム』の、自分専用の入り口をくぐり、

選別された五人が集まる機械の要塞のような広場までやってきて……僕は思わず天を仰いでしまう。

広場の中心、試験の緊張などまるでない様子で話し込んでいるのは、三人の女の子たちだった。

一人は、長くしなやかな藍色の鞘つきの刀を帯び、凜とした（えらそうとも言つ）気高さを発している董色の髪 of 少女、雪菜。

もう一人は、そのすぐ傍でこれからの試験が待ちきれないといっ

た様子で念入りに柔軟してる姿すら眩しいアルビノの少女、尋。

そして、三人目は思ってた以上にそんな二人とも仲良さげに会話をしている、

僕と同じ男子学院生用の制服に身を包んだ、まさに中性的って言葉が似合う少女、すう。

あまりにも出来すぎていて、滅茶苦茶を通り越してドキュウに気まずい。

「……あら、最後のお一人はどこのだなたかと思ったらあなたですか。

せいぜい私たちの足を引っ張らないでくださいね」

「へいへい、分かってるっちゅーの、言われなくたって」

それでも相手にしないわけにもいくまいと思っただろう。

ろくに視線も合わせずにそう言ってくる雪菜に、僕はそっけない言葉を返した。

「ちょっと、吟也さんやる気あるの？ 吟也さんが不合格にでも

なったらわたしたちのせいになっっちゃう場合だってあるんだから、ちゃんとしてよね！」

「分かっとなる言ってるやろ、二度も言わすなや」

僕の態度が気に食わなかったんだろう。

当たり前のようにつかつかかって来る尋に、ぴしゃりと言り返す。

こういう時、関西弁は（偽モノだけど）便利だなとつくづく思ったりもした。



一瞬騒がしくなったその場が、再び気まずい空気に支配される。しかし、それをすぐに破ったのは、すうだった。

「あ、あの……吟也……そのっ、おはようです」

僕がやって来たたとたん俯いてバツの悪そうな顔をしていたすうは、そんなんでも律儀に挨拶をしてくれた。

「ああ、おはようさん。……そうや、すう」

とりあえずこの前のこととか諸々の事で詫びを入れなあかんと思っていた僕は、

それを言葉にしようとして一歩近づこうとして。

スチャッ。

ごく間近で聴こえるナイフが添えられるような音。

それまで全く何の気配もさせず、僕の首に宛がわれたのは、赤銅色のナイフだった。

「……っ」

びびってそのままナイフに突っ込みそうになった僕を見上げ、

睨み付けていたのはこれまた一人の女の子。特徴的な、透けるような薄桃色のツインテール。

燃えるようなチェリーレッドの瞳には、隠密行動を生業としているかのような力がある。

確か名前は寂蒔沙柚じやくまく・さゆとか言ったな。

彼女がそうすると四人目、か。

隠れて僕をお出迎えとは……これはまた随分と警戒されたもんだな。

「なんやねん、い、いきなりっ」

「……それ以上すうに近づくな。すうはお前のような下賤の者が近づいていい存在じゃない」

「ち、ちよつと！ 沙柚っ、何言ってるんですっ!?!」

「すうは黙ってて。こいつはすうの心を惑わせた。そしてその意味を欠片も理解していない。」

だからこそ、許せない。あときは邪魔が入ったが、今度こそ容赦しないから」

沙柚は、すうの言葉を遮るようにして言いたい放題言ってくる。っていうか邪魔って何？ どうやら、沙柚は自分のことをすうに仕えるべき忠臣か何かだと思ひ込んでいて、それを今まさに実践しているといった感じだった。

すう自身は、それをあんまりよく思っていないようだったけど。それでも沙柚の言っていることは間違っていないような気がした。多分、僕が色々やらかしたのを知ってるんだろう。

それに、前回までの成績で見ても、すうを筆頭として上位を雪菜と尋が独占していたし、

沙柚だって常にトップテン圏内をキープしている。

ドベから数えたほうが早かった僕なんかとは、正直格が違っただろう。

でも、だからこそ、そんな沙柚の態度は僕にとって都合が良かった。

「ま、その通りやな。言う通りしといたるわ。……にしてもええナイフやな。」

雪菜の刀にも引けを取らん感じ？ 沙柚に愛されとるのがよう分かる。

分かりすぎて首が飛んでしまいそうやから、ええ加減離して欲しいんやけど」

「そんなに褒めたって何も出ないぞ。そんなことで私が離すと思っっているのか？」

僕の皮肉も通じず、そんなことを言ってくる沙柚。

この反応を見る限りでは、自分にも冷徹な主のためだけってわけでもないらしい。

僕は、薄く笑みを浮かべて言った。

「いいから放しや、まだ始まってもないのに血なんか流したら自分が失格になるで」

「……食べない奴」

やるなら中でやりやあいいだろみたいな態度の僕に、沙柚はそう呟くとナイフを引っ込める。

あー死ぬか思った。まだ首の辺りがひやひやする。

でも、こうなるとすうに詫び入れるのも一苦労だな、なんてちよつと思っ。

こいつら全員の前で謝んのもなんか恥ずかしいし、すう、ちよつといいか？

なんて事はどう見ても無理そうだし……。

表向きには敢えて挑発的な笑みなんぞむけつつ、僕はそんな事を考えていて……。

（第12話につづく）

12、天邪鬼その2。そんな目で僕を見ないで

さて、どうやってすうに声をかけるべきかと思っていると。

まさにそのタイミングで広場の縁にあるスピーカーから聞こえてくるジュアナ先生の声。

「はい、オーゾン班のみんな、準備はいいかな？ 早速今回の実技試験を始めるよ〜」

準備はいいかな、とは白々しいと思った。

きっと僕らの会話が終わるのを待っていたんだらう。

そんなことを考えていると、ポテッと頭の上に落ちてくる巻物タイプの指令書。

それは、魔力の塊であったのか、そのまま吸い込まれるかのよう  
に頭の中へと消えていって……。

「今のはね、五人それぞれ別々の、この試験をクリアするための条件やヒントなどが書かれたものなの。与えられたその条件やヒントを班のみんなに教えるのも自由、教えないのも自由。後は、中にいるナビに従って、ゴールを目指してね！」

わざとやっているのが確実なくらい明るい声でジュアナ先生は説明を終える。

後は全て僕らでやれ、ということなのだらう。

僕は先生から提示された条件とヒントを見て、思わず笑みをこぼ

してしまった。

「……貴様、何をたくらんでいる？ その顔はなんだっ」

「っさいボケっ、この顔はもともとじゃい。それより、どうすんねんな？ ヒントと条件、ここで出し合うんか？」

僕は目ざとくつつかかってくる沙袖をあしらい、先を促す。

「いえ、とりあえず中に入りましょう。始まってから教えあつてはいけないと言われていますし」

「中に入って協力するステージなのか、競争するステージなのか確かめなくちゃね」

雪菜や尋の意見はもつともで、それに異を唱えるものはなく。ステージへとつながる扉から、中に入ることとなった。

「……」

ただ、すうは一人、さつきから続くピリピリムードが嫌らしく、溜息なんぞ吐いている。

「すう、僕が言うんも何やけどな。試験中は集中せな、足元掬われんで？」

「あ……は、はいっ」

すうは、僕が声をかけたのに驚いたらしく、縮こまってそう答えた。

一応ただの前置きだから、あんま恐縮されても困るんだけどな。

「……それから、いろいろと堪忍な」

「えっ？」

そして、僕は言っておきたかった一言をすうだけに聴こえるように言つと。

再び沙柚にナイフを突きつけられる前にさっさと中に入ってしまったことにした。

すうは何だか呆気にとられたようだったけど。

これで覚悟完了、だ。

心置きなく、試験に集中できるってもんだ。

後は、僕の運と実力次第って所だな。

いよいよ試験が行われるステージの中に入ると。

目の前には凝った岩壁がおどろおどろしいフロアがあり、その突き当たりに二枚の扉があった。

僕らがそれを見て、フロアの半ばまでやってくると、どこからともなくナビの声が聞こえてくる。

『ようこそ、実践試験用ステージ、開かない扉へ。

このステージは五人が協力してゴールを目指すものです。

ナビの終了後に、二つの扉は開かれますので、事前に提示された条件とヒントを元に、

頑張つてステージクリア、してください』

それだけ言ってナビはぷつりと途切れ、それと同時に、鉄製の頑丈そうな二つの扉が音を立てて開いていく。

……班協力か。僕は正直胸を撫で下ろしていた。

どちらかと言えば競争タイプの試験のほうが悪手だったって言うのもある。

「協力……ですか。それではお互いの情報を提示することにしましょう」

雪菜の言葉に、やっぱり異を唱えるものはいなかった。

情報を言う言わないは、個々の自由だが、ここで拒む理由はない。

提示された僕以外のヒントと条件を要約すると。

1・二つの扉の先には、最終的にゴールにつながる扉があるフロアと、

その扉を開けるための鍵になるスイッチがあるフロアに別れており、

扉を開けるためにはスイッチを押すものと、扉の前に立って待つものといったように、

二手に別れなければならない。

2・今回のステージは6×2のフロアで構成されており、その難易度は変化する。

その一つ一つのフロアはやはり扉で区切られており、そのための鍵も探さないといけない。

3・制限時間はなし。合否はゴールまでの様々な判断材料から算



出したポイントで決まる。

そして、各フロアの扉を開けるとその場で連絡が取れる。相談も可。

こんな感じだった。

「さあ、後は貴様の情報だけだ……早く言え」

「んー？ 情報提示するしないは各自の自由やなかったんか？」

でもって僕は、白々しくもそんなことを言っただけ。

「そんなのずるいよ！ わたしたちは教えたのにつ！」

「吟也……」

「今回は班協力なのですよ？ 情報を提示しない、意味が分かりませんわ」

僕の言葉に、そんな人だとは思わなかったって感じの非難の聲がかかる。

そうや、僕はそういう奴なんだぜ、やっと気付いたか。

心底見損なってくれてていいんだぜ。……なんてほんとはちっとも思っただけ。

「そんな目で見んなや。誰も言わんとは言っただけやろ？」

「ただなあ、言っただけ損やしなあ」

「だ、大丈夫ですっ、吟也だけ損になるようなこと、しないから」

真正直に、自分の気持ちを訴えてくるすう。

まずいなあ、また動悸が激しくなってきたぞうだ。

あまりにまっすぐすぎて、ちょっとだけ僕ってなにやってんだろ  
うな、

なんて思っちゃったのは……内緒にしておきたいところだね。

( 第13話につづく )

13、いやなやつ。ちょっとノリノリになってきた

「さよか、それなら話たるわ。……僕がもろたんは、『五人の班のうち、一人でもギブアップした場合、連帯責任で班全員今回の試験、不合格になる』ってやつや」

僕は、仕方ないなあ、とばかりに肩すらすくめ、そんな事を言う。

「そう言う事は早く言えっ！ 知らなかったらみんなが大変なことになっていたじゃないか！」

「みんなが大変、やて？ 大変なのは僕だけの気がするけどなあ。あんさんらは試験一回くらい不合格でもどうつてことないやろ。僕は、これ不合格になったら終まいやけどなあ」

沙柚の言葉を聞き、僕はいかにもひがんでますって態度を見せつつ、そう言い返す。

それは、確かなことだった。

僕以外の四人は、今まで実績がある分、有力視されているから一度の失敗くらいで落とされることはないだろう。

「……まあ逆に言えば？ あんさんが僕を蹴落とすつもりならわけないってことやけどなあ」

流石に本気でそんなことされたらあんまり洒落になってないが、それにより最初に火がついたのは尋だった。

「信じらんないっ！ わたしたちがそんなことすると思ってるの

!？」

「そうは思えへんけどなあ？ 君らのギブアップする権利、奪つてもうたみたいで何か嫌やん？」 「貴様っ、言わせておけばっ！」

続いて今にも胸倉を掴みかねない勢いで沙柚が詰め寄ってくる。

「やめてください、沙柚っ！ 吟也もっ、そんな事、言わないでくださいっ！」

「……」

こんどはさすが、沙柚を押さえて、ちょっと怒ったようにそう言った。

僕は何も言わず、何もかも見透かされる前に瞳を逸らす。

「……で？ 後は？」

「後って何やねん」

「提示された情報は他にもあるでしょう？ 大人しく、それを話さないと言っているのです」

雪菜の言葉遣いは丁寧だったが、その声色は冷たかった。

それは、僕の態度に相当頭にきてるって感じだった。

「流石、元？1。何でもお見通し、やな」

「……」

挑発して怒らせてやるうなんて考えたのだが、雪菜は何も言わなかった。

何でも一番に拘っとるやつだと思っていたが、どうやら違っらしい。

それとも、それだけすうのことを認めている、ということか……。

僕は胡乱な考えを取り消し、雪菜の言葉に答えた。

「僕がもろたもう一つは、スイッチを押してゴールへの扉を開けた後の話や。」

まず、そこからホントのゴールまでは、『協力』から『競争』になる。

さらに昇順のポイント制で、一位になれば合格確実、ドベになれば不合格の可能性大って寸法や。

そうすつと、スイッチ押す奴が不利になるわけやが、

ゴールの扉の先にスイッチのあるフロアにつながる道があるんやと。

んで、その不利をなくすためにそのつながる道の途中にはまた扉があつて、

ゴール側からやってきた内の誰か一人にその扉を開けてもらえば、その一人とスイッチ押した奴には自動的に高ポイントが入る。

……何か複雑やけど、ゲーム性あつておもしろいやろ？」

つまりは、チームワークとはよく言ったもので。

勝ち上がるためには、冷静に今の自分を判断して一位を狙うのか、スイッチ側の高ポイントを狙うのかがカギになってくる。

「今まで協力していた物同士が……ライバルになるってわけですのね」

「面白そうなのは、何となく分かるかも」

「……」

頷きながら納得し、あるいはやる気を見せる雪菜と尋に対し、沙

柚の顔は複雑そうだった。

「どうやら沙柚も競争が苦手なタイプらしい。一見そうは見えないけど。」

「そうすると、うまくすればみんなが合格できる可能性も……」

僕がそんなことを考えていると、そんな事を言ってきたんはすうだった。

流石現？1。考えとることが違うわ……なんて思いつつ、僕は言葉を返す。

「うまくいけばな。……せめてどっちがスイッチで、

どっちがゴールに続く扉のある道なのか分かれればいいんやけどな。仮に僕がゴールに続く扉のほうやったらスイッチ側の人間は見捨ててゴール走ると思うわ。」

だって、上位狙えばいいんやし、ゴール側から来た奴が扉開けてくれんとスイッチ側の人間はクリアでけへんからな。……ライバル減って、有利やん？」

ああ、それってスイッチ側の方が圧倒的に不利やねって感じを強調して僕は笑う。

「貴様……そんなうまくいってるのか？」

「さあな。僕は僕の予定を述べてるだけやし？」

僕がからかうように沙柚にそう言つと……静かに何かを決断するよつに、雪菜は言った。

「それでは、吟也さん。あなたには右側の入り口に入ってもらいますわ。」

……残念ですが、私に提示されたヒントの中に、スイッチに続く道はそちらだと示されていましたから」

「何やて？ 何でそんなこと黙ってんねん」

「さつき吟也さんも言ったよ？ 言うも言わないも自由だって。でも、これで決定だね。吟也さんゴール側の道に行ったら何しでかすか分かんないもん」

大げさに焦ってみせる僕に、畳み掛けるように尋は言う。

「じゃ、じゃあすうは吟也と一緒にっ……」

「駄目だ。こいつは一人で行かせる、それが一番安全だ」

すうが言いかけるのを再び遮るように、沙柚が冷たく言い放つ。

「こりやまいったね。僕に選択権はないらしい。」

「抵抗したらここで切って捨てるって感じやな、全く、泣けるくらい素晴らしい協力テストや」

「こうやって弱いものが自動的に落ちる仕組みになってる。」

「……まあ、試験なんだから当たり前なんだけど。」

「決定ですわね。わたし達四人はゴールの側の道、あなたはスイッチ側の道で」

「貴様、途中でしくじるんじゃないぞ」

「はいはい、わーってるよ。僕だってクビがかかってるんや」

僕は、雪菜と沙柚の言葉を受けて、さっさとスイッチ側の入り口へ向かう。

「吟也、待っててっ、絶対扉開けてあげますから！」  
「そこからは容赦しないけどねっ」

そして、すうと尋の励まし？ の言葉に、ひらひら後ろ手に手を振ると。

僕はスイッチ側の扉へと入っていったのだった……。

(第14話につづく)



14、ハードル。ないない、無問題や(前書き)

前書きで自分のキャラや話について述べることに憧れてますが……。

## 14、ハードル。 ないない、無問題や

「……あーあ。 やつべーな、何もかもうまくいきすぎて笑いがとまらないわ」

目の前のフロアには、数十を超える魔物の群れ。

僕はそれを見据え、一人笑みをこぼす。

実の所、言っていない条件が一つと、言わなきゃ分からないだろうなっというヒントが一つあった。

条件の一つは、二手に別れた時の、人数の割合による難易度の変化。

例えば、三人と二人の組み合わせの場合、人数の少ない方、二人で入ったステージの方が難易度が高くなる。

無論四対一の場合、一人で入った方の難易度は、更に跳ね上がるわけだ。

すうに付いてくる言われた時は内心ヒヤヒヤしたものだが、結果的に一人になれたので、まあ良しとしよう。

もう一つのヒントは、別に知らなくてもいいことだが、誰か一人がギブアップした場合、連帯責任で不合格になるのは本当だけど、

それには裏の意味がある。

簡単に言えば、僕がどんなに足を引く張つても、ギブアップさえしなければ彼女たちは失格にならないってことだ。たとえ死んでしまうようなことになっても、僕一人が失格で済む。ギブアップさえしなければ。

「ま……ゴールの扉のスイッチ押すまでは、そんなこと言ったらへんけどなあっ！」

僕は、持ってきたワンハンドソードを構え、威嚇するように吼えた。

そう、ただでは落ちてやらない、つーか落ちてたまるかつての。

ここまでハードルをあげたのは、やっと自覚できた信念を証明するため。

この状況を乗り越えることこそが、僕の信念やって信じたかったんだ。

「風の心よ大地の意思よ！ その猛る感情を力に変えて踊り舞えっ、【ヴァレス・フィエスタ】ッ！」

目の前に迫ってきた魔物たちの大半が、暴力的な風の魔力ヴァーレストに飲まれ、無数の砂礫が見えない針のように突き刺さっていく。

ここに通う者なら、たいていは使える基礎魔法だが、

心なしかいつもより威力が上がっている気もして。

僕はその勢いのままに、残った魔物たちの真っ只中へと駆け出していった……。

一フロアごとの扉を開けるカギは、大抵は魔物の一匹が持っているか、

そんな魔物たちに守られた場所にある。

トラップや仕掛けなどもかなりの数あったが、

それは使わず腐れてた自分の技能によって今の所スムーズに回避できていて。

アドバイスをくれたすうに感謝しつつ。

それでも数多い魔物たちに辟易しながら辿り着いたのは、四番目のフロアへと続く扉だった。

僕は今さつき手に入れた鍵を、おもむろに差し込む。

すると、その扉が開くとともに、このフロアにあるスピーカーの電源が入った。

僕は開いた真鍮製の扉に寄りかかるようにして天井を見上げ、言った。

「もつしー？　こちら紅恩寺。ただいま到着したでー」  
『……遅いつ！　何をもたもたしてるんだ貴様はっ！』

最初に聴こえたのは、沙柚の声だった。

すう以外にはまるで関心がない様子だったので意外といえば意外なりアクション。

「うっさいな、こちらら一人でしんどいねんで。時間制限ないんやから少しくらい堪忍せいや」  
『……次のフロアから魔物のレベルが上がるようですけれど、問題はありません？』

「ないない、モーマンタイヤ」

僕は雪菜にそう答えながら足を投げ出し、座り込み、血と汗がこびり付いた鬱陶しい髪を振り払う。

『ほんとに？　ほんとに大丈夫ですか？』

疑いより心配気な気持ちが伝わってきそうなすうの言葉。

「ああ、まあ……強いて言えば熱うて熱うて適わんな。白くま喰いてー」

止まらない血と汗で歪んだ視線の先には、煮え滾るマグマの如き炎の海。

それは、僕が放った中級火炎魔法……【ボルカノ・カムラル】によるものだった。

その中でたくさんの魔物たちが苦しみ悶え、消えていく……。

これが映像なしの無線で良かったわ。  
かつこ悪いトコ、見せずに済むしな。

『……わたしたち、もう次のフロアに行こうと思うんだけど、どうするの？ ちょっと休む？』

僕は、そんな尋の言葉を聞き立ち上がった。

「かまへんかまへん。さ、どんどん次行こか」

『そう？ じゃあわたしたちも行くね。ここからは余計に油断しちゃ駄目だよ』

こうして声だけ聞いてると意外と可愛い感じがしないでもない尋の声。

『……そろそろ疲れも溜まってくるころだろう、集中力を切らさなよ』

さりげなく一番大事なことを注意してくれてる沙柚。

『次はおそらく私たちが先に着くと思われませんが……スピーカーの電源は入れておきますので、着き次第声をかけてくださいな』

何だかんだ言って待っていてくれるんだなって思える、雪菜の言葉。

『あの、その……頑張ってください！』

そして、ただひたすら真っ直ぐに励ましてくれる、すう。

「……………ああ、了解や！」

僕は四人のそれぞれの言葉に力強く返事を返す。

流石に一人は結構堪えていたけど。何からしくないって思える彼女たちの言葉が、

力を与えてくれるような気がして……………。

(第15話につづく)

## 15、ナイトメア。降って沸いた突然

そんなこんなで。僕は四番目のフロアへと、足を踏み入れる。

四番目のフロア自体は、あまり変わってはいなかった。

ただ、白と青が織り成す岩状の煉瓦でできたそのフロアの中心に、一体の魔物が佇んでいる。

そいつは青いたてがみのライカンスロープ（獣人）のようだった。右手にレイピアをぶら下げ、ねめつけるようにこちらを見ている。

一体ということは、それだけ力を持ったレベルの高い奴なんだろう。

なんて思った瞬間、ふっとそいつは消えた！

（下っ？）

僕はとっさに反応して、ワンハンドソードを振り下ろしたが。

あまりの速さについていけず、腕に鈍い痛みを覚え、剣を手放してしまっ。

そしてその刹那、隙を突くように僕の顔めがけてレイピアが迫ってくる。

「……っ！」

僕は間一髪それをスウェーし、その反動を利用して呪を紡いだ。

「炎の烙印よ、敵を焼き印せっ！【スカー・カムラル】ッ！」



火の魔力爆ぜる音と衝撃に、そのまま僕は弾き飛ばされる。  
それでも何とか体勢を直すのに成功した僕が見たものは、剣先だけを焦がした獣人の姿だった。

(あれを、レイピアで防いだやて?)

なるほど一匹でいるだけはあるらしい。  
ここに出てくる魔物たちは、大抵過去に存在したものが、あるいは創造されたものたちだ。

僕が戦った中ではもちろん段ちに強いレベルのやつ。

生半可な技じゃびくともしないってことを悟った僕は、  
気持ちを切り替え高レベルの魔法詠唱を開始する。

「紅髓玉に燃ゆる煉獄の宝石よ!

塞がりし障害に灼熱の裁きをつ、【カーネリアン・カムラル】

ッ!

魔力込めた叫びとともに繰り出したのは、僕がここで習った魔法  
の中でも単体に威力の高いものだった。

赤白い火炎弾が目標に着弾したと思うと、凄まじい炸裂音がし、  
そのまま青色の獣人を飲み込んでいく……。

(やった……か?)

いくらレベルの高い魔物とは言え、あれを受けて無事なはずはないだろう。

そう思い、僕は火山口のように燃えさかる地面が収まるのを待ち、鍵を探そうと一步踏み出した時だった！

ザシユウツ！

「……………な、何っ!？」

とても近くでそんな音がして……………見ると、血塗れのレイピアが僕のわき腹を貫いていて。

ズブツと抜かれる衝撃によるめく視線の先には……………僕の影から生まれ出た黒色の獣人の姿。

(こ、こいつツ……………影をつ!?)

がくと膝に力が入らなくなり、そのまま後退ろうとして……………何かにぶつかりはつとなる。

そこには本体の、もう一体の青い獣人がいて……………。

(しまっ……………!)

無慈悲にも振り下ろされる剣とともに……………僕の意識はぶつりと途切れた。

気が付くと、そこはどこか知らない部屋だった。

何かの実験室のような、トレーニングルームのような……………そんな

部屋。

試験中だったはずなのに、ここはどこなんだろって考えていると。

自分が仰向けに倒れていて、少し高い天井から降り注ぐ、青白いライトに照らされているのが分かった。

それなのに、何だかふわふわとしていてさっきまでいたはずの擬似世界のような、

現実感の伴わない感覚がそこにある。

僕は起き上がろうとして、体が全く動かないことに気が付いた。

何かに縛られているのだろっかと思い、視線を自分の身体に落とす。

「な、何や……これはっ？　ぐっ……ぐわああああああっ  
！」

僕は悲鳴を上げた。両手両足が、そこにはなかった。

最初からそこにはなかったかのように。

そう自覚したとたん、ショック死してしまいそんな激烈な痛みが暴れだしたように僕を襲う。

「ぐっ……ぐう……ぐあああっ」

出来ることはただ呻く事だけ。早くラクにして欲しいとひたすら

祈ることだけだった……。

どうして、こんなことをするんだろう？

こんなにも苦しんでいるのに。

何も出来ないで泣いているのに……。

僕が、そんなどうしようもないくらいの虚無と絶望感に包まれた時……再び世界は一変した。

そこは無限の青空の中。

眼下にはとても幸せそうな人々の暮らしが見える。

目の前には、僕を包む絶望と虚無感よりも尚深い、真っ暗な太陽があった。

『つらいか？ 逃げ出したいか？ それならそれでもいい。』

お前が逃げれば……世界がむさぼり喰われるだけなのだから……』

どこからともなく聴こえる……ひどく表面的で凍えた声。

そして。その言葉が終わりの合図であったかのように、黒い太陽は爆発した。

それは、僕を巻き込み、空を巻き込み、大地を焼き尽くす。

一瞬にして、数多の幸せが消えた。

それでも全てを喰い尽くしてしまうまで、虚ろな暗闇の炎は広がっていく……。

一つ残らず、地球の細胞の隅々まで闇色に染めようとして。

それは、怖いことだった。

とても怖いことだった。

怖くて怖くて、ここから逃げ出したいのに、永劫ここから逃げることが出来ない。

永遠の苦しみ。まさにそんな表現こそがふさわしくて……。

『この闇を目の当たりにしても、お前はお前自身の使命から……逃げ出すというのか？』

思えるのなら逃げ出せばいい。私たちはそんなお前を責めたりしない。

私たちはお前だけにこんな苦しみを背負わすことを望んではいない。

だから、逃げてくれても構わない。私たちは、お前を愛しているから……』

お前の、好きなようにしていいんだ……スウラ・オージーン。

「……」  
呼ばれた名を、心打ちで反芻する。  
それは、すうの名前だった。

「すう？ これはすうの……夢、なんか？」  
何でこんなものを見ているのか、見当もつかなかったが。  
夢であるとしても、あまりに辛かった。  
現実だったとしたら、許されていいことじゃない。

「なんでや？ 何ですうが……何ですうがこないな目に遭わなあ  
かんのやっ!」

そう思い、叫んだ瞬間。

僕の意識は底知れない感情に押されるようにして覚醒した……。

( 第16話につづく )

## 16、嘔吐き。重ねて嘔が空回りする

目の前には迫り来るレイピア。

僕はとっさに持ってきていた道具袋の中からスパナを取り出し、それを受け止めた。

「許せへん……自分が許せへんなあ！」

この程度の傷でっ、この程度の苦しみで逃げようとしてる……この僕がっ！」

自分が何をすべきなのか……本当の意味で理解を覚えたとき、それは溢れ出す。

その怒りにも似た力は、紅く燃え立ち、僕の身体を包み込む。

すうに、アドバイスをもらってからずっと考え続けてきた自分だけの力。

魂こもった『もの』の、声を聞き、存在を感知し、意思を汲むもの。

スパナの彼女は、レイピアを必死で抑えながら、僕に訴え続けていた。

「【モトカ】の力を、お使いください」と。

それは、彼女の名前。僕を【たいちよー】と慕う、人ならざるものの願い。

自覚するのは、自分が彼女と同じ人ならざるものであること。

だからこそ、忘れていたものを思い出したかのように。

何の気兼ねもなく繰り出せると確信していた。

後は、言の葉に、言霊と呼ばれる力にそれを乗せるだけ……。

「ライス・リソルション  
《断谿》っ！」

僕は言の葉に乗せたその力を、スパナに込める。

それは滑るようにレイピアを撫でつけ、バラバラに分解した。

スパナは、そのまま流れるように……ズブリと、獣人の体内へと  
潜り込み。

それが、肉片へと分解されるのに。

たいした時間はかからなかっただろう……。

それから。

あの夢かどうかも分からない記憶の残滓は、真実なのかどうかさえ分らないまま、

僕の心の中に埋もれていった。

ただ、何故僕がここにおいて、何をすべきなのかが、分かった気が



した。

「……おい、みんなちゃんとおるか？」

僕は、六番目……最終フロアの、ゴールへと続く扉を開けるための、

スイッチがあるところまで来ていた。

『……ええ。こちらは全員無事ですわ。まあ当然ですけど。そちらはどうかしら？』

まるで待ち構えていたかのように聴こえてきたのは雪菜の声。

僕はそれを聞き、もう壊れかけのワンハンドソードを地面に突き立てると、

スイッチのある場所を囲んだ結界の光魔法、【サンクチュアリ・セザール】の力を強めた。

「ああ、大丈夫や……問題ない。今すぐにも扉開けられるで」  
『そういうことを言っているのではない……貴様の状態を確認しているんだ！』

沙袖にそう言われて、ざっと自分の身体を確認してみる。

裂傷は数知れず、アバラ何本かいつてるかもしれない。

そして、左足の踝のどす黒いやけど。

少なくとも左足は使い物になりそうもなかった。

「……それこそ無問題やっちゅーねん」

だが、僕はそう言ってみせた。  
ウソつくのもいい加減しんどくなってきたけど……もう少しの辛抱だ。

このくらいかっこつけても、バチは当たらんのだ。

この自分の天邪鬼さは、もう病気かもしれないな、とも思ったけど。

魔物たちが、僕のチャチな結界破ってやろうと暴れているのを目に入る。

あと三体……か。

今僕のいる五番目のフロア。

そこにいた七体の魔物のうち、四体までは倒したけど……厄介そうなのが残っている。

『っ！？ ねえ、今の何っ？』

「あー、何のことや？ 電波状態悪いんとちゃうか？ 僕にはなんも聴こえへんけど……」

尋の耳聡いセリフに、僕はそらとぼけてやる。

一回吐いたウソは最後まで吐き通さなくちゃ、何も意味ないしね。

『あ、そのっ、吟也、待ってて。扉が開いたらすぐにそっちに行きますから！』

何となく気付いたんだろうと思う。

僕が結構しんどい状態にあるってことを。

……だから余計に、イラッときた。

「あー、別に来なくてもええ……っーか来んなや」

「……っ」

すうは何も悪くないのに、もう少しで怒鳴りそうになるんを何とか押し止め、僕は続ける。

そこには、もう試験の事とか考えてる隙間もないほどの感情があった。

すうがしなくていい面倒はする必要ないって。

『ちょっと！　そういう言い方はないでしょう！？』

だから、怒った声の雪菜に負けじと僕も声を張った。

「わーってる！　みなまで言うなや、そんなん言ってるのとちやうわー！」

……みんなは、扉が開いたら真っ直ぐゴールを目指せばいいんや。でないと、ドベになったもんは失格になんぞ！」

『貴様、何を言っている！？』

突然のことに、沙柚の口調にも動揺があった。

……しょうがないよな、今思いついたんだし。

「ああ、何かなあ……スイッチ側は不利かと思ってたんやけど、そ

うでもなかつたみたいや。

この試験はポイント制なんは知つとると思つけど、こつちにめつちやポイント持つとる魔物がおつてな。これで僕はダントツ一いつてわけ。

……だから僕なんか構つてるヒマあつたら先に行つたほうがええんや。

でないと自分らバツくらうで！」

『なつ、何で今になってそんなこと！』

叫ぶような尋の声。拳を震わせてんのが何となく想像つくな。

「だつてなあ？ あんさんらがクリアしたら順位が確定するから、僕はのんびり待つてればいいなんて言つたら怒るやろ？」

『……』

僕のある意味とどめの言葉に、沈黙が降りるのがよく分かる。

僕は有無を言わずスイツチ上に立った。

白く浮かび上がる魔方陣の下に。

『あ。扉、開いたですっ！』

「おお、さよか。んじゃ、頑張つて四人で競争してくれや」

遠めに聞こえるすうの声に、僕はそっけなく答える。そろそろ結界がやばそうだった。

『貴様には……一本取られたな』

ちよつと悔しそうな沙柚の眩き。

『……ま、いつか。そろそろ誰が本気で一番なのか、決めときた

いと思ってたしね』

『それでは、先に急ぎましようか……長く待たせておくのも、癪ですし』

ライバル心むき出しで睨み合ってるんだらうなっというのが、容易に想像できる尋と雪菜の言葉。

そして、それに続くように聞こえてきたのはすうの声だった。

『あ、あのっ、吟也？』

「……何や？」

何かを躊躇しながら僕の名を呼ぶすうに、答えようとするが。

『オージーンさんっ！ もたもたしていると置いていきますわよ』！

勝負はもう始まっているのです、とばかりに、雪菜の強い声がそれを遮った。

『あ、は、はいっ！ そのっ、吟也……ごめんですっ』！

焦ったようにそれだけ言って、そこから去っていくのが何となく分かる。

「……」

何で謝る必要あるんだよって思ったけど。

きつと、とっさに出た言葉なんだろうな、とも思った。

多分、感覚でそう言いたかったのだろうと。  
きつとすうは、そういう奴だから。

そして、僕の結界が破られたんは、その瞬間で……。

(第17話につづく)

17、フラグ。やったと思った時こそ危険

「ちいっ」

僕は、結界を破られた衝撃で吹き飛ばされ、転がっていく。それを追従するように向かってきたのは炎を纏った馬の魔物と、闇の瘴気を纏ったヒヒの魔物。

あんなのの体当たりを喰らったら楽しんで死ねないな。思ったのはそんなこと。

「ま、カンタンにはいけへん思うけどなっ！」

高ポイントがどうのとかは全くのデタラメだったけど、その中には事実もある。

彼女ら四人がゴールに到着すれば、自動的に順位が確定して、試験が終わるということ。

僕はそんなことを考えながら道具袋をあさり、持ってきたとおきを取り出す。

取り出したのは、銀と緑のツートンカラーのパンチ。

【リオン】と呼ばれる彼女は、生真面目な侍だ。

僕は彼女の……『リオンめをお使いください！』なんていう心に響く声を受けて。

魔力を込めて、力ある言葉を紡いだ。

「シード・スクイーズ  
《楔刻》ッ！」

金属の激しい摩擦音とともに、生まれ出たのは虚空に浮かぶ大木ほどの大きさの、

二本の銀のシリンダー。

それは、目の前に迫っていた二体の魔物を縫い付けるように巻き込んで貫き通し、

地面に柱を作り上げた。

そのスピードは目で追えないほどに凄まじく、

その一撃を受けた二体は抵抗する暇すらなく消えていく……。

「……ここの一番で大技つてか？」

グラリとよろける身体を支えながら、僕はひとりごちた。

僕の力は、【ガレット金】属性のものから派生したものだ。

僕自身に馴染み深い、魂ある物体を変質させるための道具……それを媒体にして、

何もない空間に様々な効果を及ぼす。

ただ、その力の源は僕の魔力だから……当然のように今くらい強い力だと、

僕自身にも負担がかかる。

「でも……これでっ……最後や、あと一体っ」

僕は、最後に残った一匹を見据える。

そこにいたのは、橙色のワーキャットだった。



そして……あと一匹なら何とかなる、なんて思った時。  
僕はまさしく我にでも返ったように……今更でおかしなことに気  
付かされた。

(何で僕……彼女らにウソついてまで先に行けなんて言っただんや  
らう?)

僕が単独一位なんてのは嘘っぱちだ。

つまり、誰かにゴールへとつながる扉を開けてもらわない限り不  
合格＝落第決定になる。

(こんな強がりとか見得とかちゃうで……ただのアホやん。)

本当に、どうしてこんな事になったんだらう。  
なんて思っていたら……。

その答えは、目の前の魔物がくれた。

多分、見た瞬間分かってたんだと思う。  
こいつは、大ハズレだって。

……そう、僕が改めて認識した時。

橙色のワーキャットは……眩しい光を放ち、その姿を変貌させた。

漆黒のたてがみ、大剣のような牙、虎のような体躯。

鋭い鋼のような翼に、大蛇でできた三本の尾。

確か名前は……ブラック・ロック。

伝説に語られる魔物、だ。

「ははっ。洒落にならんわ……こんな試験で出すなよ……」  
多少なりともレベルアップしたから分かる。

ここの学院生で、こいつに実力で勝てるやつなんかおらへんって。

……だから、大ハズレなんだ。

万が一こいつに出くわしたら死ぬかギブアップか、あるいは逃げるくらいしか手はない。

そういう訳だからあいづらに会わすわけにはいかんって、  
僕は無意識にもあんな行動とったんだって気付く。

このフロアに来た時点で、もうそれしか頭に無かったんだろっ。

「やばいで、何か僕ちよっとカツコ良すぎかも？」  
僕は、そんなことを抜かしつつも。

タイムン張るためにブラック・ロックの前に立った。

こいつ倒したらほんとに高ポイントもらってもおかしくないんじゃないかって考えてしまうほど、  
圧倒的な力の前に。

ブラック・ロックは僕が戦う意思を見せたのを理解すると、その  
翼をはためかせ、

猛スピードで突っ込んできた。

僕はそれを待ち構える体勢を取り、スパナを構える。

「ライズ・リソルト・シヨン  
《断鎔》ッ！」

そして、それ違いざま技を叩き込もうとするが……。  
スパナは何か硬いものに弾かれ、鈍い音を響かせて手から離れてしまう。

それは、それ以上持ち続けていたら、強がりと言っているスパナの彼女が壊れてしまうからこそその結果だったが。

その刹那……迫り来る黒い腕。

どしゃつと嫌な音がして、気が付くと僕は声すら上げられず数十メートル先まで吹っ飛ばされていた。

それに遅れるように、自らの血による雨が降ってくる。

「が、がはっ」

荒い息とともに吐き出される新たな血。

こりゃ、内臓イカれたか……。な。

ドクターストップ、あるいはT・K・Oされておかしなダメージだったか、  
ここには当然審判などいない。

試験中は基本的に全て学院生の判断に任される。

ギブアップしなければたとえ死ぬような目にあっても文句は言えなかった。

僕が片手で付け焼刃の回復魔法を施しながら何とか立ち上がると。

ブラック・ロックはまるでいつでも殺せる、といった雰囲気は何

もせず立っているのが見えた。

「っ、つくりモンのくせしよってっ………雰囲気でとるやないかあ  
」！

……  
身体の痛みを必死に誤魔化しながら、僕は道具袋から二つの道具  
蛇のような形をしたクリップと、白いホツチキスを取り出す。  
当然二つとも、魂のある、名のある彼女たちだ。

どのみち長い時間持ちそうにないし、こうなったら大技で一気に  
決めるっ！

「ディア・ディージェスト  
《壊鋸》ッ！」

人差し指に嵌め込んだグリップを媒体として生まれ代えたのは鋼の竜。  
竜は、その大アゴを開いてブラック・ロックを飲み込む。  
そして僕はそれを確認するやいなやすかさず追撃をかけた。

「フレイ・バインド  
《綴気》ッ！」

白い光沢を放つ、ホツチキス打ち鳴らすと。  
鋼の竜に飲まれたブラック・ロックがいるであろう地点を起点と  
して、

五本の捻れた針が花の形を創り出す。

これで、ブラック・ロックは竜の腹の中で五本のマックス針に貫  
かれているはずだった。

これなら、守備力は関係ない。  
何故ならばその針は指定した場所、  
例えばそれがブラック・ロックの体内だろうがおかまいなしだからだ。

後は、縫い付けられて動けないブラック・ロックを、鋼の竜が消化しつくすのを待つのみで。

「……………どつやっ！」

僕は勝ち鬨の声を上げる。

何だかんだ言っても僕一人で何とかなるもんだって。そう思った時。

「……………【ユイズ・ヴォガ・アーヴァイン】」

「がっ……………あっ」

初めて聴く、ブラック・ロックの機械的な声。

その瞬間、爆弾でも落とされたみたいに鋼の竜は弾け飛び。

暴力な力を秘めた橙色の衝撃波が、油断と自惚れごと、僕を叩き潰してゆく……………。

（第18話にじづく）

## 18、バレバレ。瞳に映る滑稽な強がり

そして僕は、引き攣る全身の激しい痛みで再度目を覚ます。

そのすぐ目の前には、先ほどの衝撃波で僕の力を全て消し去り、まるで変わらない様子のブラック・ロックがいて。

ブラック・ロックは、僕がもう何もできないってことを悟ったんだらう。

ゆっくり、あざ笑うように一歩一歩近付き、その巨大な口をゆらりと開く。

……演出まで凝ってるんだな。これで噛み砕かれたら間違いなくお陀仏、だらう。

当確されてきた死が、目の前にあるというのに、僕はそれでもギブアップすることはしなかった。

僕を主と慕う子たちの、悲鳴に近い声に、心臓握られるほどの胸の痛みを感じながらも。

(僕は……ちつと強く、なれたんやるか……)

呟く本音。それを確かめるすべがないのが、ちよつと残念だな……なんて思ったとき。

天井まで届く、青白い光線が……ブラック・ロックを包み込んだ。

「吟也ーっ！」

そして、聴けるはずないと思いつつも、心のどこかで待っていた……すうの声がした。

しかし、僕がそれにリアクションをする余裕はなかった。

光線の直撃を受け、顔を焼かれたブラック・ロックは、痛み悶え僕を踏みつけようとしてくる。

「【月の閃、下弦】っ！」

そこに割り込み、目にも止まらぬ抜刀と、そこから生じる爆塵で、ブラック・ロックを弾き飛ばすのは雪菜だった。

「……ふう、何とか間にあつたね」

そう言って雪菜の隣に並んだのは尋。

どうやらさっきの青白い光線は尋がやったものらしい。

今まで塞がっていたはずのゴールへと続く扉ごと、破壊しつくした跡が見て取れた。

「あ、あんさんら……な、何で来たっ……？」

「しゃべるな、死にたいのか！ すう………すまない、こいつの治療をする、手伝ってくれ」

「は、はいっ」

いつもよりも大分高いトーンで沙柚は僕を怒鳴りつけ、すうを促した。

沙柚は、治療の心得があるようでその動きはスムーズだった。



何かの薬草とか包帯を取り出し、何の迷いもなく服を脱がせ……。

「……って、まてやつ！ そ、そこまですなっ……げほっ」

「動くな！ 喋るな！ そんな事言っている場合ではない！ 右踝の瘡気による火傷が酷いな。」

……すう、すまないが、頼む」

「はい、頼まれたですっ。吟也待ってて、すぐ治してあげますから！」

沙袖は再びそう言っ、そのまますうに任せるべく、下がる。

僕はされるがままで、それでも吹っ飛ばされたまま動きを見せないブラック・ロックが気になって仕方がなかった。

急死に一生の援軍を得たはずなのに、何故だか焦燥感がまるで拭えなかった。

「星々の力よ、私の器もて……今この地へ記す名は、【豊穰の女神・アクアリアス】っ！」

しかし、その不安にも似た焦燥感すら洗い流すように。

すうの力ある言葉から生まれ出た巨大な水がめから流れ出た冷水が、

僕の痛みを全て洗い流し、癒すがごとく包み込んでいく……。

「っ？ ちょっと、何で！ 全然効いてないよっ！？」

だが……その時聴こえてきたのはこんな尋の叫び。

その言葉通り、僕らから少し離れた所で悠然と立ち上がるブラッ

ク・ロツクの姿が見えた。

「やっぱり……あれは、ブラック・ロツク。まさかとは思っていましたが……」

雪菜が少し緊張した面持ちでそう呟く。

「ブラック・ロツク……貴様、そんなものに一人で敵うとも思っていたのか？」

「……」

敵うなんて思ってなかった。

ただ、彼女らを危険に晒すことが分かっていたからこそ、黙っていたのに。

これじゃあ何のために黙ってウソ吐いてたんか分からないじゃないか。  
いか。

「だからっ、何で来たんやって……言ったんやつ。

あんさんらには何のメリットもない言っただやろ！」

助けに来てくれたのは、すごく嬉しかった。

でも、それ以上に何で来たんだってという疑問の方が大きかった。

傷つかなくてもいい時は、傷つかなくていい。

僕だけで十分だって黙っていたのに、どうしてこいつらはここに  
いるんだらう？

「……だって、吟也が危ない目にあってるのに、ほおってなんか  
おけないですっ！」

器用に自らの力を維持しながら、すうは訴えるように叫ぶ。

「何でや、何でそんなん知って……？」

「大嘘つきの貴様に……どうこう言われる筋合いはないな」

「……っ」

僕の呟きを押さえつけるようにぴしゃりと言い返す沙柚。

それはつまり、僕のウソがウソだってバレてた……。

一人カラ回りしていた自分が情けないやら悲しいやら、複雑な気分だった。

一体いつからバレてたんだろう。

それなのに、知らないフリしとるなんてみんなして人が悪すぎる。

「メリットがないですって？ 本当にそうでしょうか。……私自身の損得は私自身が判断します。」

あなたにそれがないと決め付けられる言われはありませんことよ

「……何か、メリットでもあるような言い方だな」

僕が、雪菜の言葉の意味を図りかねていると、尋が明るい声で付け足した。

「つまり、わたしたちが助けたいと思ったんだからしょうがないってことだよ」

「貴様の天邪鬼ぶりには理解に苦しむが……悪くはないなと思っただ。だからここに来た」

沙柚はそっけなくそう言い放つと、ブラック・ロックに立ち向わんと尋たちの隣に並んだ。

「すうは、吟也のこと絶対助けるって、決めてたですっ！」

治療を終えたのか、意気込んでそう言うすうには、損とか得とか超越した何かがある気がした。

「……どいつもこいつも、ほんましようもないお人好しやな」

僕は、苦笑を浮かべて無理矢理にでも立ち上がる。

いつの間にか女の子に助けられるなんて情けない、だから強くなってやる、守られるんやなくて守るもんなんだって  
いう考えはもうなくなっていて。

彼女たちと肩を並べて、彼女たちを背にともに戦うことが。

支え合えることがとつても素晴らしいことなんだって気付けたのは。

多分、その時だったのかもしれない……。

(第19話につづく)

19、0と1の支配者。これが浪花節かぁ（前書き）

今までで一番短いですね。

19、0と1の支配者。これが浪花節かあ

「そんな言われたら……ますます寝とるわけ、いなくなつたわ」

本当はこの、関係をずっとずっと続けられればいいと思っていたけど。

それより先に、強い気持ちがある……。

彼女たちの力は成長途中の未知数だ。

このままここで頑張っていれば、ブラック・ロックほどの伝説クラスの化け物だって倒せる力を持つことができるんだろうと思う。

あるいはもう持っているのかもしれないけど……それでも今はまだ早いと思った。

今はまだ、こんな所でその力を使うべきじゃないと思ったんだ。

だから、一番確実な方法を取ろう思った。

本当は、僕がカッコつけたいだけなのかもしれないけど。

僕の信念は、彼女たちのそんな強い心を隣で守ること。

そのためやったらなんだってできるって……それが試験前の最初の決意。

僕が、その力を解放すると……フロア自体がビリビリと震え、細かな電気が壁に走っていつて。

「吟也？ な、何してっ……？」

すうの逡巡する言葉に、僕は答えるべく……言葉を紡ぐ。

「分かってる思っけどな……あいつは今の僕らが勝ち目のある相手やない。

フツーに考えたら、レベルが違いすぎる」

そして、ブウン……とテレビをつけた時のように、場が揺らめきだす。

「そんなことっ。 やってもみないうちからどうして分かるのですかっ！」

雪菜の言うように、ここにいるみんながそう思ってるはずだった。だからこそ、僕は事実を述べ続ける。

「そうやな、やってみいひんと分からへんよな。自分を犠牲にできる意思と力を持つとる君らには」「……っ」「」

「き、貴様……まさかつ!？」

尋が言葉を失い、沙柚が僕の意図に気付いたようだったけど、それはもう遅すぎて。

「……だから、それを君らの誰かがやるくらいなら、僕が思っただけや」

バチンッ! と、意識がこの造られた世界とアクセスするのが分かる。

それにより、あの……力の覚醒するきっかけとなった夢の意味と。僕が何故この力を使役できるのかが分かったような気がして……。

127

始まりは……きつと、みんな同じだったんだと思う。

世界を救う使命を負うために生まれた子供たち。

ただそれには、自由の意志が約束されていて……僕は多分、それから逃げ出したんだ。

でも、今はもう……逃げたくない。

何を今更って思われるかもしれないけど。

そんな逃げた奴らの責を全部背負って頑張つとる奴らに。

僕はできることをしたいと思った。



だってそれが、僕の力の源だから……。

だから僕は、その力を降臨させる。

人ならざるもの、【妖の人】と呼ばれるジブンの、その力を解放する。

だから来んなって言ったのに……なんてことを思いながら。

「……全ての人が造りし在に、住くのは紅の証。

今、その代価を以って銀色の皇、この地に降臨せよ！

カレット・グロウファイア  
《全言統制》ッ！

」

ありつただけの力とともに僕は叫ぶと。

その瞬間、世界はフリーズする。

目の前には、凍ったように動かないブラック・ロックの姿。

僕はその、0と1で成されたプログラムの塊に手を掲げて。

その存在をこの世界から……デリートした。

(第20話につづく)

20、生きがい。それじゃあベクトル一方通行で

多分それは、他のみんなからすれば瞬きするくらいの一瞬だったんだろう。

僕の力は、人によって造られたものを媒体にして、現実に具現化し、影響を及ぼすもの。

今やった技は、その応用。

この擬似世界……【異世】と呼ばれる創られた世界そのものを媒体にして操った。

分かりやすく言えば、この異世全てが僕と同化し、僕になっていったことになる。

ただ、今の一瞬ですら……僕の許容量を遥かにオーバーしていて、全身の神経が、電力の限界を超えて焼き切れたコードのように……悲鳴を上げた。

「吟也っ!」

何の抵抗もせずに崩れ折れる僕に、すうが、みんなが駆け寄ってくるのが分かる。

「吟也さんっ!?! その髪……」

聴こえるのは、尋の驚きの声。

何しろこの技を使ったのだから初めてだったから自分でも驚いているのだが。

僕の視界に掠める赤かったはずの僕の髪は、水銀のような……金属のような銀色になっていた。

おそらく、魔力だけじゃ足らなかったのだろう。

その代償は、僕の生命力だった。

「吟也さん！ あなたは……なんてことをっ！？」

……分かってるよ、何をしたかくらいは。

僕は雪菜にそう言おうとしたが、言葉にはならなかった。

僕のこととは……テスト問題そのものを消し去ってしまったのと同じこと。

当然、ルール違反だろう。

「だ……からっ……くん、言ったや……る？」

「それ以上喋るなっ、この馬鹿っ！」

真っ先に僕を支えてくれた沙柚のそんな叫び声。

関西人にバカゆうーなって突っ込みもできなくて。

それよりもこれでもう落第かって気持ちのほうが大きくて……。

「ぎ、吟也っ！」

すうの……僕を呼ぶ声が聴こえる。

いつまでも、いつまでも心に残るような声。

そして。ああ、こんな終わり方も悪くわないな、なんて自分に浸って……。

でもって、紅恩寺吟也さんはお星様になりましたってオチだったから小奇麗に纏まったのかもしれないけど。

当然僕がここにこうやってここにいるって事は、そうならなかったって事で。

さらに笑えることに、僕は試験を何故か合格していた。しかもダントツの一位で。

僕が目を覚ましたのは、校舎の一角にある、保健室だった。その脇には、保健の先生ではなく何故かジュアナ先生がいて、開口一番こう言ってきたんだ。

「紅恩寺くん、おめでとーっ！ 今回の試験、トップ通過ですよーっ。これで落第は免れたねっ」

そう言われた僕の顔は、何言っとなねん、訳分からんて感じだったと思う。

「え、なんでですか？……僕ズルしましたやん、反則やん。  
異世のシステム自体にちよっかいかけたんやで？」

だから不合格になるんじゃないかって僕が言うと、ジュアナ先生は疑問符を浮かべて言った。

「それって反則なの？ 私、そんなこと言った覚えはないけど。…  
…それとも、不合格のほうが良かった？」

「……いや、合格で全然構わへんっス」

確かに、不合格になるとは一度も言われてはいない。

僕は首を振って合格バンザイをアピールしていると、ジュアナ先生は加えて感心したように言った。

「そうは言っても、まさかブラック・ロックが倒されちゃうなんて思ってたわ。

……良く気付いたね。ブラック・ロックがたくさんポイント持ってたの」

「え、マジですか？」

あれと戦おうなんて考える人なんていないだろうから、一万点つけちゃったと笑うジュアナ先生に、ウソがマコトになるってほんとはあるんだなあって思ったりもした。

「それにしてもさー。紅恩寺くん、女の子たちといつの間に仲良くなったの？」

ちよつと前まではあんなに険悪だったのに。同じ班の子、みんなすごく心配してたよ？」

次の授業が始まるついさっきまでここにみんないたって聞かされ

て、何だかフクザツだった。

「ここまで誰が運んでくれたのかなとか考えると、ものすごくカッコ悪い気もする。」

「仲良うなったんかな？ なんもしてへんし、なんも変わってへん気もするけど……」

強いて変わった事をあげるとすれば、それは僕の気持ちのあり方だと思っ。

ただの天邪鬼でいるよりも、自分の本当の気持ちを言うことに戸惑ってる自分に、

天邪鬼でいたほうが面白い。……そんな感じだろうか。自分で言っでて良く分らんけど。

「先生にはそう見えたけど？ なんだか良い方向に変わったなっと思っ。

今回の試験は、チームワークの大切さを問うものでもあったから……」

そう言われても、あまりピンと来なかった。

どっちか言っで、僕一人我がままに動いてた気もするしね。

まあ、向こうは向こうで何かあったのかもしれないけど。

「……そう言えばさ、紅恩寺くんの本命は誰？」

ジュアナ先生は瞳を輝かせ、そんなことを訊いてくる。

その表情は、性質の悪いことに、からかっでるとかそんな気配の微塵もない本気だった。

そう言うことって、何やねん。話とび過ぎだよ。

「それじゃあ、全員って方向で」

だから僕は真面目にそう答えるのだった。

何故なら、それこそが僕の生きがい。信念のその先にあるものなのだから……。

（第21話につづく）



## 21、サーキユの娘。トマト惨殺未遂事件

そんな、ある意味先生と生徒の会話としていいのかと問われる会話の後。

今回の試験の順位が張り出されとということ、心配かけた顔見せのついでに保健室を出ると、

順位表の張り出されている昇降口ホームへと向かった。

髪の毛もまだ銀色のままで、神経のしびれが残ってて身体が重く、さながら老人のようだったけど、まだここにいてもいいんだって実感を確実にしたいっていう逸る気持ちは抑えられなかったんだ。

順位表の張られている場所、校舎の玄関ホールにある、薄緑の細長い掲示板には。

さらに細長い紙に、順位点数とともに、百人の生徒の名前が書かれていた。

そこには、当然のようにたくさんの方の学院生たちでこった返しており、人が少なくなるまで待っていたほうがいいかななんて思っている。

そんな僕に気付いた清水が声をかけてくる。

「あ、吟也くん、見てよ。今回落ちた人、一人もいなかったんだって。何か嬉しいよね」

清水はにこやかに、それこそが最優先事項であるかのようにそう  
言ってくる。

「おや、どうやら今日の主役の登場みたいだね」

「お、赤信号じゃ……なくなってる」

それにより僕に気付いた観弥子と、晃が続けて声をかけてきた。

「そっか、そりゃええことやな。……どうも主役です。信号ゆー  
なっ！」

……って、疲れることやらすなや」

「流石芸人、三人に答えてさらに突っ込んだ」

僕がそんな晃の言葉をとりあえず無視し、もっと良く見ようと前  
に出ると、

それに気付いたみんなが割れた波のように道を開けてくれた。

「……何かちよつとスター気分？」

僕が、そんなことを呟きながらいつも見ているのとは逆側のほう  
へ近寄っていくと。

先頭の第一位のところに、でかでかと僕の名前があった。

点数は一万飛んで189点だった。

一万のとは件のブラック・ロック、残りは魔物の撃破数とか諸  
々なんだと推測できる。

もちろん、二位以下を引き離してダントツだった。

「貴様、身体の具合がもついいならそう伝える。常識のない奴だな」

「うどわっ、き、急に今すぐ殺せますっていう首筋に立つなやっ、ビビるだろがいつー!」

またまたいきなり至近距離の射程範囲に立つ沙柚に、思わず飛び上がった。しまう。

「そうか、済まないな。……癖なんだ」

何が癖なんかよく分からないが、大人しくそのまま間を取っていく沙柚に拍子抜けし、

それと同時に沙柚って思ったよりも小さいんやなと失礼なことを思った。

だからちよつど首筋に頭がきて怖いんだって。

「ま、それは置いて……ここに来ればみんないる思ったからな」

それでここに来たんやと頷いていると、今度は後ろからどぶつと軽く……ない一撃。

「がふっ……て、てめっ! 病人になにさらすっ!?!」

「何だやっぱりまだ全快ってわけでもないんだね。……髪もまだ銀色のままだし」

わー、針金みたーいとはしゃぐ尋に、僕は立ったまま悶える羽目になった。

こ、このっ……手加減知らずめっ!

「だからって殴ることないやろ! 殺す気か!」

「大げさだよ、ちょっと叩いただけじゃん、何かね、その頭見てるとお兄ちゃん思い出しちゃって……ちょっとつぶしてもいい?」

「な、何をやねんっ!」

そう言っただけの花の咲くような微笑みで、手のひらをわきわきさせる尋から脱兎のごとく逃げ出す。

「せ、雪菜はんっ、助けてーなっ! 尋を止められるんわあんさんしかないっ、あいつ、おそろいは嫌やからって僕を消すつもりやっ!」

「? 尋さん、そんなことしたら吟也さんがつぶれたトマトのようになっちゃいますわよ?」

「うっっ、トマトきらい」さりと怖いことを言う雪菜に逆に僕は青くなったが、

そう言っただけ尋が手を下ろしたので、僕はようやく一心地ついて胸を撫で下ろす。

全く、見た目だけならどこのお姫様だって感じなのに。

「……そう言えば、吟也さん? あなた、人数の割合で難易度が変わるという話、私たちに黙っていたでしょう?」

僕がそんなことを考えていると。

雪菜はまさにこのタイミングしかないといった感じでそんな事を言ってきた。

「あれ? そうだったっけか?」

「あれ? じゃありませんわ。話していれば、あなたは一番にな

ることはなかったかもしねませんのよ。……まさか、狙ってやったのではないでしょうね？」

とぼける僕に、雪菜はそんなことを言うが、何か分かってて訊いているといった感じだった。

何となく、単純に負けたのが悔しいのと、理不尽とも言える配点に納得がいてないんだろう。

「狙ってできるわけないやろ。……そもそも条件の話なら、雪菜たちやって他に何か隠してたやんけ」

ほれ、言ってみるやって顔を見ると、雪菜はぶいっとそっぽを向いて言った。

「それは……やっぱりもう終わったことですし、良しとしましよ  
うか。」

一位になったのは、吟也さんなのですし」

あれ？ 何かうるたえとる？ 不惑の武士様が珍しい。

あんまりらしくない反応に僕も少し戸惑って、何か他に話題はないもんかと考えた所で。

すうの姿が見えないことに気付いた。

……何となく、雪菜たちの近くにいてる思ってたんだけど。

「まあ、それはそれでいいねんけど……すうはどうしたんや？  
一緒やなかったんか？」

「あら？ そう言えばそうですわね。保健室を出てからはずっと

一緒でしたのに……尋さんは知ってます？」

「ううん、知らないよ。……ほんといさっきまではいたと思っただけ」

雪菜と尋が揃って首を傾げていると、沙柚がすつとやって来て、ぽつりと言った。

「時々……すうは目を離した隙にふつといなくなるんだが、こういう時は中々見つからない」

いつも追っかけ回している？沙柚も分からないらしい。  
ひょっとして僕、避けられてる？

「ふーん、そなら探してこよかな。おかげさんで無事なんも知らせなあかんし」

いろいろ話す事もあるしなって思い僕がそう言つと、雪菜も頷いた。

「そうですね、じゃあ私たちはここにいますわ。そのうち戻ってくるかもしれないですし」

「よろしく。まだ全快じゃないんだから無理は駄目だよ」

キミのせいで余計に弱つとるんだとは言えず、そんな尋の言葉には苦笑いするしかないわけで……。

「……貴様に任せた」

「ああ、ちよっくら行つてくるわ」

そして僕はそんな沙柚の簡潔なセリフに頷く。

沙柚がすうのことに關してあっさり折れたんは少し意外だったけど。

逆にそれだけ前よりか僕自身が認められたのかなーなんて思ったりして……。

(第22話につづく)

22、細マツチヨ。見ててこっちもちゃんやうしちゃう(前書き)

今までになくサブタイトルが考えてて面白いぞよ。



22、細マツチヨ。見ててこつちもちゃんやりしちゃう

そして、僕が三人三様の言葉を受けた後。  
今いるホールにはいないんだろつなつて一応辺りを見回している  
と。

教室へとつながる廊下の付近で話し込んでいる恵美と聖秀……オ  
クを発見した。

珍しい組み合わせだなと思い、何気にすうの行方知らないかな思  
つて近づいていくと。  
何やら渋い顔のオクが顔を上げた。

そして、あんさんお笑い魂はどこいったんだつていう無表情のま  
まで、僕の前まで来る。

「……おつかれ」  
「え？ あ、どうもな」

オクは表情を変えないままそう言つと、さつさと昇降口から外に  
出て行ってしまった。  
どこに行くのかは気にはなつたが、二人が何を話していたのかも  
気になつたので、

僕は恵美に声をかけることにする。

「よう、えつちゃんおつかれ」

「あつ……やっぱりえつちゃんは……やめてほしい」

いつも超然としとる割にはこういったからかいには普通にリアクションするから不思議である。

「……じゃあ、恵美、さっきオクと何話してたんや?」

僕がそうストレートに訊くと、少しだけ考えるしぐさをした後、ポンと手を叩いて恵美はそれに答えてくれた。

「ああ、きよつちのこと。……きよつちとはきよつちの未来について話してた」

「未来?」

「そう、未来。でもきよつちは私の話全然信じてくれなかったけど……」

恵美は、少し残念そうにそう呟いてため息をつく。

「まあ、今のオクちゃんって、そう言うの信じるどころか、まるで人の話聞きとらないって感じやからなあ」

オクの陽気さを奪ったんは何なんだろう。

ひよっとしたらオク自身もそれを取り戻すために、恵美に話を聞こうとしていたんかもしれないが。

「信じれば、新しい未来を起こす事も変える事もできるのに……」  
「そうやなあ……今のオクはブラインドで目え塞がれとる感じやな。」

僕も何とかここに残れたし、そろそろちよっかい出さなあかんか

な。おせっかいかもしれへんけど」

僕は、願うような恵美の言葉に、何かできる事があればいいなと頷いて。

「そう言えば吟さん、ちゃんと約束守ってくれた。……さすが歩く女の敵」

「誉めるんか、貶すんかどっちかにせんかい！」

僕がすかさず突っ込むと、恵美は笑顔を向けてくる。

「もちろん誉めてる。……私、吟さんが留まってくれてうれしい」  
「あ、ああ。そりやどうもな」

僕が思わず照れてそう言つと、笑顔がぐふふと悪くなる。

「これで、私も言う事ほいほい聞いてくれる召使いさんには困らない」

恵美はぶかぶかのケープの袖口から例の写真をちらつかせて見せる。

言わずもがな、僕の顔は引き攣った。

「わあーった！ 分かつとるからそんなもんちらつかせんや！  
……つて、あ、それで思い出したわ、恵美はすうのこと、どこかで見なかったか？」

僕が何しにきたのか思い出し、そう言つと、恵美は再びしばしの黙考をした後、言った。

「たぶん……屋上にいると思う。何か思うことがあると、すうは屋上に行くの……よく視た」

それは実際に見た、ということではなく、未来を視たって言い足りないだろう。

「へえ、そう考えるとその力って便利やなあ、人探しもバッチリやん」

僕が感心してそう言つと、恵美はふるふると首を振った。

「そうでもない。見たい未来を見られるわけじゃないし、吟さんみたいに見えない人もいるから……」

そうか、手放して便利なモンってわけでもないんだな。僕はそう思い、言葉を続ける。

「ま、何でもカンペキにお見通しやと人生つまらんもんな」

「うん、完璧じゃないから……生きるのは面白い」

つらい場合もあるけれど。

そんな裏の意味も含んだ、恵美の言葉と表情。

でも僕は、そんなネガティブシンキングなことは忘れて、笑顔で言葉を続けた。

「んじゃま、僕、ちょっと屋上に言ってみるわ。ありがとな、教

えてくれて」

「気にしなくていい。何が起るのかは分からないけど、きつといい事があると思うから……たぶん」

照れ隠しなのか、さあ行けっで感じて、視線を持っていた本に向ける恵美に。

多分は余計だとも思いつつ、僕は昇降口を出て、屋上へと向かうのだった……。

( 23話につづく )

## 23、告白。セオリー通りなら話オワタ

寮とかその他の施設には別の屋上があるのだろうが、校舎の屋上  
と言えば一箇所しかない。

随分ベタなロケーションだなあって思いながらその場所に来てみ  
ると、

いつのまにか晴れ間が見えており……熟れかけの太陽が望んでい  
た。

すうは何をするでもなく、そんな太陽を見上げていて。

そのままその太陽めがけて翔んでいってしまうような気がして、  
僕は声をかけた。

「何や、すう。こんなとこにいたんか……休憩か？」

「あ、吟也、もう大丈夫なの？」

「まあな、おかげさんで」

「そっか、良かったです。あ、えっと……すう、ここには良く来  
るのです。」

ほら、空が近いでしょ？ 心を落ち着けたい時にはぴったりの場  
所なんです」

「……」

心を落ち着ける、ってことは、何か心穏やかやない事があつたっ  
てことなんだろう。

それを訊いてもいいものかどうか僕が悩んでいると、すうは思い  
ついたようにふと口を開いた。

「あ、吟也、今回の試験、ダントツ一位なんですよ。その、おめでとうです」

「あ、ああ。どうもな」

何さ、そのいかにも前フリですっていう会話は！

僕がそんな感じで戸惑っていると、すうはそれに気づいた様子もなく言葉を続ける。

「それである、その、すう、吟也に……言いたい、ことが」  
「……」

そのとたん、どんどんどんどんと動悸が治まらず高騰していくのが分かる。

な、何？ そのいかにもこれから大事な事話しますって顔は！  
まさか、このシチュエーションは、ひよっとしなくてもひよっとするの catt ?

僕がそんな事を考えながら、先を促すために黙っていると。  
やがて意を決したように、陽の色をまとって紅潮する顔を上げ。

「あの、すうと……すうとお友達になってください！」  
……と言った。

「……あれ？」

しばらくして出た僕の声は、とんでもなく呆けたものだったろう。え？ 何これ？ 僕……告白する前から、断られとんの？ 友達としか見れない的な？

……って、ちゃうやろ！ そもそも告白するって何やねん。

僕は自分で自分に突っ込みを入れながら、混乱する頭を整理する。

「あのっ、駄目……ですか？」

テンパって言葉を失った僕が、何も答えないことを不安に思ったのか、

悲しそうにすうはそう訊いてくる。

その表情で、冗談を言ってるわけでも、間違えているわけでもないと理解した僕は。

なんとか我を取り戻し、言った。

「友達？ ともだちって言ったんか？」

「……はい」

「なつてくれも何も僕たちとつくのまに友達やなかったんか？」

そう最初に言ったような気がしたんだけど……僕だけ友達と思っ込んでたんだろうか。

「え？ だって吟也、ここに通う女の子とは友達になれないって言ってたから……」

「うっ」

そっぴやそれも言ったっけ。

すうの前でそんなこと。いつの間やら、性別を隠そうとしてな



い様子のすうに、  
少し首を傾げた僕だったけれど。

一度出た言葉は取り戻せない。  
それを強く感じて僕がへこんでいると、しかしすうはちよつと微笑みを浮かべて、言った。

「でも、その後吟也、自分が強くなったら、すうたちより強くなったら考えるって言ったですよ？ それで今日、吟也がテスト一番だったから、もう大丈夫なのかなって思って……」

僕はすうの言葉を聴いてはつとなる。  
確かにそれも言った。その時はそのつもりなかったけど、今は逆にそれも悪くない、いやむしろ喜んでって思っていた。

「そう、やな。間違いなく言ったわ。じゃあこれで、すうとは友達や。男に二言はない」

「本当ですかっ!」

「ホンマや」

「やったーっ」

僕がそう言うと、すうは子供みたいに飛び跳ねてバンザイして喜びを表現する。

こいつは成績トップの優秀な奴なのに、何でこんなにズレてるんだって思ったが。

こんな喜んでるのを見るのも悪くないかとも思えた。

でも……。

「これってやっぱり最初にすうがこの学院入って来た時の口約束と変わらへんよーな」

「うっっ」

突っ込んだ瞬間、失言に気付く。

何で言わなくていいことを言うかな、この口はっ！

みるみるうちに沈んでいくすうに、罪悪感を覚え、どうにかしなくちゃって考えて。

僕に、一つの天啓が訪れる。

「そ、そや、いい手があるぞ。ちょっと付いてきてくれるか？」

「は、はい」

すうは僕の言葉の勢いに流されるようにこくこく頷く。

そしてすぐに僕らは連れ立ってその場所へと向かったのだった…  
…。

(第24話につづく)

24、ストレート缶。今はそれすら甘くて飲めない(前書き)

話がぶつとぶなので、章わけしたいと思います。

24、ストレート缶。今はそれすら甘くて飲めない

着いた場所は、自販機のある……あの休憩室。

僕はそこにある、苦くもなく甘くもないストレートの缶コーヒーを二本買った。

そしてその一つをすうに手渡す。

「多分な……友達になるっちゅーことはそう簡単に証明できるとじゃないと思うねん。」

友達になるかって言葉で言い合うんも、やっぱり何かちょっと違和感がある気、するしな」

「違和感……？」

すうは、受け取ったコーヒーを転がしながら、僕の言葉を反芻する。

「そう、違和感や。友達は、なるって言ってなるもんやない。気付いたらなってるもんなんやあって、やっぱり僕は思う」

「すう、気付けるのかな？ 言われても分からなかったのに」

それはきつと、僕の事を言ってるんだと思った。

僕はその煙る雨の降る、始まりの日、口約束にも足りない流れや

すい言葉ですうに友達になると言った。

しかし、僕の言葉には、実感が……真実が伴ってなかった。

だからすうは流され、その言葉が信じられなかったんだと思う。

でも……今なら、その言葉に力を込めて、真実をもって言える気がした。

「言葉は流れ薄れてしまうから、実感が持てない……信じられなくなる。」

なら、誓えばええんや。そうすれば覚えておくことができる。心に、留めることができるんや」

「それは、どうすればいいの？」

祈るようにそう言って言葉を待つすう。

僕はそれを受けて、コーヒー缶のプルトップを開けた。

「この缶コーヒーが、僕とすうの友情の証や。」

いつか離れる時が来ても、お互いを忘れるようなことがあっても、このコーヒーに誓った友情は、これを飲むたびにはつきりと思い出せる……そんな誓いをするんや」 「誓い……そっか、そうなんですね。それならちゃんと分かります。」

すうたちが友達だったこと、分かります。何だか凄いな……目に見えないと思ってたものが、

見えるようになったみたいです」

すうは僕の同じ行動をして一つ一つ確認するかのように呟く。

それはさながら僕の言った誓いを、心で感じているようだった。

「目で見える……五感で感じられるような言葉が誓いっちゅーこ

ったな」

そして僕らは、グラスで乾杯をするかのように缶をぶつけ合い。

その苦くもなく甘くもないただまっすぐなコーヒーの味を楽しんだ。

僕はその日のことを忘れないだろう。

他人ほど苦くなく、恋人より甘くない。

ただただ真っ直ぐに友達であることを誓った日のことを……。

(第25話につづく)

25、うたかた。風変わりな走馬燈（前書き）

章が変わります。とりあえず別視点で。

## 25、うたかた。風変わりな走馬燈

S I D E ……???

気づけば少女は……知らない世界にいた。

見たことのないような綺麗な花たちの庭と、どこまでも澄んでいく茜色の空。

どこからか聴こえるのは……異国の鐘の音と、野鳥の声。

少女の立っているその場所は、小高い丘になっているようで、遠目には大きな大きな赤煉瓦の長く連なって伸びる建物の姿が見える。

少女がそれを見て……真っ先に思い浮かんだのは、ファンタジーのお話に出てくるような、魔法使いたちが通う学院、だった。

そんな、幻想めいた考えを証明するかのように。

遠い空の向こうにはラピュータ島のような浮島が見える。

時間の概念が少女のいた世界と同じならば、今は夕方だろうか。

生まれたばかりの夕陽を背に受け、浮島に見え隠れするようにはうっとした三つの月が見える。



「ここは……死後の世界なのかな」

それとも、夢だろうか。

眩き……考えてみても少女にはわからない。

だから彼女は……これがなんなのか、自分がどうしてここにいるのかを知るために、歩き出す。

目指すのは……あの赤煉瓦の大きな建物。

そこになら誰かいるかもしれないし、自身の疑問を解決してくれるかもしれないそう思ったからだ。

思っていた通りその場所には、たくさんの人たちがいた。

少女とほとんど変わらないように見える人たちが。

けれど、それはすぐに間違いだっただってことに気づかされる。

普段から人見知りする彼女が、勇気を出して声をかけてみても、誰一人気づいてくれる人がいなかったのだ。

初めは、言葉が通じないのかもとか、そう思ってもいたが。

少女にも分かる言葉で談笑している、紺色の……魔法使いのよう  
な、

シスターのような格好をした女の子二人組は、呼びかけにも答え

ず、

少女の存在に全然気づかない様子で。

それに驚く少女を気にも留めず、その身体をすり抜けて通過して  
いってしまつて。

どうやらは少女は人に見えない、いわゆる幽霊のような存在のよ  
うだつた。

やっぱりわたしは死んでしまつたのだらうかと。

少女はそんな事を考えて……ゆるゆると首を振る。

何を今更、そんなことを確認しているのかと。

少女は、自ら命を絶つたのだ。

そんなことは分かりきつていゝる。

問題はそんなことではなくて。

ならばどうしてこんな知らない世界で幽霊みたいなことをやって  
いるのか、と言つことだ。

仮に幽霊であるならば。

その世界に未練があるからこうして彷徨い留まつているんだと説  
明がつくが。

「未練……か」

ないと言ったら当然嘘になる。

一つだけ……大きな未練が彼女にはあった。

彼女は死の間際で、大切な人とお別れをした。

でも、それは相手の知るところのない、一方的なもので。

きつと……知りたかったのだろう。

大切な人が……少女がいなくなった後も、幸せでいてくれているのかどうかを。

その人が幸せで過ごしているのか、確認して実感して……安心してたかったのかもしれない。

だからここは……その人がいる少女の知らない場所である可能性はあつて。

「探しにいかなくちゃ……」

相手に自分の姿が見えないのは少女にとって都合がよかった。

その人が幸せに暮らす姿をそつと眺めてから……安らかに逝こう。

少女はそう決めて。

大切な姿を求めて再び歩き出す……。

26、さまよえる魂。主よ、その声を聞け（前書き）

もうちょっとだけ別視点が続きます。

26、さまよえる魂。主よ、その声を聞け

それから……。

しばらくあてもなく彷徨って……もうすっかり日も暮れて夜の帳も降りて。

少女は、この大きな欧風の建物の中でも、一番奥まっぴらでいて、一際大きく連なっている建物のところまでやってきていた。

何のことはない。単純に目立つ大きいところ、人のたくさんいそうな所からしらみつぶしに探していこうと思っただけだ。

と。

そんなわけで少女がその、ひときわ大きな、どこかしら生活感漂う建物に踏み入れようとした瞬間だった。

キーンッ……。

それは……馴染み深い、周りの空気までそっくり入れ替わってしまっただかのような感覚。

ドゴウッ！

本能的に身を引いたのは良かったのか悪かったのか。それから間髪置かず、今まで少女のいた地面が。沸騰するマグマのように熱く盛り上がって大爆発を起こした。

「か……あっ」

聴覚がその一瞬で潰れるほどに凄まじい爆発。聴こえたのは初めの一瞬と、少女自身の乾いた声だけだった。

それは残酷なまでに……やさしい一撃。

対人地雷のように、ギリギリまで殺傷能力を抑え、悶え苦しませるのではなく。

余韻すら残さず、消し去ろうとする一撃だった。

世界が今までいた場所から別次元に変換した瞬間。その相手と同じ力で対処していなければ。もう少女はここにはいなかっただろう。

「大人しく消えていれば……何も辛い事などなかったのに……」  
「……」

そして。完全にやられたはずの耳から聴こえてきたのは。極力感情を押し殺したかのような……そんな声だった。

それは、間違いなく少女に向けられたもの。

その声の主には彼女の姿が見えているのだろうか？

いきなり訪れた理不尽な出来事に少女は声をあげようとしたが、爆発の時に起きた煙を多く吸い込んだせいで、言葉にならない。

だから代わりに、きつと顔だけを上げるが。

煙と闇に紛れ、その人物の姿ははっきりと見えなかった。

僅かに見えるのは……流れるような黒髪の残滓だけ。

「これ以上は抵抗しないでください……苦しまずに、元の世界へと環してあげますから」

まるで赤子をあやすように、打って変わってやさしげな……そんな声。

少女はゾッと身を震わせた。

元の世界に還る場所などもうないことを。

知っていて敢えてそう言っているような口ぶりだったから。

少女はこの時……とにかく逃げなくちゃいけないって思っていた。

ここにきて、まだ何もしていない。

このまま還ったら、ここに来た意味がないんじゃないかと思って。

ただがむしゃらに、ここから離れようと、その人に背を向けて駆け出していた。

だが。

今いる場所が、隔離された閉鎖空間であると思い知らされたのはすぐのことだった。

無限ループのように……続くのはいつまでも同じ煉瓦と夜星に囲まれた草地の道。

「逃げてても無駄です。ここに……あなたの居場所はありません」

そして、頭上から唐突にそんな声が掛かって、はっとなって顔を上げ見えるのは。

眩しくて目を開けていられないような……まるで太陽の光のような、巨大な『力』の塊だった。

その向こうにいるであろう声の主は。

なんのためらいもなく少女に向かってそれを振り下ろしたのだから。



グウツ、ゴオオオンツ！

「……っ！」

今度ははっきりと、それが叩きつけられ、暴発する音が彼女の脳天に突き刺さる。

少女の悲鳴は掻き消され、生身の身体であったならば全身の骨が砕けるような衝撃が体中を走った。

彼女にできるのは……轢かれた動物のように、叩きつけられてその大地へと這い蹲るだけ。

「眠りなさい。彷徨えし魂よ。そして忘れなさい。……これは、一夜の悪夢だったと」  
「……う」

もはや少女は動くことすらもままならなかった。

そつと……髪に添えられるのは、予想していたよりも細く小さな手。

そこから温かい熱が伝わり、『力』が流れ込んでくるのが分かる。

少女を壊し……消し去ろうとする『力』が。その人は……これは悪夢だと言った。

少女は、自身を形作るもの、記憶、感情……そして思い出、その全てを解かれ、

分解されていくのを感じながら。

その残ったかけら……魂で、本当にそうなのかな、と考えてみる。

これは、最期に与えられた不思議な夢なのだ。

走馬灯とも違う、きっと何か……意味があるだろう、夢。

それが、そんな悪夢で終わるなんて、とても悲しいことだと強く彼女は思う。

このままじゃ、終われない、と。

助けてっ、助けてよっ、誰かつ！

だから少女は叫んだ。

言葉になっているかも分からない、その言葉を誰かに向けて……。

(第27話につづく)

## 27、紅の光。鬼じっこのはじまりはじまり

「……………」

彼女を消そうとするその人物は、少女の必死の叫びに答えない。

聞く耳を持っていないのではなく、聞こえていないのだろう。

それでも少女は……………ただそうすることしかできないように、助けを請う。

他力本願だって、それこそ都合がいいって思われるかもしれない。

でも、このまま何もしないで消えるのはいやだって。

最後の最後まで、あがいてやりたいって、彼女は思っていて……………。

それはきつと、今まで自分のことばかり考えて、独り最期を迎えることになる、少女の後悔。

しばらく、無音の重圧が辺りを支配したが。

そんな少女の思いが受け容れられたのか……………奇跡は起きた。

何も無い虚空にかるうじて動く指を伸ばしたその先。

亀裂なのか、ほころびなのか。まるで硝子にひびが入るかのよう  
に、滲み出すのは紅の光。

「……」

少女は、その先に何があるかも分からないまま、それにそっと触  
れて……。

「消えた？ ううん、逃げたのかな……」

一方、そんな彼女を追い詰めていた、もう一人の少女は。

消えた白光の思念体……いわゆる魂とかヒトダマという類のもの  
を見て、半ば呆然と立ち尽くす。

今日の思念体は、思いのほかしつこかった。

この、サウザー学院のある、ジャスポースは、現世とあの世の境  
にあるため、

今のような大きな未練を持った思念体に限らず生死の概念から外  
れた存在が迷い込んでくることはよくある。

ジャスポースはそもそもそれらの思念体……あるいは靈魂に一時  
の安らぎを与える、

療養地の意味合いが強いため、普通ならば今のような存在を通常  
拒むことはありえない。

だが、七つの災厄、終末の種植えられし世界、そこからやってくる存在ならば話は別だ。

この学院には、世界を終わらせないための最後の希望がある。人間を滅ぼさんとする災厄の一つ、【完なる罪】に、その希望を悟られないためには。

その世界に住るものを、学院に入れるわけにはいかないのだ。  
……これ以上は。

それなのに。  
今、それをみすみす取り逃がしてしまった。  
原因は不明。

……いや、もしかしたらただでさえ空間が安定していないこの世界、  
自らの作った異世と呼ばれるパーソナルスペースが、  
他の空間とリンクしてしまったのかもしれない。

「一刻も早く、対応をしないと……」

今の思念体は、まるでその感情が伝わってくるほどの巨大なものだった。

あれだけの力があれば、人に憑き潜むことすら可能かもしれない。

他の生徒たちが心配だったが、彼女は走り出す。

その対策を講じるために。

そして、彼女にとって最優先事項である、世界の希望を。

大切な人を……守るために。

(第28話につづく)

27、紅の光。鬼ごっこのはじまりはじまり（後書き）

ここから、吟也くん視点に戻ります。

## 28、修行。こつそりやるのが美学です

「カイン」。ちよつくら行つてくるわ」

「ああ？ 今日もかよ……あんま毎日毎日調子こいてやってつとバカになンぞ？」

そこは、サウザー学院男子寮の一室。

青のタオルと、まるで竹刀のような長さのスパナを持って、僕は寮の相方に声をかける。

それ対して、読んでいた大衆雑誌から顔をあげ、呆れたように言葉を返したのは、

二ツ柳カイン。ふたつやなぎ

鋭い針のような銀髪に、月を思わせる妖艶な瞳を持つ、一言で言えば魔界のプリンスのような……

それでいて中身は悪いことをしようとしてもてんでうまくいった試しのない、

究極な善人の異名を持つ男だ。

「関西人にバカゆるーな言うてるやろつ、バカイン。しかもそういうおかしな言いかたすんなや。」

第三視点の妖精はんが、びっくりするやろーが」

「またわけの分からないことを。……にしたって、根つめすぎじやね？」

あんま調子に乗ってつとマジ死ぬぞ？」



今度は完全に雑誌から目を離し、カインは自らのベッドにその大柄な身体を器用に詰め込んで座りなおしながら、ちよつと真面目にそんな事を言う。

それを聞いた僕は、思わず笑みをこぼし、すぐに言葉を返した。

「大丈夫やて。最近調子乗ってるっちゅーか、マジ調子いいねん。これもアイデンティティーっちゅーか、目標がはっきりしたからやと思うけど、

楽しくて楽しくてしゃーないんよ」

すると、カインは半分呆れ……再び視線を雑誌に落とす。

それから、諦めたように言った。

「幸せそうな顔しやがって。……そう言うキラースマイルはよそでしろっての。

ああ、もういいや。さっさと行ってさっさと負けてこい。……オ

レは寝る」

まるで不貞腐れたかのように、そう言い捨てて……ゴロンと横になつて僕に背を向けるカイン。

「そんなカンタンには負けへんっつもの。……んじゃ、ほなら、行ってくるわな」

口は多少悪いけど、何だかんだ言つて気遣つたくれてるんだなあと思いつつ。

僕は自らにあてられたベッドの向こう、クローゼットの扉をおもむろに開ける。

するとそこには、ブラックホールのようにぽっかりと闇色を覗かせる二つの穴があった。

それは、トラベルゲート【虹泉】と呼ばれる古代の遺産を引つ張り出し、ブルック金属性の魔法によって作り出されたものだ。

二つの穴の向こうには異世と呼ばれる、異空間が広がっている。簡単に言えば、それは前回の試験の会場となった場所と同じものだ。

もつとも、それは相部屋のカイン以外には秘密にしていた。勝手にそんなものを作ってと怒られる気もしたし、それより何よりこっそり修練ができる場所が欲しかったから。

「おっしゃ、バトル開始っ！」

僕は自らを鼓舞するように、そう叫んで右側の穴へと入っていく。

その瞬間、覚えるのは軽い酩酊感。

異世の入り口を通過した、証拠の合図だ。

中に入ると、すぐに視界が開け……大きな鉄板に囲まれたような秘密基地な様相を呈する部屋に出る。

目前には巨大なスクリーンと、申し訳程度に盛り上がった中央にある踊り場が、

機械的な幾何学模様を形作り、発光しているのが分かる。

それは……実際に体験できるチャットとオンラインゲームの融合。中央にあるお立ち台に立って足元のスタートボタンを押すことで、顔も知れない誰かと……トレーニング、いわゆる模擬戦闘ができるというシロモノだ。

僕は、この大仰な装置を大いなる偶然で開発してから、毎日のようにトレーニングをしていた。

現在、というか始めてから変わっていないが……僕他に、三人の人物がそれに参加している。

だとするならば、相手のほうにもこれと同じ装置があるのかと言えば、

それはノーであると僕は思っている。

おそらく一人一人、このトレーニングに入る方法は違うのだろうとも。

何せ会ったこともないので確認しようもないが。

ただ、こうして四人で切磋琢磨しあうのに理屈など存在せず。

これは運命であるからそんな細かいことはどうでもいい、なんて最近では思っていたりもする。

これも見えない友情というやつだろう、なんて。



29、Req。いつして僕は自分に酔っている

学院にやってきてから数ヶ月はたっただろうか。

もうすぐ、夏が訪れる……そんな時期。

生徒の数もとりあえず安定し、学院の生活にも慣れてきて。

自らの信念を確立させた僕にとって、彼らとのトレーニングは非常に有意義なものだった。

模擬戦闘とはいえ、相手は手加減なく強く、実戦ならばもう何度死んでいるか分からないくらいで。そのギリギリの感覚がなんだか楽しくて。

同室のカインが心配するくらいのめりこんでしまっていた。

それは、バーチャルとはいえダメージが全くないわけではないせいもあるだろう。

例えばそれこそ死ぬような一撃を受ければ、

その次の日一日は重病人のような有様になってしまつものだから、カインには迷惑をかけているなと思わないでもない僕である。

「別に根つめとるわけやないんやけどな……」

いくら努力しても、自らの目標には足りないよ、そう思ってしまうだけ。

いや、それがよくないのかもしれないけれど。

僕は苦笑しながら……足元にあるスイッチを押した。

すると、目の前のモニターが迫り、視界と一体化する感覚。

瞬きして再び目を開ければ……そこには三色の人型の影を落としたり発光体が現れた。

相手にもきつと、僕自身がそう見えているのだろう。

ちなみに、僕を識別する色は赤だ。

互い互いが認識したことを感じ、僕がスパナを構える構えないかのタイミングで、

試合開始を告げるような……ゴングの音が鳴り響く。

チャットなどと言ったが、実際に語るのは口でもメッセージでもない……その拳同士だ。

「いったるでっ!」

僕は体勢を低くして、鋭く呼気を吐く。

試合形式は、なんでもありの四人対戦、デスマッチだ。

相手の三人が攻撃をやめるか、自らが動けなくなるまでひたすら戦いは続く。

今のところ対戦成績はダントツとまではいれないがビリである。ままならないからこそ、楽しくやれるというのもあるだろうが。

そんなわけで……ルームメイトのラインを除いて、誰に知られることもなく。

日課のトレーニングが始まって……。

それからきっかり三時間後。

僕はぜえぜえと止まらない荒い息を宥めながら、大の字になり寝転がって。

鉄板とで囲まれたその部屋の、まぶしい天井のライトを眺めていた。

「ぐはっ……めずらしく、か、勝ったで」

大量に流れる汗を、持ってきたタオルで顔を洗うように拭いつつ、誰にともなくそう呟く。

見た目通り満身創痍で、しばらく動けそうにないが、

この終わった後の……胸のつかえがとれたような、スッキリとした感覚が好きで、

このトレーニングが続いているのだと自分では納得していて。

「……ふっ」

だが。それもほんの束の間のことだ。

光に透けるタオル越しの天井を見ていると、自分が学院に通う目標、

確固たる意志を植えつけた、ある情景が浮かんでくる。

それは、非道という言葉すらおこがましい、

たった一人、世界の責を負わされたもののトレーニング風景。

いや、トレーニングなどという言葉など、甘っちょろすぎてそれの表現には値しない。

地獄と……悪夢。

そんな表現のほうがよっぽどしっくりくるだろう。

思えば現実にそんなことはなくて。

本当にそれは僕のただの悪夢にすぎないのかもしれないが。

僕はそれ以来、その光景を忘れることはできなかった。

今いる部屋も、その心象が現れそれを模すように作られている。

だからこうしてトレーニングを終えても。

すぐに僕はどうしようもない乾きのようなものを覚えるのだ。

それは、果てない強さへの渴望。

自らの目標を……夢を叶えるためには、まだまだ足りないという魂の訴え。

「あかん。……ここにずっとおるとほんまにカインの言う通りになってまう」

ただひたすらに強さを求め続ける修羅とは少し毛色が違うから。力に溺れてしまうような……カインが心配しているようなことにはならない自信もあったけど。



ここで汗だくのままにいるよりは、シャワーでも浴びて早々に寝てしまったほうが余程有意義だろう。

僕がそう呟き、苦笑いをして部屋を出ようとした……その時だった。

「ん？ ライトが……」

突然明滅を始めるライトに、思わず顔を上げる。

自前で制御しているのだから、普通にそんなことありえないはずだ。

そう思って首を捻っていると。

パチンと軽い音を立ててあたりは真っ暗になってしまった。

そしてさらに、いきなり吸い込まれるような風が吹いて。

辺りの空気が今までのものとは違う、別の世界に入り込んでしまった感覚に。

僕は息をのんだ。

一体何は始まるのかと、一方で期待する気持ちを抱きながら……。

30、とらぶる体質。自ら全力でツッコミにってます

別の異世との、突然のリンク。

それはとかく珍しいことでもなく、この世界ではよくあることだ  
と言えばそれまでなのだが。

「何や？　なんか、おるんか……？」

その空間同士の接触到反発するかのように、紅い電流がかんしゃ  
くを起こし、

風の流れ行く闇の向こうから何かの強い存在感……というか、プ  
レッシヤーを感じて、  
思わずそんな眩きがついて出る。

相手の反応は……ない。

僕はそれが何であるのか、考えを巡らせてみる。

「ま、まさか。クリッター……じゃ、ないやろな？」

異世の入り口同士をつなぐはざ間に棲まう、

出会ったら最後生きて帰れないとまで言われる都市伝説レベルの

魔獣。

自らのセリフに戦慄し、おののいたが……。

すでに腰は引けているどころか起き上がるのもしんどい状態だ。

僕は、その最悪な想像を極力考えないようにしながら、  
暗闇の向こうにいるものがなんであるのか、

見極めようとじっと見据え続けることくらいしか術はなかったん  
だけだ。

助けてっ！

「……っ」

その瞬間、確かにそんな助けを求める声が聞こえた。

それも少女のものらしき声に、それまで八の字に下がっていた眉  
がすっと上がる。

「よっ……だっ！」

そして、かさかさのゴムがねじれてひび割れるような……そんな  
身体中の軋みを、

多大なるやせ我慢でシカトすると、僕は反動をつけて起き上がり、  
なんのためらいもなく気配のある……声の聴こえるほうへと歩いていく。

「何やこれ？ ヒトダマ……それともプラズマか？」

僕の視界に入ってきたのは、人でも魔獣でもなく。

圧倒される存在感を放ちながらも、今にも周りの闇にまぎれて消えてしまいそうな、

白い炎のような光、だった。

「……」

僕はそれを見据え……無言のまま手を差し出す。

すると、その光が、それを待ちわびていたかのように、吸い込まれるように近付いてきて。

すうっとかすれ……消えてしまった。

それはまさしく蛍のようにはかなくて。

結局なんだったのだろうか、わけの分からないまま半ば呆然としている。

しばらくしてライトの電力が復旧したのか、そんな立ち尽くす僕

を照らします。

……先程までの存在感も、もはや跡形もなかった。

「んー？ 確かに誰かが助けを求めとるように感じたんやけどな。そんな幻聴まで起こるなんて、やっぱり疲れたまっとするんかなー」

僕は頭をかきつつ、気だるい身体を引きずるように、その部屋を後にする。

だから僕は、気づかなかった。

自らが既に、これから起きる、騒動の中心に立ってしまっていることを……。

(第31話につづく)

### 31、都市伝説。でも女の子ならすべからく萌え

『あの……すみません。話を……話を聞いてくれませんか？』  
「んあ？」

そして、次の朝。

僕はまるで耳元……いやもっと近いところでそう言われて寝ぼけ眼のままそんな声を漏らした。

『あの……お願いします。わたしの話を聞いてくれませんか？』

今日、学院は休みだったはずだと思い出し、再び瞳を閉じかけようとする僕に、

追い打ちをかけるかのように聞こえるそんな声。

一瞬、カインの性質の悪い悪戯か何かだとも思ったが。

たとえカインに声帯模写の特技があったとしても、こんな小鳥のさえずりのよう、

なんて比喻が恥ずかしげもなく言えるような、そんな澄んだソプラノの声は出せないだろうと僕は確信していた。

それならばこの声は誰だろう？

少なくとも学院の生徒の誰かじゃないかと、くだくだ考えているうちに、  
これは確かめたほうが早い事に気づいた僕は、あくびをしながら上半身だけ起こして、  
辺りを見回した。

部屋の反対側には、完全熟睡しているカインが大いびきをかいている。

他には当然、誰もいなかった。

僕の愛すべき『もの』たちも、まだ覚醒している感じじゃなくて。

「何や？ 誰もいないやんけ……」

僕は独り言のようにそう呟き、それじゃあおやすみと再び惰眠をむさぼるため身体を倒す。

すると、その瞬間。

どこからともなく遠慮がちな先程の小鳥のさえずりを思わせるような少女の声が聞こえてきた。

『あの……聞こえていますか？』  
「うおあっ！？」

普段から人ならざるものの声を聞いていたから、

どこからともなく聞こえてくる声つてのには慣れていたはずなんだけど。

なんていうか、その声は物凄く近かった。

耳元で囁かれる……そんなレベルじゃないその声に、僕は飛び跳ねるように驚きの声を上げ、

そのままベッドから転げ落ちてしまう。

そして無様に腰を打ちつけて、うぐぐと呻いていると、再び申し訳なさそうな声が聞こえてきた。

『だ、大丈夫ですか？ ご、ごめんなさい。わたし……』

「いや、気にせんといてな、ベッドから落ちるんは慣れっこやから。」

えっと、それよりつかぬ事聞くかもしれんけど、どこから語りかけていらっしやるの？

テレパシーか何かですか？ 姿が見えへんのやけど……」

どこへ向けて喋っているのかわからなくて、視線を彷徨わせ、地べたに落っこちたままそう言う。

その声の主は、ちよつと躊躇うような素振りを見せて。

『……ええとですね。テレパシーとはちよつと違うと思います。

なんて説明したらいいんでしょう……あなたの中というか、瞳の中って言えばいいのかな。

そこにいる感じですか』  
と言った。



相変わらずダイレクトに脳を揺さぶってくるその声。  
ただ、何となくその声色から、僕と同じ程度には、  
状況をうまく把握できていない感じなのが分かる。

「テレパスやのうてオカルトやん。」

……あーっと、つまり君今、ロボを乗りこなす操縦者のごとく、  
僕の視界を共有しとるってことでいいんかな？

目の前の……爆睡しとるアクマみたいな大男は見えとるか？」

なんとなく、そのような都市伝説というか、

ホラーを思い出してちよっと混乱気味にそんな事をのたまう僕。

それに対し、ちよっと不思議そうにしながらも、見えます、と頷く声の主。

それは……本当に、自分の中に他人が入り込んでしまっている感覚だった。

普通だったならそこでおおいに慌てふためき、醜態を晒すところであるが。

どうやら女の子らしいその声の主にこれ以上ヘタレな所を見せられないという、  
僕のつたないプライドが勝った。

意識して自らを落ち着かせるように努めて。

そもそもどうしてそんな事になったのかを、僕は考えてみることにした……。

（第32話にじゅうく）

### 32、自己統一性。故に僕らはひとつになれる

「うん。ま、この世界ならこんなこと日常茶飯事って言えなくもないんやけど、

どうしてこんなことになったんやろ？」

『それは多分、昨日のことが原因だと思っんですけど……』

「昨日？ あ、もしかして、昨日聴こえた助け求めとる声って、君やったんか？」

自信がなさそうにぼそりと呟く声の主。

だが僕は、そう言われてすぐにピンと来た。

ついでに快眠中のカインを起こさないようにクローゼットの開け、話題に上がった昨日の現場へと直行する。

『ええ。……そう、そうですっ。わたしの声を聞いてわたしに手を差し伸べてくれたの、

やっぱりあなただったんですね？』

「助けた？ 君を僕が？」

何だか嬉しそうな声の主に、そんなことあったっけかなあと考えてみる。

確かに僕の耳に助けを求める声は届いたが。

その声の主である彼女の姿はどこにもなかった。

かわりに昨日この場所で見たのは、白く光る炎のような存在感を放つ何か、だ。

それは僕が触れることで消えてしまったわけだ。

「あつ、さよか。あれが……いや、うん。そやな、思い出したで。確かに君の呼びかけに応えたんは僕や」

ちよつとだけお茶を濁すように、それでも頷いてみせる僕であったが。

その実心の中では、全ての線が一つに繋がった感じがあった。

昨日見たあの白い炎こそが、今聞こえる声の主そのものだったのだろう。

分かりやすく言えば、彼女が魂そのもののような存在だったのかも知れない。

彼女の言葉から判断するに、そのあたりの自覚はないようだったから、

僕はそれを敢えて口にはしなかったけど。

そんな彼女が今こうして僕の中にいるのは、昨日が僕が触れた時に、

憑依……とは違うのかもしれないが、入り込んでしまった結果なのだろうと考えていた。

見えないのに、そこにいる存在。

僕の心に住る存在。

彼女がどうしてそんな目に合っているのかは正直分からなかったけれど。

それを受け入れた僕には、一つだけ分かることがあった。

だから僕は……それを口にする。

「それで……や。助けを請うたっちゅーことは、僕が助けなあかん何かがあるってことやろ？」

僕は君の何を助ければいいんや？」

それは驚くほど自然に出た言葉だった。

いつもなら心中に照れが燻る言葉にも、躊躇いがないのは。

いつの間にか消失していた、乾きのせいかもしれない……なんてことを思う。

『助けて……くれるんですか？』

ちよっと驚いたような、少女の声。

「はは、何を今更っちゅー話や。助ける気がないなら、こんなこと言わへんって」

本当は、彼女が僕のことを起きるまで待つていたくらいだし、その助ける内容以前に、

彼女には僕から出て行く……あるいは離れる術がなく、僕自身にそのことを含めて頼るしかなかったんだろつということ  
が考えられたが。

当然のごとく、そんなことは口にしなかった。

まあ、僕自身、彼女を助けることに嘘偽りがないのは確かだ。

それが、僕のアイデンティティーだというのももちろんあるが。

それよりも深く僕の心の中に。

彼女を助けるという選択肢しか存在しないということがあっただ  
ろつ。

その強い気持ちは、何となく少女にも伝わったらしい。

ありがとうございます、と、感極まった感謝の言葉を文字通り、  
僕の心にダイレクトに響く声色で述べた後。

彼女はぼつりぼつりとしたことはいきさつを語り始めたのだった……。

(第33話につづく)

### 33、自己紹介。ぶりっ子は分かってても可愛い

彼女が言うには。

彼女自身、どうやってこの世界に来たのかが分からない、このことらしい。

初めは、夢か……それこそ死後の世界だと思い込んでいたそう。

それならば何故ここに来たのか。

それはこの世界にいる大切な人に会うためだと言う。

そのことについては、彼女は特に強い確信を持っていたので言葉の通りなのだろう。

だが一つ、ここで問題が起こった。

どうやら彼女、その肝心な大切な人が誰なのか覚えていない……いや、忘れてしまったというのだ。

よりもよって都合の悪い、そう思わざるをえなかったが。

彼女がそんな風に忘れてしまったのにはわけがある。

それこそが、僕に助けを求めた大きな理由の一つでもあるのだが、この世界を……大切な人求めて彷徨っていた彼女は、突然何者かに襲われたらしいのだ。

彼女は、圧倒的な力のもと、殺されかけ。

そのショックで記憶をいくつかこぼしてしまったみたいで。  
ここに来るまで何をしていたのかとか、何者なのかすらも覚えていないという。

そして……もはやこれまでかと思った瞬間、僕の登場というわけである。

「ふーむ、大体事情は把握したけど、それでその、君を襲ったやつのことやけど、顔とか見なかったんか？」

『ごめんなさい。はつきり見えなくて、まっくらでしたから。』

でも確か……黒い髪の毛のひとだったと思います』  
「黒髪、ねえ。それだけじゃちっと弱いわな」

何せ生徒だけでも黒髪はかなりいる。  
しらみつぶしに探すとすると、骨が折れそうだなと、途中まで考えて。

そもそも犯人捜しが彼女の目的ではないだろうと判断し、それ以上はそのことを考えるのをやめた。

「ま、いいわ。とりあえず犯人探しは目的やないしな。それよりも君の……」



大切な人というのが誰なのかを思い出し、探すほう先決やな、と言いかけて。

僕は今頃になって人と人とのコミュニケーションに不可欠なやり取りをしていないことに気づいた。

「ああ、君、やないで。僕今まで何してんのって感じやったわ。自己紹介の一つもしてへんやないか。堪忍な。

僕の名前は紅恩寺吟也、この学院の生徒をやつとる。

専門は『金』の属性に関する魔法、能力、奇跡、諸々や。

成績は下から数えてベスト10ってところで、趣味はメカいじり、道具の修理ほか様々。

夢は……まあ、そのうち教えたるわ」

『わたしは……その、えつと……』

僕がマシンガンのように捲くし立て、そんな自己紹介を終えると、そのバトンを受けた少女は、何故か悩むように固まってしまった。

「あ、もしかして、ジブンの名前も忘れちゃったとか？」

『……はい。その、ごめんなさい。せつかく自己紹介してもらったのに』

何とはなしにそう言つと、とても悲しそうな口調でそう返してくる彼女。

僕は、それを覚えていないのではなく……言えない理由でもあるんじゃないか、

なんて思っていたけど。

それならそれで仕方がないとばかりに、明るく言葉を続けるのだった……。

(第34話に つづく)

### 34、おそろい。それは哀しきみれん

大切な人のこと以前に、自分のことすら分らないという彼女。それならばと、僕はちよつと考えて。

「そんならこれから名前を呼ぶ時にちよつと面倒やなあ。

そや、暫定で僕が名前つけるっての……どうや？」

『えつ？』

なんとはなしにそう言つと、あからさまに驚いた様子を見せる少女。

まさかそんな事言われると思っていなかったのか、それから言葉もない。

「……いややつた？ ま、何サマのつもりやねんって感じはしなくもないねんけど」

『あ、いえ。その……お願いします』

おどけて僕がそう言つと、折れたのか……それがかまわないのか、何だかちよつと恥ずかしそうに少女はそう答える。

僕は、それに満足げに頷いて。

「それじゃあ、そうやな。……詩奈しこなっちゅーのは、どうや？」

ほんの僅かばかり考えた後、そう言ってみせる。

『……しいな、ですか？』

「そや、僕とウタ関連でおそろいやねん」

『はい、とつてもいい響きの名前ですね。ありがとうございます。』

あ、でも、あんまり考えずに出てきたみたいですけど、

もしかして最初から決めてたなんてこと、ないですよね？』

まるでそんなことが過去にあったとしても言いそうな雰囲気で、そんな事を聞いてくる彼女。

「まさか。……んな、確かひいばあちゃんの名前やねん」

『わ、ひどいです』

「ひどいって、うちのひいばあちゃんに失礼やろ」

『あ、別にそんなつもりじゃ』

名前をお互いに把握したせいなのか………くだけた様子でそんなやり取りを交わす。

早くも会ったばかりには見えないような、そんな雰囲気すら感じられて。

「ま、ええわ。僕の名前でも名前でも好きに呼んでくれたらいいで」

『はい、わかりました。ぎ、吟也さん』

やっぱりちょっと恥ずかしそうに、僕の名前を呼ぶ……詩奈。

なんとなく、こういったやり取りに慣れていないような、人見知りするタイプなのかな、なんてことを僕は思う。

「……ほなら、行くで、詩奈。まずはそつやな、何とかして記憶を取り戻す方法考えよか。

ちよつといいアテがあんねん」

『はいっ』

だけど、嬉しそうに頷いてくれるのがなんだかこそばゆくて。

今僕はどんな顔をしているだろう？

そんな顔を見られないですんだのはよかったかな、なんて思いつつ。

僕は異世、トレーニングルームを後にしたのだった……。

(第35話につづく)

35、おさらい。細かいことに気をきかせたい

ジャスポース学院。

それは、サウザー・ロマンティカが世界の平和と安穩を守りし勇なるもの、英雄を育成する学院である。

現世とあの世の境にそれは存在し、清く正しい心の育成から始まって、

古今東西に溢れる、あらゆる救うための『力』を、教義と実践を交えて学ぶことのできる、

まるで一つの夢の形を体現したような理想郷、であった。

現在その生徒数は百名ちょっと。

教師は二つに分かれるクラスそれぞれの担任に加え、元々はやおろずの神の癒しの地として根を張る、学院を囲むようにして広がる、

ジャスポースの街の住人全て、である。

僕は、その守り支えられて成り立っている学院の中央にある通りを……のんびりと歩いていた。

その光景は、当然詩奈の視界にも入っているだろう。

昨日も見た、赤煉瓦の建物に両脇を囲まれ、上空には青空を覆う入道雲。

歩く、赤茶色のインターロッキングの通路の縁には、綿飴のように刈られた植樹帯が見えた。

『あの……それで吟也さん。これからどこへ向かうんですか？』

「ああ、それなんやけど……って、ちょっと待つといて」

僕は詩奈の言葉に愛想良く答えかけ、はたと思い直し、制服の、ポケットをあさる。

そして……そこからすぐに取り出したのは、

このファンタジーな世界では際立って見える携帯電話だった。

それをおもむろにパチンと開いてみせると、僕は自らの耳に当たった。

「よっしゃ、これでOKやで。しゃべってもええよ」

『携帯？ えっと、それって……？』

「ああ、外歩くときは、こうやって携帯で話しとるふりしながら詩奈と会話してほうがええと思てな。何か詩奈のこと狙っとるやつもおるみたいやし、なるべく怪しまれるような行動はしないほうが得策やと思たんや」

それは……部屋を出る時に、トレーニングルームから出てきて、すぐに起きていたカインと会話をして気づいたことでもあった。

普通にそこに詩奈がいるつもりで会話をしていたら、

お前、やっぱ無理してるんじゃないかねえのかと、心配されてしまったのだ。

その場は何とか誤魔化して出てきたのだが、  
同室でいろいろ秘密を知っている（トレーニングルームのことと  
か）カインならともかく、

あまり外で詩奈の存在がわかるような行動はすべきではない、と  
思ったわけで。

本当なら心と心で会話、なんていう便利でこ洒落たことができ  
ばよかつただけで、

僕の身体の中においても、お互いの意識は完全に切り離されている  
らしく、それは叶わなかったため、こうしてあまり違和感のなさ  
そうな代替案を考えたのである。

『言われてみればそうですね、すみません』

「いや、ええって。話さな不安になる気持ち分かるもん。」

それに、詩奈の声、僕かなり好きやからどんどんしゃべってくれ  
てかまへんよ」

恐縮した様子で謝る詩奈に、僕はおちゃらけ、フォローするよう  
に、そんな事を言う。

『あう……その、ありがとう……ございます』

案の定詩奈は戸惑ったように、照れた様子でそう答えた。

赤くなっている様子が浮かぶように。



なんだか微笑ましかった……。。

(第36話につづく)

### 36、パティシエール。二次ではなく、誰かに似てる

「あ、そんで、これから行く場所のことやけどね、これからちよつと食堂向かお、思うねん。」

そこに、いろんな魔法効果のある料理を作る子がおってな、まゆつていうんやけど、

彼女なら詩奈の失った記憶を取り戻すようなもん、知っとるって思たんよ」

『魔法の料理ですか。なんだか凄いですね。ファンタジーの世界みたいです』

そのまま話題を戻すように、僕がそう言つと。

詩奈は何だかとても感心したようにそんな事を言った。

「みたい、やなく、まんまそうなんやけどな。今の僕と詩奈の状況も含めてさ」

『くすっ、そうでした』

楽しそうに笑う詩奈。

僕もそれにつられて笑みを浮かべながら……目的地の食堂を目指す。

だが、のんびりとしていられたのはこの時だけだった。

その時僕はまだ、その穏やかな空気を脅かす暗躍せし計画が立てられていることに、

気付いていなかったからだ……。

しばらくして辿り着いたのは、学院生百人は楽に入れる、  
食堂というフレーズが似合わない豪華なレストランのような場所  
だった。

無駄に気質の高い赤胴張りの扉を開くと、そこにはそれなりの人  
数でにぎわっているのがわかる。

「……さて、まゆは厨房のほうかな？」

そんな事を呟きながら辺りを見回していると。

ちょうどその厨房から長い長いコック帽を目深に被り、

白のフリル付きの紺色のエプロンドレスを身に纏った小柄な女の  
子が、

デザートらしい紫色のソースがまぶしい一品を台車に乗せて出て  
くるのが見えた。

「おい、まゆ、おはようさん。ちょっとええか？」

「あ、関西弁のお兄さんっ、おはようございます。……ちよっど  
よかったです」

吟也がそんな風に声をかけると、はっと顔を上げ、嬉しそうな表  
情を見せてからそう言つと、

台車のストッパーを降ろしてとことこと僕の元へとやってくる。

「何か御用ですか？ 朝ごはんのオーダー？」

それなら今新作が完成したので、皆さんにご披露しようと思っただとこなんですよ」

そう言っ<sup>と</sup>まゆこと、<sup>と</sup>鳥海白眉は、

小首を傾げるように台車に乗ったデザートを示してみせる。

よくよく回りを見てみると、そこで食事をしている全ての人のところこ、

そのデザートが添えられていた。

笑顔で舌鼓を打ちながら談笑している人もいるし、評判はすごいというようだった。

まゆは、当然僕と同じ、サウザー学院の学院生の一人だが、クラスは別だった。

とはいえクラスがニクラスしかないことや、

合同授業の多いこと加えてあのすうのルームメイトということもあつて、

比較的仲のいい友人の一人でもある。

そんなまゆは、料理に天賦の才を持っており、

「じつして地元のロックさんと混じってここで料理を皆に振舞うのが常で。」

「ああ、それか？ 何やうまそやな。ムースか何かか？」

「これは白ごまプリンです。その上にラズベリーソースをかけてみたんです。」

名づけて『秘密のラズベリーソース』、ですよっ」

『おいしそう……』

身を乗り出し、解説を始めるまゆに。

独り言かなんなのか、そんな呟きを漏らす詩奈がいて……。

(第37話につづく)

### 37、試食ドッキリ。実はワカツテマス

何はばかることなく、目の前のスイーツに感嘆のため息をもらす詩奈。

なんとなく気になって、まゆのほうを窺ったけど。  
やはりその声は、僕自身にしか届いていないみたいだった。

まゆは、変わらぬ様子でソースは情報<sup>ソース</sup>とかけてるんです、  
なんて得意げに解説を続けている。

「ふーん、ほないただいとこか。……ふむ。このビミョウなすっぱさが絶妙やな。  
その魔法の料理につこてるみたいだな、ネーミングセンスは、どうか思うけど」

僕は二人の言葉を受けて近くの席に座ると、  
真っ白なお皿の脇に添えられてあったスプーンを掴み、一口いただいてからそんな事を言う。

先ほど話した様々な魔法効果を起こすまゆの作る料理は、  
悩める学院生たちの頼みの綱として、愛されていた。

ただ、やはり魔法が絡むせいか、何が起こるかわからないという  
か、不完全なものが多い。

僕はここ最近、その不完全な料理を完全なものにするため、

不幸な生贄……ようは味見役の任を受けており、その効果の大きさは、十二分に理解しているつもりだった。

だからこそ、僕はその料理の力を使って、詩奈の記憶を取り戻せればと思っていたんだけど。

僕は、その後に聞いたまるで邪気のないまゆの言葉に、絶句する羽目になる。

「あれ、そうです？ 魔法料理の中でも結構気に入っている名前なんですけど」

「え？ 魔法りよ……っ!？」

僕という言葉は最後まで届かなかった。

急に視界がぼやけ、まゆが幾重にも見えるような錯覚に陥り、僕の意識は激しく浮き沈みを繰り返す。

確かに新作だとは言ったが、これが魔法料理ではないとは一言も口にしていない。

それを特に考えもせず口にしたのは確かに僕自身ではあるが。

「ち……おまえっ……」

これは何の魔法料理だと言おうとした僕だったが。

そんな僕を見て……なんだか驚きを隠せない風の、まゆの姿が目に入った。

自分でやっておいてなんだよそれはとも思ったが。

逆に僕のリアクションがオーバーすぎてうるたえているとも……  
言えなくもない。

『吟也さん！？ どうしたんですかっ？』

当然のように心配そうな声をあげる詩奈。

……どうやら中にいる詩奈には何も影響がないらしい。

僕はそんな詩奈にも間接的に答えられるよう、何とか意識を保ちながら口を開いた。

「……この感覚、何かに変形する……タイプのやつやなっ」

僕は以前、カエルになったりサボテンになったりするタイプの料理を試食したことがある。

それと感覚が似ているから、おそらくそういった類のものだろうと考えていた。

それをすぐにわかってしまう自分が何だか悲しかったが……。

それより何よりも、僕にはまゆに訊かなければならないことがあった。

だから……なんだか戸惑っているようにも見えるまゆが、前の言



葉に答える前に。

最後の力を振り絞って、言葉を挟みこんだ。

「まあ、そんなんはええねん……」コだけ聞いといたる。これ、他のもんには食わせてないやろな？」

それは……些細な約束だった。

僕自身には、何喰わせたっていいから……他の奴らにあまり迷惑をかけるな、というもの。

少々悪戯好きなところのあるまゆは、それで過去に一度、問題を起こしたことがあって。

魔法の料理を希望しているならともかく、試食でもドツキリでも自分が全てやってやるからと、

半ば一方的に僕がした約束であった。

「……はい、大丈夫です」

僕がそう言つてまゆから視線を外さず見つめていると。

まゆも視線を外すことなくそう言つて、しっかりと頷いてくれる。

「そか……なら、よし」

ホントは全然よくないのだけれど……。

これも自分の責任だと言わんばかりに満足そうに頷いたところで。

僕の意識はそのまま闇の中へと沈んでいった……。

(第38話にじじく)

38、?1マスノット。知己なれば至上の喜び

『吟也さんっ、吟也さんってば!』

誰かの、声が聴こえる。

僕は、それが詩奈の声だと気づき、それまで落ちていた意識を無理矢理浮上させた。

かつと目を見開けば……何だか馴染み深い、無機質な白に、黒のドットが散りばめられた天井が見える。

そこは、自室よりも目覚めの機会が多いんじゃないかって思えるほど僕がよく利用している保健室、だった。

どうやら、あの後完全に意識がブラックアウトしてここに運ばれたらしい。

まゆ一人では無理かもしれないから、誰かに手伝ってもらったのだろう。

なんて思っ、僕が視線を落とすと。

いきなり目に入ったのは一杯に広がる黄色いふさふさ。

まんまる橙色のほっぺに、その中に朱を含ませた大きな大きな一對の黒目、だった。

「どわわわあっ!?!」

「あううっ」

想像以上に大きなサイズのソレ……みゃんぴょうと呼ばれる、  
某アニメの猫型マスコットキャラの姿をした物体に、悲鳴を上げるようにしてのけぞる僕。

対するソレは……急に目を覚ましてそんなリアクションをとる僕に驚いたのか、

恐縮したような、困ったような声をあげていた。

『ど、どうしたの吟也さん、大丈夫!?!』

「関西弁のお兄さん、いくらなんでも運んでくれた薫さんに失礼ですよ。」

ぼくが言つのもなんですけど……」

「あ、大丈夫……じゃなく、めっちゃめっちゃアップやったから、  
っい」

あまりな僕のうるたえように、心配げな声をあげる詩奈と、  
気が付いた僕に安堵しながらも、やっぱりリアクションが過剰で  
す、

と言わんばかりにちよつと呆れているまゆ。

一方の僕は、なんで誌奈は驚かずに普通に受け入れてるのかな、  
なんて思っていた。

それはズバリ、恐縮している様子も何だかプリティに見える巨大なみゃんぴょうのことである。

何でも、このみゃんぴょうの少女……かんざか・かおる神坂薫は、もともとはきぐるみであったみゃんぴょうに憑く霊魂だか精霊と呼ばれる類の存在らしい。

もつとも、あくまでもそれは本性で。

僕意外のみんなには、ブロンドで小柄な、見えないことが悔しいくらいの美人さんに見えるそうぞ。

ある意味ものの本質を見聞きできる自身の能力に。

こんな弊害があるとは……思ってもみなかったわけだけど。

(第39話につづく)

39、とらんす。これが私のツボなんです

見えすぎても、困る事は結構ある。

僕がそんな事を考えていると。

薫は器用にぺこぺこ頭を下げて見せながら、どこか恐縮した様子でとんでもない一言を繰り出してくる。

「あの……その、ごめんなさい。女の子になってる吟也さんにとっても興味を惹かれてしまっています。いえ、この場合、吟子さんって呼んだほうがいいですか？」

「……は？」

意味がわからなくて、素っ頓狂な、らしくない声をあげてしまう。だが、その言葉がじわじわと耳に入っていくうちに……僕は様々な違和感に気づいた。

まずその声。わざと出した高い裏声ではなく、素直なメゾソプラノの声だった。

加えて、何だか大事なものを失ってしまったかのような空虚感と相反するそれまでなかったはずの感覚。

半ば確定事項な、想像したくない事実を、僕はおそろおそろ確認して。

「まゆっ……お、お前っ、何してくれんねんっ！」

完全に自分が女になってしまったことを悟り、僕は慌ててまゆに詰め寄った。

「えへへ。大成功ですねっ。何か変に苦しんでたですから、失敗かと思っちゃったですけど、

これで『秘密のラズベリーソース』、完成！ 男性は女性に、女性も男性になつて、

普段分らない男心女心を体験しようってものなんですけど、これは予想以上の成果ですねえ」

まゆは、してやったりの満足そうな笑みを見せ、一気にそうまくし立てる。

そして、どこから持ってきたのか、鼻歌なんぞ歌いながらどれにしようかなと、

女の子用の服を物色し始めるものだからたまらない。

着せ替えする気、満々だった。

「アホウっ、なんてことすんねや！ よりにもよってこんな時にっ！

しかも最初からそのつもりやったな、そんなもんまで用意しようて！

……こうしてやるっ、こうしてやるっ！」

半切れ状態の僕は、そんなまゆのテンションに合わせるように、人差し指でまゆのちよつと広いおでこをつついた。

「いたっ、いたたたっ、な、何するですかっ！」

「何するやて？ 決まってるがな、そのデコをさらに十センチ後退させるツボ押ししてんねやっ！」

「……っ！」

それを聞いたまゆは、涙すら浮かべてほうほうのていで僕から離れるが……それでもまだめげていなかった。

「だって、せっかくかわいくなっただすのに、女の子の格好しなきゃおかしいです」

「素でかわいくとかゆーな！ しかも普段は男のカッコしとるおまいがそんなん言っても説得力ないわーっ！ くくのっ、今度は身長が縮むツボ押しちやるっ！」

「うわ、ちよ、それ以上はあっ、逃げるですーっ！」

そしてついには、そう言って部屋から飛び出してしまっまゆ。すかさず追従しようかとも思ったが、この状態で考えなしに動くのも危険な気がして。

まゆのいつものスキンシップだと半ば諦めていた節のあった僕は、下手に追うこともなくひとつため息をつくしかなくて……。



#### 40、決めゼリフ。漏れなく僕は憤死する

「でも吟子？　さん、これからどうなさるんです？　やっぱりお着替えなさったほうがいいと思いますけど……」

そこで、そう呟いたのは薫だった。

まゆと違って本気でそう言っている風だったからこりゃまた厄介で。

「疑問符つきで勝手につけた名前呼ぶなっちゅーの。」

……着替えるって言ってもさー、恥ずかしいわ。このままでええんやないの？」

「いえいえ、全然よくないですよ。ちょっと見てください」

めんどくさそうに僕がそう言つと、薫はぺたぺた跳ねるように駆けていったかと思つと、

薄黄色の鉄柵つきのカーテンの裏に隠れていた細長い姿見を持って戻ってくる。

どうやらそれで、自分の姿を見る、ということらしい。

かつたるそうにしながらも、正直ちよつと興味があつた僕は、おもむろに姿見を覗き込み……自らをそれに映し出した。

『うわあ、か、可愛い。吟也さんが何か光って見えます……』

すぐに反応したのは、そんな風に驚嘆している詩奈だった。

「……だ、誰やねん？　これは。全くの別人やんけーっ！」

それを耳に入れつつも、衝撃でしばらく反応できなかった僕は、はっと我に返ったかと思うと、そう叫ぶ。

「何と言いますか、おさげが本来あるべき姿へと落ち着いてて、ぐーですよ。輝いてます」

「ぐーやあらへんよ。……うわ、何このなで肩、ほんまに制服着られとって似合わへんし」

何でこんなことになったんやと言わんばかりに、頭を抱える僕。

目の前には、薫の言う通り、透き通る……まるでみずみずしいイチゴのような長い髪を、

器用に後ろ手に三つ編みで一本に纏めた、活発さと脆さが同居している、

まるで全体から……赤い光が溢れ出すのが目に見えるほどの美少女が、そこにいた。

少し気に入ってた眉もすっかり細くなり、二重の奥にあるルビーのような大きな瞳が目立っている。

体つきも全体的に丸みを帯びていて、縮んでいるような気がするし、

そこには男だった面影は微塵もなく。

なんとなく、困り果てたような、怒りを何にぶつけたらいいのか分からないでいるような、

しかめ面をしていた。

けれど、もう完全に自分とは思えない姿を見てみると、何故だか僕は懐かしい人に会えたような……そんな気持ちを覚える。

こんな自分に……未だかつて会ったことなどないはずなのに。

「……確かにこれなら着替えたほうがましな気いしてきたわ。でもなー、やつぱなんつーか恥ずいんやけど……あ、そや。そんなら薫、あんさんのそれ、貸してくれへん？」

そう言って視界に入ったのは薫の着ている？ みゃんぴょうのきぐるみ。

といってもそれは、脱いだら中の人がいるわけではないことを、分かった上での台詞だ。

「いつもどうやって脱いどの？ なんつって」

「え？ や、やめてくださいっ！」

どうせなら、男子ならざれば中々できないことをやってみよう。

あえてのにやにや顔で手のひらをわきわきさせると。

真に受けたらしく怯えたように抗議の声をあげる薫。

僕からしてみれば、きぐるみに対しての単なるじゃれあい、ぐらいにしか考えてなかったが。

愚かな僕は、その光景が詩奈の目にどう映っているのか、気づけなかった。

すなわち、何の咎もない大人しめな女の子に、いきなり襲い掛かるうとしていたる図、である。

『吟也さん……そんなことする人嫌いです。女の人になったからって、それはセクハラですよ……?』

「うげっ」

「……?」

そして、その質の高い声のなせる業なのか、絶対零度にまで下がった詩奈の声でそう言われ。

詩奈から自分がどう見えているのか、その事実が遅まきながらも気づいた僕は。

カエルの潰れたような声を出して、固まるしかなかった。

それを、不思議そうに見上げてくる薫のつぶらで大きな瞳。

おかげで、すっかり罪悪感に押しつぶされてしまった僕は。

「……しゃーない。ここは言うこと聞いといたる」

…。  
結局のところ、まゆの思惑にまんまとはまってしまつたのだ…。

(第41話につづく)

#### 41、自業自得。最終的には得してるじゃん

それから……。

女の子になっちゃった僕は。

無難に……それでも悪戦苦闘、七転八倒しながら、

女子用の学院の制服（黒と紺のツープース仕立てのフレアスカ―

ト、

リボンがわりの一对のホワイトスノウ）に着替えると、

薫たちと別れ、再び太陽の下へと繰り出していた。

「……なあ、詩奈、しいなちゃん？ まだ怒っとんの？ だから

あれはほんの出来心……やなく、

誤解やってー」

自分はみゃんぴょうのきぐるみに興味があっただけです、何てこと  
と言えるはずもなく。

何だか詩奈はとてご立腹だった。

何せあの後、まゆがひょっこり戻ってきて、火に油を注がれてし  
まったせいもあるだろう。

『別に怒っているわけじゃないです。……わたしはただ、吟也さ  
んも男の人だったんだなーって』

それは変わらぬ氷点下のままの声。

「いや……まあ、ね。こんなになっても男の心意気だけは失っちゃあかんと思うわけよ僕は」

『……………』

売り言葉に買い言葉で、またも言い訳にもならないセリフを口にする僕。

それを聞いて黙り込んでしまう詩奈であったが。

その沈黙は、先程までの言い訳のできない行動に対してだけのものとは違うようだった。

それからすぐに、問いかけるように……詩奈は再び口を開く。

『今更なんですけど……わたし、吟也さんにすごく迷惑かけてますよね。』

吟也さんだって今、大変な状態なのに』

あの後……。

何とか着替えを済ませて、まゆに改めて詩奈の記憶を取り戻す方法、

そのような効果の期待できる魔法料理をお願いしようと思ったのだが。

一度魔法料理で何らかの効果を発生させてしまうと、

それが元に戻るまでたとえ他の料理を食しても、新たな効果を発

生させることができない、  
なんてまゆに言われてしまったのだ。

効果の持続時間は料理により違うようだが、今回の場合、  
とりあえず今日一日は効果が続くとのことなので、それでは別の  
手を考えよう」と、

こうして女の子の姿のまま、次の目的地に向かおうとしている  
わけなのだが。

申し訳なさそうな詩奈の言葉に、僕はそんなことないと励ますよ  
うに笑って見せた。

「はは、何を言うかと思えば。別に迷惑なんてかけられてへんよ。  
詩奈助けよ思ったのも、まゆの料理作りに付き合っとなのもおん  
なじや。」

全部僕自身がやりたいからやっとなねん。

……こういうのもある意味自業自得って言うのかもしれないなあ  
』……』

それが生きがいだからと、胸すら張って宣言してみせると。  
返ってきたのは沈黙だった。

まあ、簡単に理解して受け入れられるほど説得力のあるものかど  
うかは甚だ疑問で。

僕はそれを誤魔化すみたいに、更に言葉を続ける。

「ま、そんなわけで詩奈がいちゃや言うまでは、とことん付き合っ  
たるで」

』……ありがとうございます』



「……」

それは……やっと聞き取れるくらいの詩奈の声。

たった一言言われるか言われないかの差なのに、どうしてこうも違うのだろうと、

どうしてこんなにも、力をもらえるんだろうと、僕は思う。

それは、分かるうとしても分かることではないのかもしれないけれど……。

(第42話につづく)

#### 42、みつしゅん。心友のためなら高らかに

「ほな、改めてまとまったところで……そうやな、一旦寮に戻るか」  
『寮？ 初めに吟也さんがいた所ですか？』

そして……。

再び仕切り直しをするようにそう言つと。

その真意を問おうと詩奈が聞き返してくる。

「ああ、そうや。寮に戻れば知恵貸してくれるヤツもおるかもしれんし、

一コ帰つて確かめたいことあんねん。

それに……その、詩奈の会わなきゃあかん大切な人のことやつて、いろいろやつてるうちに思い出すかもしれへんしな。

今日休みやし……たいていのヤツは寮か街におるはずや」

『そうですか……。それで昨日より人が少ないんですね』

納得したように詩奈が呟く通り、確かに平日よりは人が少なかった。

……まあ、もともとこの広大な土地に今や百人ほどしか生徒がいないのだ。

無駄に閑散ともするだろう……なんて思っていた時だった。

『ぴんぼんぱんぱーん！ えー。ただ今からとってもおいしい特典つきの、

臨時特別試験が開始されまーす！ 参加者、関係者の方以外は、すみやかに自室、

校外への避難をお勧めしまっす！ ……というか、下手の校内に残っていると大怪我するよ。

悪いこたあ言わないから、席外しといたほうがいいって。

うん、でもって、参加者のみなさん、はりきってまいりましょーっ！

………ふう、こんなもんかな。ちゃんと言えたよえっちゃん………  
ブツッ』

「な、何やあ、今の………」

それは、異界のロケーションにはふさわしくないとと思うような、レトロな校内放送だった。

試験を開始するとかなんとか言っていたが。

そんなものがあるなど、僕は聞いていないし予定に入ってなかった。

しかも、参加者以外は避難しろなんて、今いる場所がまるで戦場になるような言い方だ。

『吟也さん、よく分かんないですけど、一旦避難したほうがいいんじゃないですか？』

「うーん、言葉通り受け取ればそんなんやろっけど………今の声、観弥子やな。

観弥子本人はともかくとしても、裏で糸引いとるヤツのこと考え  
っど、

たちの悪いイタズラつちゅーのも捨て切れんな。  
だいたい大怪我するから避難しろって、いい加減すぎるやる」

次から次へとタイミングよく起こる普通でないイベント。

僕はそれら全てに巻き込まれるんじゃないかって不安を覚えた。

いや、それはもう予知に近かったのかもしれない。

まるでさっきの放送の試験開始、そんな言葉が証明されるように……その場の空気が一変する。

『あつ………』

それは、その場にある空気が全て入れ替わり、世界そのものが変わってしまった感覚。

試験でもよく使われる、『異世』へと足を踏み入れた状態。

放送していくらもたたないうちにこれかよと、内心で舌を巻いていると。

僕の目前に、薄赤い……桜の花びらのようなものが、いくつも舞い降りてくるのが分かる。

いや、それは花びらではない。まるで血が沁みたかのような赤い雪、だった……。

(第43話につづく)

### 43、瞳の住人。金属性のたたかい

「桜の雪……。これはヒースの異世？ なして……？」

それは、僕にとってみれば初見ではない、見覚えのある世界だった。

その主はどこかとあたりをきよるきよる見回していると、そんな僕に感心したような声がかかる。

「……へえ？ そこまでヒースのこと知ってるってコトは、サスガにあの子がこんな舞台まで用意してるワケだね」

その異質を告げる雪にまかれるように、現れたのは。

僕よりも淡い、膝までありそうな長い長い桜色の髪をなびかせ、まるで人のものではないような……。どこまでも透き通ったアクアマリンの瞳の少女だった。

「ヒースっ？ いきなりマジモードで何やねん。もしかして……さっきの放送で言ってた、

試験に参加しとんのか？」

僕は少女……。ヒース・アイラスの言っていることにイマイチついていけなかったが。

彼女は半年足らずの学院生活の中で、比較的仲の良い友人の一人である。

だから、何が起きているのか、試験とは何なのか、それを訊こ

うとしたんだけど。

返ってきたのは、いつも楽天家でにこにこしているのが基本であるはずの彼女の、

凍るような……怒りすら感じさせる表情だった。

「あんまりその力オで、ヒースを刺激しないで。……できるだけキズつけたくはないから」

「お、おいつ、ちよい待てっ！ そんなズバリ指摘されてへこむことわざわざ言わんでも……」

じゃなく、傷つけへんとか言っときながらその手に一体化しとんのはなんやねんっちゅー話やっ！」

完全にビビりながら僕が指摘したその視線の先には。

腕を覆うように詰め込まれた、あるいは僕が言ったように、

一体化した……見た感じ人の身体なんぞたやすく貫き通せそうな鋼鉄製のドリルがあった。

「大丈夫。これがなんなのか分かる前に、ヒースがデリートしてあげるよ」

ブウン！

そして、僕の言葉が届かないのか、意識的に無視をしたのか。

それ以上有無を言わせないが如くそう言い捨てると、

いきなり赤い雪の粉塵を散らしてヒースは掻き消えた。

『っ！ 吟也さんっ！ 危ないっ、逃げてっ！』

その瞬間、詩奈の恐怖心のこもった声が僕の身体を駆け抜ける。それは、もしかしたら詩奈が昨日出会ったという、詩奈の存在を消そうとしている存在のことを思い出してしまったからなのかもしれない。

「……何や、【ショートカット】か？ 意味分からへんのやけど、マジで戦るつもりかよっ！」

一方の僕はまだ状況がよく把握できていないというのもあっただろうが。

そんな詩奈よりはまだ落ち着いていた。

その訳は、ヒースが僕と同じ『<sup>ウルック</sup>金』属性の魔法を主体とするタイプで、

彼女が何をしたのか知っていたのもあるだろう。

僕の言ったショートカットとは、簡単に言えばテレポート、というやつだ。

「今頃気づいても遅いよっ！」

『……っ……』



空気を擦り裂ける音とともに、一步近付けば触れそうな、目前に出現するヒース。

振り上げられた高速回転するドリルは、もう僕の頭上すぐ側まで迫っていて。

その瞬間、僕は何の前触れもなく瞳を閉じた。

そのせいで、詩奈の視界は闇に覆われてしまっただろう。

それは……今日詩奈が目覚めたら僕の中にいた時と同じ状況に違いない。

おかげで、余計に怖がらせてしまったかもしれないが。

そのフォローは、やがて開かれた視界の先に見えた光景で、示すことにしよう。

(第43話につづく)

#### 44、チエックメイト。 だけど追い詰められてる僕

「…………チエックメイト。物理攻撃は失敗やったな、ヒース。  
『僕がヒースを瞳に留めなければ、ヒースはそこに存在できない。』  
…………って、あんさん自身が僕に言った言葉や」

今僕は、ヒースの背後を取っている。  
その間単に折れてしまいそうな細く白い首に、短いスパナを、  
まるでナイフをつきつけるように添えていた。

「そ、そんなっ」  
『え…………？』

詩奈が何をしたのか分からず呆然とするように。  
ヒースもまさか自分がいきなり追い詰められるとは思っていなかつたのだろう。

その声色に焦りが見える。  
僕が言ったのは、ヒース・アイラスという少女の本質についてのことだ。

彼女は正確に言えば人ではなく、『金』属性の魔力そのものだった。  
今そこにいる彼女は、立体ホログラムのような、あるいは分身と  
いってもいいかもしれない。

本当の彼女は病で動けず、いつも寮で寝たきりの生活をしている。だが、それではここに着た意味がないということで、分身の彼女は実体を持ち、触れることもできる。

それを踏まえた上で僕が今したことは、分かりやすく言えば、誰かがヒースを『見る』という行為があつて初めてヒースは実体を持ち、存在することができる、  
というものを逆手に取ることだった。

その誰かが目を閉じれば、ヒースはその誰かにとって消えてなくなるように感じる、ということである。

それが、一体どんなからくりでできているのかはよく分から……  
ゲフンゲフン。

ややこしいので説明は避けるが。

僕は、その事をヒース本人から聞かされていたのもあり、その法則をうまく利用してヒースの攻撃を回避したわけなのだ。

まさかここまでうまくいくとは思っていなかったから僕も驚いてるけど。

「で？ いきなりこんなんやらかしたんやし、僕に分かるように説明してくれるんやろな？」

「……あなたに言うことなんて何も無いもん」

別にこれっぽっちも本気ではないが。

少し脅かすようにそう言ってギリギリで離れていたスパナを触れさせるよ。

肩をこわばらせ、何だかマジに受け取られていそうな、ちょっと泣きそうな声でそう答えるヒース。

それは、ヒース自身が同じように僕のスパナによる能力を知っているというのかもしれない。

僕の使う、スパナを媒体にした『金』属性の技の一つに、  
ヒース・リンリクション  
《断鎔》と言うものがある。

それは、生物だろうと無機物だろうと、分解してしまう技だ。

まあ、厳密に言えば僕の力ではなく、スパナの彼女自身の力なわけ、

僕はその声を聞き従ってるだけで、未だかつてそれを人に向けたことなどないのだが。

何だかその洒落になっていないような雰囲気、かえって焦ってしまう僕である。

これはさっきのテストなんたらではないのかと。

まるで実際に敵に捕まってしまったスパイのように、口を割ろうとしない意味がどこにあるのか。

そもそも自分が彼女を傷つけるわけがないだろうと、いろいろと考えてみるのだが。

突然と不可解の交じり合ったヒースの行動に。

僕は何もできずに固まるしかなかないのだった……。

（第45話につづく）

#### 45、開き直り。手のひらの破片もない

さてどうしようかと、このままじゃいけないと迷い考えていると。

それに助け舟を出すように、詩奈が口を開く。

『あの、吟也さん？ わたし思ったんですけど、

今吟也さんはいつもの吟也さんじゃないんですよね？

だからその子……えっと、ヒースさんですか？

吟也さんのこと違う人だと思ってるんじゃないでしょうか。……

なんとなく、ですけど』

「……」

そう言えばそうだったと、反応しようとしてとりあえず僕は言葉を止める。

言われてみれば、こっちは普通にいつもの調子でいたが、ヒースにとっては違うかもしれないのだ。

僕自身最初は性別が変わったくらいじゃあまり変わらへんやろと思っていたが。

実際鏡で見て……たとえばヒースなんかは、

別人だと思いつい込んで仕方がないだろうと思えなくもなかった。

まあ、だからと言っていきなり襲い掛かってくるのが理由にはならないだろうとも思いつけれども。

「あー。そんなこと言わずにやな、マジに状況分からへんねん。いきなり襲い掛かってきた理由くらい、教えてくれたってバチあたへんと思うんやけど」

「……」

そんなわけで改めて下手に出つつそうお願いしてはみるも、ヒースは口を開いてはくれなかった。

まさしく、死んでも何も言わないという感じの頑なさを前面に押し出しているヒースに、

仕方なく僕は、一計を案じることにする。

「しゃーないなあ、もう。こころなったら奥の手やっ、秘技！くすぐり地獄の刑っ！」

わざわざそう宣言すると、がら空きのわき腹めがけて言葉通りくすぐり攻撃を開始した。

「うやあっ？ や、やめてよ！」

「ほれほれ、大人しくはけや〜。笑い死にしようなかったらなー」

「きやはははははっ、ひ、ヒキョウだよっ！」

まさかそんな事をされるとは思ってもみなかったのか、笑いのツボを心得ている、

かどうかはともかく。すぐに驚いたように、過剰に反応するヒース。

『吟也さん……また、セクハラですか？』

「うるさい！ 僕はなんも悪くない！ なんも言わずに突っかかってきたヒースが悪いんやでーっ」

呆れたような詩奈の声が聴こえるが、敢えてそれにも耳を貸そうとしなかった。

頭と心にダイレクトに響いてくる、その力ある口調に慣れたこともあるけれど。

くすぐる時の表情は、そんな言葉とは裏腹に、緩んでいただろう。

自分で言うのもなんだけど。

説得力のカケラもないとはまさにこのことである。

だが。僕のくすぐり攻撃に耐えられそうになくなって、限界間近だったヒースに、

思わぬ助けが入った。

初めに感じたのは猛烈に上空から大地へと、突き抜けるような突風だ。

「……ちいつ」

「きやあっ!?!」

そして名残惜しさ半分、焦り半分でいきなり真面目顔に戻った僕は、

とっさにヒースを抱えるようにして今までいた場所から離脱した。



次に聴こえたのは、大地をえぐり落ちる、ミサイルのような爆撃音。

もうもうと立ち込める土煙の中、見たのは青い弾丸のような何か。

「【ブルーバード・スラッシュ】ッ！」

「マジかいなっ!?!」

そして休む暇もなく着弾地点からそんな頼もしげな少女の音が木霊し、

青い弾丸らしきものが猛スピードで僕に向かって飛んできた。

僕は慌ててそう叫ぶとヒースを放し背後に追いやってから、それを待ち構えるようにスパナを構える。

響くのは、何か硬いものと硬いものが軋れるような音。

爆ぜる炎と舞い散るのは……青色の羽、だった……。

#### 46、ブルーバード。運んでくるのはしあわせ？

「……つたく、次から次へと！ 今度はお前か、あいうえおっ！」  
「あいうえおじゃなーいっ！ 秋穂羽あいはねだーっ！」

ぶつかつたのは、青いメタリックなフィストのようだった。  
僕がそれをのけるようにして、スパナを突きつけるように叫ぶと。  
制服の上にスーパーマンが身につけるような、青色のマントを身に纏った青いショートボブの髪の少女は、やけに甲高い声でそう叫び返す。

「アオイ？ な、なんで……？」

「なんでって、それはこっちのセリフだヒース！ 抜け駆けするから吟也に酷い目に……って、あれ？ 君……吟也じゃ、ない？」

困惑するヒースに、答えかけようとして秋穂羽……通称アオイは、改めてまじまじとそのサファイアの瞳で僕を見据えた。

「な、なんやねん」

そして、まるで観察するように、つま先から頭のとっぺんまでなめまわすようなアオイの視線に、

僕はなんと答えたらいいか分からず、圧倒されるように一歩下がる。

「……ふん、なるほどね。君がテストのターゲットか。吟也本人かと思っただけで、  
なんて言うか……ご苦労なこつた」

そしてまたしても、一人で納得して、頷くアオイ。

「ごくろつって……勝手に決めつけんなや。つーか、さっきから  
一体何の話やっちゅーねん」

「あれ？ 知らないのか？ ほらこれ……この紙、今日の臨時テ  
ストのビラだ」

余計にご苦労様だと言わんばかりのアオイは、先程の剣幕はどこ  
へやら、

そう言っただけから取り出した言葉通りのビラを僕に手渡した。

そして……そこに書かれた内容を読むにつれ、僕はまたもや驚愕、  
絶句する羽目になる。

「……臨時特別試験、要項。他のライバルを退け、校内にいるタ  
ーゲットを探し出し、  
見事ノックダウン（KO）させたものに特典が与えられるビック  
チャンス。」

下の三つからお選びください。

1、ジャスポースの街食い倒れツアー（吟さんの自腹で）

- 2、ランプの精（吟さん）が三つのお願いを聞いてくれる。
- 3、吟さんの秘密写真をゲット！

なお、提供は太っ腹な吟さんと、これを呼んでくれてる目の前のアナタ でお送りしまーすっ。

……………やて？ な、な、な、なんじゃあこりゃーっ！」

クセのある、その人となりが垣間見えそうな丸っこい字で書かれた、いかにも手作りなビラ。

そこに書かれたことを何とはなしに口にして読んだ僕は、そのまま最期のアドリブがごとく、大声をあげてしまっ。

明らかに、いち個人の対し悪意のこもっていきそうな内容だった。

……………それを臨時試験などとして、許可した？ 学院もどうかと思うが。

それを見てアオイやヒースが滅茶苦茶本気で参加しているという事実には僕は思わず頭を抱えたくなる。

しかも特にヤバイと思うのは三つ目、だった。

人に許可も取らずに、勝手にこんな企画を立て、尚且つ参加している者たちの心情が知れないが、

何であれ、それをゲットされるのは流石にまずすぎる。なんとかしても阻止せねば。

幸いというか何と言うか、その秘密を握っている奴……………これを書

いた人物にはアテがある。

というか、写真の存在を知っている人物は一人しかいない。

いろいろと手遅れにならないうちに（もう遅いかもしれないが）、その諸悪の根源をとっ捕まえて、この性質の悪い企画そのものを中止させる必要があった。

「くっそー。あんにやるめー。何の恨みがあつてこんなこと……。いいか？ 二人とも。それはガセや。嘘っぱちや！ 僕をどつきまわしたかて、

そんな特典もらわれへんからな！ 本人が許可してへんねんから！

つーか、1や2ならあんさんら二人くらい吟也はんがなんとかしたる！

そんなわけやから、ちょっとこれの首謀者とっちめといたるからな！ んなわけでさいならやーっ」

一方的にまくし立てるようにそう宣言した後。

二人に何か突っ込みを入れられるよりも早く、僕はその場を駆け出し突っ込みが来る前に離脱する。

「そんなこと言つて逃げる気かっ！ って、早っ、もういないし」「……」

だから僕は、そのあまりの逃げ足の速さに呆然としているアオイと。

それとは別に、どこか複雑な表情で見送るヒースのことに、気づ

くじことはないのだった……。

(第47話に続く)

#### 47、エスケープ。身銭切ったほうがナンボかまし

『あんな約束して、よかつたんですか？』

そして。再び学食のある本校舎へと逆戻りし、その建物の中にあるいかにも現代風な名前の放送室へと向かう僕に、ふと、詩奈はそんな事を聞いてくる。

「ああ、そやな。あいつらとこんなアホみたいなことでもやりあうくらいなら身銭切ったほうがナンボかましやしな」

『でも、本当にあんなことで……吟也さんを襲ったんでしょうか？』

「あんなこと？ それはもしかなくても僕がけなされとるのかな？」

まあ、実際詩奈の言う通りやて僕も思っとるけど」

そう言われ、あからさまにへこんだ素振りです。そう言つと。

純粹で正直者っぽい詩奈は慌てて言葉を返す。

『あ、いえ。そう言う意味じゃなくって、ホントは別の理由あったんじゃないかって思ったんです。特に……ヒースさんは、ひよとしてわたしがいるからなんじゃないのかなって』

「つまり、ヒースは詩奈がおんに気づいてて、それで僕を襲っ

たつて、言いたいんか？」

『たぶん、ですけど……』

自信なさそうに、それでも、どこか確信めいた気概すら持つて詩奈は呟く。

僕は、それを否定するでもなく肯定することもできなかった。

「ま、どちらにしろ無益に戦わないこに越したことはあらへんしな。首謀者とつちめたる」

代わりに、そう言って笑った。

まるでそのことが最初から分かっていたと、少しでも詩奈を安心させるように。

「それもこれも、このありえへん企画考えたやつなら分かるかもしれんよ。

いや、むしろ……詩奈のこと、失った記憶も大切な人も分かるかもしらへん。よく考えてみたらな」 『そうなんですか……？』

自信たつぷりに僕が言うものだから、その理由を聞きたいって、強い感情が詩奈から伝わってくる。

「ああ、そや。あいつは未来を先読みする力、持つとる。下手したら何もかも知つとつてもおかしいな」

『未来を……読む力……』



詩奈は、そう言ったきり、何かを考え込むように黙り込んでしま  
う。  
襲われ記憶を失ってしまったときのことを思い出しているのか、  
何故か僕にも伝わる、彼女の恐怖と痛み。

(うーむ。だんだんお互いの壁がなくなっとなるっちゅーか……)

僕の身体に、詩奈の魂が馴染み始めているのだろうか。  
それがいいか悪いかどうかは分からないが、まあ詩奈ならいいか、  
なんてその時僕は楽観的に考えていて。

「よっしゃ、まだいてくれよ、とっちめちやる」

そんな事を考えている間にも、僕達は目的地の放送室へと到着し  
た……。

(第48話につづく)

#### 48、猫色の乙女。臆病風は氷砂糖にめろめろ

放送室は、学食とは向かい合った校舎の側の、入り口から入った二階にあった。

僕は迷うことなく、スライド白塗りのドアを一気に開け放つ。

するとそこには……観弥子がいた。

思えば数ヶ月足らずの学院生活で、彼女の印象もずいぶん変わった気がする。

一見すれば妖艶さすら感じ取れる容姿であるが、その内にあるものは脆く、

アンバランスな危うさを持ち合わせている。

僕の周りにはいる、比較的仲のいい女の子達の中では、ある意味一番の乙女、といってもいいかもしれない。

「わ、ホントに来たよっ……ど、どうしよう」

「そんな感じやと、いつものようにあんさんも巻き込まれたカタチのようやな、観弥子」

堂々たる見た目な割に臆病なところがギャップ萌え、なんて益体もないことを思いつつそう言つと。観弥子はあからさまにびくりと跳ね上がった。

「アタイのこと、知ってるんだ……？」  
「あっ……ヤバ」

そしてその意味が見知らぬ人間に知った風に呼ばれたからだ、ということに気づき、はっとなる。

どうも、自分の姿が見えないし、初めにあった身体の違和感にも慣れてしまったのか、

気づけば普通に接してしまっていた。

「いやさ、もうぶっちゃけてもかまわへんかな？ 僕やって、僕、吟也やって。」

まゆの魔法料理のせいでこんななってますけど……」

「……そうなの？ あ、言われてみれば似てるかもしれないわねえ」

それでも魔法料理体験者の観弥子ならこんな突拍子のないことでも話せば分かってくれるかもしれないと思い、そのまま観弥子に状況を説明してみると、少しだけ警戒を解いてくれたような気配を見せてくれる。

しめたと思い、僕は訊きたかったことを訊くことにする。

「でな、理解してもらったとここで訊きたいんやが、何なのこのピラ、臨時試験って。」

吟也さんこんなんーコも聞いてへんぞ？ どうせあれもこれもえっちゃんの仕業なんやろ」

「え、そうなの？ アタイ、了承済みだって、吟也が凄く張り切

つてるって聞いてたけど……」

すると、そう言ってきょんとする観弥子。

そんなん嘘に決まっつとるやるとも思っただが……そもそも観弥子はえっちゃん、

僕が予想する企画の黒幕である坂額恵美とは無二の親友らしく、恵美のことを何においても信頼しきっている所があるし、もとより純粋な性質なので、

言われたことをそのまま信じてしまったのだろう。

「……ま、それはいいや。最悪そう言うことにしといたる。

それより、その諸悪の根源のえっちゃんはどこや？ ちよーつと聞きたいことあんねんけど」

「えっちゃんの居場所？ えーつと、あ、こほん。

えっちゃんの居場所知りたくば、このアタイと勝負しなさい」

「……ナニその言わされとるマックスなセリフ。つて、ち、ちよつと！ マジなんかいつ？」

観弥子がそんな棒読みのセリフを口にしたところで、

いきなり右手をかかげ、戦闘体勢に入るものだからたまらない。

その右手に宿るのは、鋭利な風の刃ヴァーレスト潜みし翠緑の光。

その突然の、予想だにしない展開に、僕はただ慌てふためくしかなくて……。

(第49話にじゅうく)

#### 49、芸人魂。忘れられないツッコミ

「だいじょぶ、すぐ終わるって。アタイがここで終わらせてあげるんだからね、吟也のニセモノさん」

「だーかーらー、なんでそうなるんや！ し、しかも僕のハナシ分かってくれてたんちゃうんかい！」 「何言ってるのさ。そんな分かりやすい嘘。さすがにアタイでも分かるって。」

第一、吟也はそんなに可愛くないし、もっと生意気でえっちいよ？

「……………ぐっ」

えっちいのは否定するつもりはないが今何も関係ない気がしないでもないし、

これが嘘だって分かるのならそのアホな試験が嘘だってことも分かかって欲しいと思わずにはいられなかったが、まさか観弥子にそんな事言われると意外も意外で、思わず言葉に詰まってしまっ。

「凶星みたいだね。……………それじゃ、吟也を返してもらおうっ！」

「……………っ！」

そしてそう言うや否や、ますます跳ね上がる観弥子の魔力。

結局こうなるのかと、僕はそのまま圧されるようにして下がる。

『……………っ』

そこで、聞こえてくるのは恐れ含んだ詩奈の息遣い。

それにより、僕は観弥子が何をしたくて、思っているのかが分かったような気がした。

観弥子たちは、偶然か……そうでないのか。

僕が何者かに身体を乗っ取られていると思いついて入っているように見えるのだ。

いや、それは思い込みではないのかもしれない。

事実、詩奈は……こうして僕の中にいるのだから。

まあ、別に乗っ取られているわけでもないし、彼女にもそのつもりはないようだったけど。

「痛い思いをしないですむように、一瞬で決めたいっ！ ……」

【ラブラドライト・ウィロ】っ！

「やばっ」

観弥子がそう叫んだ瞬間、まるで時が止まったかのような……一時の静寂が起こる。

それから、急激に時が動きがしたかのように。

今まで僕が立っていた空間の空気が、ブツリと音を立てて切り離されるのが分かった。

その力の余波で、物凄い突風が湧き上がる。

『わ、わあっ』

聞こえるのは逃げようとしても逃げ場のない、詩奈の焦った声。それに引つ張られたのかなんなのか。

おかげさまで腰が抜けたようにへたりこむ体勢になっていた僕は、運良く直撃を免れ、そのへたった状態のまま風に流されて、そこにあつた長いすやら何やらにまみれて転がっていった。

きつと詩奈にとってみれば、目の前でめまぐるしく世界が回転していたことだろう。

「か、かわした？ な、なかなかやるじゃない」

「あ、ああアホウ！ かわした！ やないでっ、かわさな死んでまっわーっ！」

よろよろと立ち上がり、涙ちよちよぎれな勢いで叫ぶ僕。

こんなときでもツッコミを忘れないでいられる程度には。

僕にも芸人魂があつたのかとちょっと思ったりして……。



## 50、スパナ。好戦的な彼女とヘタレな僕

「……今度ははずさない、アタイが止めるんだから！」  
「止めるって！ 僕の息の根ってオチかいつ。チクショーっ、こ、こうなったらっ！」

再び右手を掲げる観弥子に、そう切り返してから、それを迎え撃つようにスパナを構える。

すると、聞こえてくるは詩奈とはまた違った、僕だけに聞こえるスパナの彼女の声。

思えば、彼女たちの『もの』の声を日々聞いていたおかげで、突然やってきた詩奈に対してもすぐに受け入れられたのだろうが。

ちなみに、無邪気でミリタリーマニアなスパナの彼女は、

『モトカ力があれば、風だろうがなんだろうがばらばらのぐずぐずでありますっ』

……なんて言っている。

観弥子とは面識があるはずなのだが、どうも僕しか見ていないのがいただけない。

まあ、そこまで想われるのは、決して悪い気分じゃなかったけれど。

「いくでーっ……秘技その2！ ナントカの百計、逃げるが勝ち  
いっ」

だから僕は、そんな事を宣言すると、そのままヒースたち  
に見せたような、

目にも止まらぬ速さ（のつもり）で放送室の出口のプラスチック  
造りの白い引き戸から、

飛び出そうとしたのだが。

僕はこの時、自分が思っている以上にギリギリに追い詰められて  
いるやばい状況だと、分かっていなかった。

「火に入る虫、逃げられるとお思いですか？」

それは……観弥子のもでも、僕や詩奈、『もの』の彼女たちの  
声でもない、新たな闖入者の声。

いつの間に潜んでいたのか、そこには肩膝をつき竹製の大きな箒  
を携えた、

深緑の髪を耳元で切り揃えた一人の少女がいた。

「……あずさっ？」

あと少しで正面衝突してしまいそうな所を踏ん張って堪える。

その少女……小柴見・あずさは、自らの名を呼ばれ……髪と同じ、  
エメラルドの輝き潜むその瞳をすうっと細め、流れるような動作  
で抜刀した。

シュインツ！

（居合い切りっ！）

理解するのと、光の軌跡だけを残して斜めにかち上げられた胴切りを受けたのはほぼ同時だった。

『……きゃあっ！？』

脳天にまで響くような……すさまじい衝撃で僕の身体が激しくぶれ、悲鳴を上げる詩奈。

一方、それが直撃した僕自身は、吐き出すような息を漏らして……それでもすぐに立ち上がった。

「だっ……はあっ、はあっ。せ、せやからっ、あんさんらちよっとは手加減しろっての！」

死ぬっ、ほんまに死んじゃうって！」

「私の一撃を受け止めておいて、それはないでしょう」

僕の悲痛な訴えに、あずさは再び箒に手を添えて、瞳を細めると、呆れたように感心したようにそう言った。

彼女も同じクラスで、それなりに親交のある人物である。

今のだって、竹箒に日本刀が仕込まれていると聞いて分かっていたからこそ、

とつさに構えたスパナで間髪を容れずそれを抑えられたのだ。

事実、スパナの螺子などを回す先端部分は、めっきが剥がれ、刃と刃の摩擦で高熱を帯びている。

ただ、受け止められたのは僕の腕と言うよりスパナの彼女の我慢強さゆえだろう。

特に前線に出ることの多い彼女は、たとえその身が壊れようとも泣き言を言わない。

逆に、使われなければ『もの』は死に絶えるだけだと脅される始末だった。

だからこそ、いざと言うときの判断は、僕に委ねられるわけだが……。

(第51話に続く)

51、次から次へと。気づけば僕も友達百人？

「ちょ、ちょっとあずさ、そんなもの振り回したら危ないって」  
「おまいもおんなじやーっ！ その物騒な爪、早うしまえやっ！  
……っか、よってたかってこんないたいけなもやしっ子いじめ  
て何が楽しいねんっ！」

まるで自覚がないような言い方をする観弥子に、半分金切り声で  
叫ぶ僕。

「そうですね。思った以上に手ごたえがあつて、なかなか楽しいですよ」

「あ、それはちょっとわかるかも」

「こ、こいつらはっ……」

だが、その涙ながらの訴えは届かなかつたらしく、本当に楽しそうな表情すら浮かべて、

そんなことをのたまう二人。

これは、あれだ。普段の授業や試験じゃなかなか思い切ったことができないから、

鬱憤が溜まっていた所があつたのだろう。

そういふ所は僕にもなくはないから分からなくはないが、  
そうは言ってもその矛先が自分に向けられたとあつてはそうも言

ってられなかった。

これで、入ってきた入り口は観弥子に塞がれ……後ろの出口はあずさに塞がれてしまったことになる。

そうになると、出口は……反対側の、窓しかない。

ここは二階だから、やってやれないことはないだろうが……。

しかし、そんな僕の考えを、またしてもここにいないはずだった声がぶち壊す。

「窓から逃げようか……思案中？」

「げ、ガヤさんっ！」

『……っ！』

いつの間にそこにいたのか、窓から逃げようと向けた視線の先に、ばっちり入り込んできたのは。

アンニュイな雰囲気振りまく、ナチュラルパーマがかかった黒髪、僅かな朱を含んだ黒い瞳の少女だった。

名前は我屋響<sup>がや・ひびき</sup>。

またもや僕とは同じクラスで……あずさと二人して大人びているという波長があつのか、

よく一緒にいるのを見かける。

固まる僕に、邪悪そうな笑みを浮かべながらしっかり戦闘体勢でいるその手には、

黒い撥のようなもの……黒千<sup>コクセン</sup>が握られている。

それは投擲して扱う武器の一種で、突き刺さると感電するという

たいそうおっかない武器であると、ご教授してもらっているくらいには……付き合いのある人物だった。

というか、僕にしてみれば学院の生徒……特に女の子は全員知り合い以上を目指しているのだが。

「そのいやそーなりアクション。本当にバカオンジみたいじゃない」

「ぼっ……な、なんちゅーあだ名つけよるかね！？ ほんまに泣いちゃうで僕っ」

とんでもないことを言うハスキーヴォイスに、大げさにおよよと泣き崩れてみせる。

さらに追い詰められたと言つものにもかかわらず、かえって余裕そうにも見せるのがコツだ。

だが、詩奈のほうはそれどころではなかったらしい。

我屋さんの姿を見たその瞬間。

今までとは全く違う、激しい混乱と驚きが伝わってきたからだ……。





## 52、ママン。過去と未来の交錯

『お母さんだ……』

「およよ……って、はああ!？」

無意識なのか、ぽつりと出た詩奈の爆弾のような言葉に。

泣きまね（本泣き？）をしていた僕は素っ頓狂な声をあげてしま  
う。

「ち、ちよつと？ お、おかあさんて……だ、誰が？」

『……あの人です。我屋響さん。会ったことはなかったんですけど、  
ど、

若い頃の写真は持ってたから……』

それを訝しそうにしている三人の目もあつて、それでも小声で僕  
がそう問いかけると。

詩奈はそんな風に詳しく説明してくれた。

だが、その声色には、何だか喜び以上に申し訳なさというか、複  
雑なものが含まれている。

何だか深く突っ込んで欲しくない話題なのかもしれないな、なん  
て思つて。

「それで？ 詩奈の会いたい大切な人って、ガヤさんのことなん

「？」

『いえ、違う……と思います。だって、お話したこともないですから。』

ずっと、憧れてはいましたけど……』

だから代わりに僕がそう聞くと、今度ははっきりそれは違う、という意志みたいなものが伝わってくる。

ひょっとして、当たりかとも思ったが、そううまくはいかないらしかった。

「あー、えーと？ ガヤさん？ ーコだけ聞いてもエエか？」

「何かしら。……冥土の土産なら、あずさのほづが聞いてくれるわよ？」

やっぱりというか……お前もかという感じに物騒なことを言っているガヤさんに、

僕はそれでも勇気を出して……言葉を続ける。

うまくいけば、詩奈のことが分かるかもなんて思ったからだ。

「ガヤさんて、子供いたりするん？」

「……え？」

「ひ、響って結婚してるの？ なんか落ち着いているとは思ってたけど……」

それは、ある意味無謀と言ってもいい思わずついて出てしまったものだったが。

効果が靦面だったらしく……知らなかったとそのまま鵜呑みにして固まるあずさに、

何か変に納得している観弥子がいた。

「ほう？ よく言ったバカオンジ似の小娘が。私が……それだけ年増に見える」と、

そんな高度な嫌味と受け取っていいんだよな？ それは？」

まるでその声だけで、張り倒されてしまいそうな……どす黒い圧力を持った響の声。

僕はもしかしなくても、地雷を踏んでしまったことを自覚する。

「虫の標本よりも……惨たらしく死ぬ」

「ひ、ひいつ!？」

瞬間、二本だったはずの黒千が、指の数ほどに増殖し、それらが全て僕に向かって飛んできたからたまらない。

情けない声をあげて倒れていた長テーブルに身を隠す僕。

黒千は、いとも容易くそれを貫き、またもや腰を抜かした僕のほんの数ミリで引つかかってぴたりと止まった。

またしても間一髪である。

ものすごい静電気のせいで、髪がぶわぶわ浮いていたけど。

『……ああ、やっぱりお母さんだ。聞かされた通りのひと』  
「ま、マジでっ!?!?」

今度は詩奈が落ち着いた様子でそんな事を言うので、僕は思わずそんな突っ込みを入れてしまうが。

「……本気よ。楽には死ねないと思いなさい」

それにより僕にとって最悪の会話が成立してしまった。  
そんな我屋さんに倣うように、ちゃっかり観弥子もあずさも戦闘  
体勢に入っでいて。

僕はいよいよ追い詰められてしまっで……。

(第53話につづく)

53、傾国の翼。それより恐ろしいのは……

「何かないか、何かっ？ マジで殺されてまうで僕っ！」

半ば以上に自業自得ではあるが、そんなこと分かり過ぎるほどに分かっている。

何とかその場から逃げ出さねばと制服を弄るが、いつもの自分の制服ではないから、

期待はできなかつたのだが……何故か誰かが入れてくれたのか、奇跡的にそれはあった。

「……あ、これはっ」

僕はアタッチメントの壁に貼り付けられるタイプのクリップを発見し、声をあげる。

僕と長い付き合いのある子じゃないから、そこにはまだ魂を読み取ることができなかつたが、

それでもはったりはきくだろう。

「ふははっ、これさえあれば……いくでえっ！ 覚悟しとけっ！  
ディア・ディージェスト  
《壊鋸》っ！」

人差し指に詰め込んだクリップを媒体とし、咆哮をあげて僕たちの前に出現したのは、

三メートル強はある鋼の竜だった。

その大きさに圧倒され、構えるもの引くもの……その隙を、見逃さない。

「喰らい尽くせ！」

僕は大仰にそう叫び、くんつと糸を操るように指をひくと、そのあざとを自らに向けて……

そのままばかり、と自らを飲み込ませる。

僕の突飛な行動に観弥子たちが我に返ったのはその時だったんだろっ。

逃げるなーとか、こうなったら後で吟也でうさはらしてやるとか、最後まで後味を残してくれる声を耳に残して。

僕はまるで地面に吸い込まれるように、竜ごと姿を消していった……。

そして、本日最大のピンチをうまく切り抜けたはいいのだが。

それでも僕は、全力で走りながら……逃げていた。

それは、ディア・ディージェスト《壊鋸》で放送室を抜け出し、その足で寮に戻ってすぐのことだ。

とりあえずどこかに遊びにでも行っているのかカインの姿はなく、

何だか入用になりそうだったからありったけの……僕の能力を発動するのに必要な『もの』たちを、あったバックに詰め込んで、部屋を出たまではよかったのだが。

そのまま寮の玄関から出たときに……それは起こった。

「あーっ！ いたーっ！」

まるで寮中に響きそうな……それでいて鈴鳴るようなかわいらしい声が向けられる。

僕はそれに何気に顔を上げ……。

「で、出たーっ！ ガタラデ・クリア 《傾異》っ！」

いきなり絶叫するようにそう叫ぶと、手に取った音学視聴機能つきのサングラスを掲げる。

僕の能力の触媒となる『もの』たちは、大抵が身近な工具文房具だが、彼女だけは特別だった。

その能力が僕にあっついていて頻繁にその力のお世話になっていると  
いうのもあるが、

すうからのプレゼントというのが大きい。

まだ日が浅く会話ができるほどではないが、その魂が確実に息づいていて。

彼女……『クリア』が光を放ち消えたかと思えば、僕の背中には虹色のプリズムを時く翼が生えてくる。

「まてまてーっ!」

って、そんな事考えてる暇ないんだっ!

その声の主が誰であるのかを確かめるのももどかしく。

僕は中空に飛び上がり……猛スピードでひたすらその場を離れることだけに集中するのだった……。

(第54話につづく)



## 54、カウントダウン。すかされる恐怖

『……ど、どうしたんですか？　そ、そんなに慌ててっ』  
「やばいんやって！　あいつはっ！　もし今まで会った子たちと同じ理由で追ってんねんやったら、間違いなく全殺しにされるっ！」  
『声を聞く限りでは、そんな風には思えませんけど……』

大げさじゃないですか、と言わんばかりの詩奈の言葉。  
僕はそんな詩奈の言葉にはっとなって身を震わせる。

背後から……再び先ほどの待ったをかけるかわいらしい声が、聞こえてくるではないか。  
しかも、じわじわと近付いてきている。  
ついには耐えられなくなって、冷や汗を垂らしながらおそるおそる振り返ると。

見下ろすその向こう、色とりどりの屋根を伝って……こっちに向かってくる、  
白く長い髪が太陽の光を受けて虹色に眩しい少女の姿がそこにあった。

『……っ』

その人物を目にしたのか、再び息をのむ詩奈。

その様子は少しおかしかった。

少なくとも僕と同じように恐怖に慄いている風ではないようだったけど。

だけどその時の僕は、それどころではなかった。

「ひいい、やっぱ来とる〜っ！ やばいやばいやーばーい〜っ。  
これ以上近付くと尋の射程範囲に入ってまうど！」

僕は限界を超えろとばかりに姿勢を極限まで低くして加速する。  
だが、それでも……確実にその声は近付いてくる。

もうそれは何だか、人智の及ぶ所にはないような、そんな恐怖すらあった。

そして……。

限界を超えて飛んでいた僕は……学院内を出て、  
ジャスポースの街に入ろうか入るまいか、というところでついに  
は力尽きる。

あからさまに失速して……静かに降り立った。

「ぜえっ、ぜえっ。し、しゃーないな。できればやりたくはない  
が、ここで迎え撃つしかないか」

これでもかかってくらい苦笑いして肩を落とし、新たに持ってきた長めのスパナを二本手に持ち、アタツチメントつきのクリップを三本指にくっつけ、ただじつと彼女がやってくるのを待つ。

まさにそれは、死のカウントダウンとも言える瞬間だったのだが。しかし……その少女、永輪尋はいつまで経ってもやってくることはなかった。

さつきまで聴こえていた声も今はぴたりとやんでいる。

「あれ？ 何でや？ もう駄目やと思ったのに……」

諦めた、というのは僕の知る彼女の性格では考えられなかった。

だとすると、他に優先すべき何かがあったのか。

あるいはこの試験とやらに校外には出てはならないなどというルールがあるのか、  
くらいしか思い浮かばない。

子供っぽいけど、そう言った決まりごとには律儀な彼女ならば。

それを守っていてもおかしくはなかった。

だけど。その考えを詩奈は、自信なさそうに否定する。

『あの、たぶんなんですけど、追いかける必要がなくなったから追いかけないんじゃないでしょうか。わたしが校内の校舎に入ろうとしたら襲われたわけですから』

「ふむ、なるほど。そうとも取れるわけや。まあ、どちらにしろ僕らも中に入らな困るわけやしな。……そう言えば、何だかんだドタバタしてきたが、何か思い出したか？」

今までの流れから、詩奈の探し人は校内にいるのだろうと考えていた。

今の詩奈の言葉の通りで、詩奈の件と今回の無茶な試験に仮に関連性があるのだとしたら、

そうあるべきではないのかと。

『……はい。あの、さっきの追いかけてきた人を見て、ちょっと思い出しました』

「って、こんなんでも思い出したら労はな、ってえええっ!？」

何となく軽い気持ちで訊いたから、思い出したと言われて素直に驚いてしまった。

「思い出したって、その……探し人のことかいな？」

『はい。全部ってわけじゃないんですけど……わたしの会いたい人は、

彼女みたいな髪の人だったと思います』

「……尋みたいな、つまり白っぽい髪っちゅーことが。うーん、尋以外でそんな人おっただけなー」

神の使いだとか幸運の象徴だとか言われているアルビノ。

動物でいうならば白蛇やホワイトタイガーなどが有名だが、彼女

のそれは遺伝らしい。

尋曰く、人に現れるのは本当に稀で。

僕はもちろん、尋自身も同じアルビノの人は家族以外で会ったことはないと言っていた。

それだけ希少なだから、他にいればすぐにわかるはずなのだ。

おそらく、詩奈の探し人がアルビノであるということではないのだろう。

だとすると、考えられるのは……。

僕はそんな風にいるいろと考えをめぐらせ、悩みこんで。

そして……一つのあてに辿り着いた。

「……そうやな。もしかしたら、詩奈の探している人、見つかるかもしれないよ」

『ホントですか!』

「ああ、僕のカンが当たっていればやけどね。……うん、そうすつとやっぱり校舎戻らなあかな」

逃げているばかりじゃ始まらない。

今度はこっちから責める番だと。

そんな強い気持ち含まれる言葉とともに、僕はそう、決心したのだった……。

（第55話にじゅうく）

55、ダントツ？1。背中を向けて逃げること。

そして。

僕は校内を囲む外壁に潜むように寄りかかると、おもむろに携帯のディスプレイを開き、目前に持っていた。

『……何かするんですか？』

「ああ、こういうんはな。何よりも情報が大事なんや。相手が不確定で多数なのは確実やしな。

いくで、ちつと見とけや。………  
《魂見》ヤマ・ガイアットっ！」

気合い入れそう叫び、携帯に自らの魔力を送り込むと、やがて携帯は自ら浮かび上がり、さらにそのディスプレイが浮き上がるように大きくなる。

そのままそのディスプレイを見ると、息を吹き返したかのように入りに電源が入り、

青色のフィルムのようなところに、点滅する色のついたいくつかの星のような光が出現した。

それは自分が言うのもなんだけど、なかなか綺麗な光景で。それに注視しているだろう詩奈に向かって、僕は簡単に解説する。

「この白い点滅してるんが僕らや。んでもって赤い、大きかった

り小さかったり、

アホみたいなスピードで旋回してたりすんのが今なかにいるモン……つまり敵や。

で、この水色のが……最終目的地、やな」

それは昨日……詩奈が入ろうとして襲われたという、学院の最深部だ。

そこには女子寮と教員宿舎、学院長室などがあると僕は付け足す。

『すごいです、吟也さん。これなら……うまくいくんじゃないですか？』

「そうやな。ま、どんと僕にまかしとき」

それは敢えての自信満々のセリフだったが。

内心では、目標に達する厳しさを痛感していた。

一応目立たないように、普通の入り口とも最終目的地とも離れたところの壁を乗り越え、

入り込んだまではいいのだが……。

「うおっ、やっぱりちゅーか、なんつーか、一斉にこっちに向かっとなるやないけー！」

数で言えば三十はくだらないだろうか。

それぞれのスピードは違えど、確実に迫ってくる赤の点。

その光景に、思わず息をのんだが。

「とりあえずヤバイ（デカイ）やつを中心に、避けていくんでよ



るしく！」

僕は空に逃げるための翼を生やし、地下へ逃げるためのクリップを装着し、

赤い点から少しでも離れるようにやる気満々で駆け出していく。

あらゆる逃げのためのテクニク、

そして『金』属性による能力と情報を駆使した、スティックにそれだけを追い求めた逃げの一手。

自分で言うのもなんだけど。僕は、『逃げ』の名がつくものなら、ここでダントツナンバーワンの自信があった。

それが果たして褒められるものなのかどうなのか、自分自身でもよく分かっていなかったが。

とにかくそんな感じでのらりくらり追っ手をかわし、時には隠れてやり過ぎして、

着実に目的地への距離を縮めていく。

それは、どうやら赤の点滅同士が皆味方と言う訳でもないらしい、向こう側の隙をついたのもあっただろうが。

ねじれた紐を元に戻そうとして、終わり近付けば近づくほど固くきつくほどきにくくなるように。

その歩みは、目的地に近付けば近づくほどに確実に遅くなっていた。

そして……。

そんな僕たちの前に、決定的なピンチが訪れたのは、それからすぐのことだった。

(第56話につづく)

## 56、スタメン二人。メインと呼びなさい

「……まずいな。危険覚悟で前に出るべきか。勇気を持って後ろを迎え撃つべきか」

目の前には、入り口から中央広場、本校舎入り口へと続く大通りがある。

不用心に飛び出せば、何人もの人に見つかってしまう可能性がある。った。

だが、後ろの狭い建物と建物間の小道、そこを引き返すのはもっと危険かもしれない。

何せ、そこには画面の中でも一際大きい赤の点滅が迫っているからだ。

しかも二つ。

その二つの点滅は、まるで僕が追い詰められていることが分かっているかのようじ、

余裕を持って歩を進めていた。

『……どうするんですか？』

「そうやな……ここは」

僕はしばらく黙考した後、きつ、とそちらに視線を向けて答えた。

「あえてデカイ火の中に突っ込む……後ろに戻るで」

『え？ どうしてです？』

「前はな、一見行けるやろって思うねん。そこがくさい気がするんや。」

相手が時間経つに連れて統制取れてきて……獲物を追い詰める術を知つとるなら、

こつちがそう思うのを見越しとる確率が高いな。だからここは敢えて、

普通は行かんやろって方に行くんや。相手もそのぶんだけ油断しとるやろつし」

詩奈にしてみれば、とんでもないというか迷惑な話だろうが。

そう語っている僕自身は今、心の底からわくわくしていた。

その言葉ひとつひとつに、自分がやりたいからやっているという意思が滲み出てしまう。

『ふふ。頑張ってください、吟也さん』

それが、詩奈にも分かったんだろう。彼女も少し、笑みすら浮かべてそういつてくれたから。

「ああ、まかしとき。……よし、一旦電源切んで」

そんな詩奈の言葉に答えてすぐ、僕は自らの能力を解放し始める。そこで取り出したのは、数十本のとても長い釘。

釘というか、本当は特定の仕事に使う、鉾なんだけど、とにかくそれはぶつといやつで。

『大きな釘ですなえ、五寸釘ですか？』

「さあて、どうやるなあ？」僕は詩奈の問いに、敢えての意味深長発言をする。

もし詩奈が長釘の姉妹の声を聞けたのなら、その発言の意味も分かっただろうけど。

「いくでっ！ 《型代》<sup>ネイル・ドーンズ</sup>っ！」

そして、その問いに答えるより早く、僕は次の一手を打った。

狭い辻道にそんな僕の声が木霊し、釘はそのとたんもこもここと盛り上がって……。

それから、二つの赤い点滅、それに該当する人物がやって来たのは、すぐのことだった。

一人は、さつき追われていたばかりの尋。

もう一人は尋のルームメイトにして学院の成績常にトップ3圏内を誇る、更級さんちの雪菜さんだ。

「……よお、お二人さん。ごくろうさまやな。」

尋はともかく、雪菜はんがこないなおバカイベントに参加してるなんて思ってもみなかったけど

「うー。なんかその言い方、わたしバカにされてるみたい」

「そう言う意味じゃあれへんって。尋はこういうおもしろ企画大好きやろ？」

「ま、そうだけどさー」

僕が喋るたびに、尋は喋っている僕のほうを向き直り喋る。

一方の雪菜は、全く動じていない様子の尋に呆気に取られていたようだった。

目の前にズラリと並ぶ、十人の僕を。

そのアメジストに煌く鋭い瞳で見つめながら……。

(第57話につづく)

## 57、化学反応。意味も分からぬまま追いかける

「随分と余裕ですこと。贗者の紅恩寺さん。  
数が増えたところで私たち二人に敵うとでもお思いになって？」

雪菜は、董色の髪をふあさつと靡かせ、自信たつぷり上から言葉を投げかける。

確かに、十人の僕、と言ったはいいものの。  
そのつくりはどれもつたないものだった。

子供のような大きさのものや、大食漢な僕、普通よりも見眼がいもの、極端に細いもの。

そして、何故か赤くほのかな光を放ち続ける少女の姿をした僕。

尋や雪菜にしてみれば、その時点で増えた意味はない、  
勝敗は決まったようなものだと思ったに違いない。

まだまだ甘いなあ。なんて内心で僕はほくそえんで。

「そんなん、やってみなくちゃわからへんでーっ！」  
僕は、変わらぬ余裕ぶりでそう言い放つ。  
挑発めいた、癪に障るだろっ言い方で。

「……尋さん。ターゲット以外は作り物です。全力で潰しましよ  
う」

「りょーかーいっ！」

雪菜はしゃりんとつばを鳴らし、『漆黑・十六夜』と呼ばれる愛用の刀を。

尋は薄皮の、指の出たグローブで両手をあわせ、戦闘体勢に入る。

十人の大きささまざまな、よく見るとメタリックなものも混じっている僕は、

それを見ても余裕綽々の表情のままだった。

揃いも揃ってそんな顔をすれば、相手を余計に煽るだろうことを承知の上で。

この時の、彼女たちの大きな誤算は。

目の前にいる人物が、僕を乗っ取り操っている何者かだと……思い込んでいた所だろう。

「いっくよーっ！ 【ウィルオ・スマッシュ】！」

「…… 【剣小夜曲・残響】っ！」

尋は両手両足に光を集め、まるでその髪が天使の羽衣であるかのようにふわりと舞い上がった。

そして、その身軽さとは裏腹に、残像を残して繰り出される両手足での一撃は、まさに乾坤の一撃。

たとえるなら紙のように、出来損ないの僕らを吹き散らし、叩き



潰し、天へとかち上げる。

一方、そんな尋に並ぶように放った雪菜の一撃は……どこまでも静かだった。

中段に構えた刀が陽炎のように揺らめいたかと思うと、まるで花咲いたように光が剣筋となって散り、その一撃に触れたものは、そのまま操りの糸が切れてしまったかのようにバタリと倒れる。

そんな二人の一撃、一閃で、倒れ伏したのは八体。倒れた僕だったのものは……その力を失ったように、大きな鉛のようなものの塊と化してその場に転がる。

残ったのは、もやしのようにひよる長い男の僕と。少女の姿を成し、今も赤く淡い光を放つ僕のみだ。

「やばっ、た、退散ーっ!!」  
「……」

少女の姿をした僕は、あからさまにうろたえて見せ。もやしの僕は何も語らず、それぞれ逆方向に逃げ出していく。

「二手に別れて追います！ 尋さんはあちらをっ！」  
「うん、わかった！ 逃がさないぞ吟也さーんっ」

当然それを見逃すはずのない二人。

雪菜は少女の姿をした方を。

尋は、念のためなのだろう。

もやしのようにひよろ長い僕を追いかけてゆく……。

（第58話につづく）

## 58、ドッキリ。そうして締めるは口の首

共闘でもしているのか。

どちらかがターゲットを倒し、捕えたら特典山分けの約束でもしているのか。

尋の動きには無駄がなかった。

たいして時間をかけず、ひよろひよろの僕を追い詰める。

それは、建物によって先の塞がれた、死角の辻。

長い屋根のおかげでさほど陽も当たらない場所だった。

「あんまり弱いものいじめはしたくないからね。……すぐ楽にし

てあげるよ」

「……」

無邪気にも言われた相手にとっては残酷なその言葉を受け、ひよろひよろの僕は無言のままロングスパナを構える。

その腕は僅かに震えていて、その虚ろな瞳の中には……まるで生きていくかのように、

恐怖、不安、緊張……そして悲しみといったさまざまな感情が浮かんでいただろう。

作り物だと雪菜は言っていたが。

それを見ている尋にしてみれば、何だか自分が本当に弱いものい

じめをしている気になったかもしれない。

戸惑う尋に、震えていたひよる長い僕は。

馬鹿にするなど言わんばかりにスパナを振り上げて突っ込んでゆく。

「……っ」

それは、尋が思っていたよりも、二歩、いや三歩ばかり早く鋭かったらしい。

危機感を覚えただろう尋は、身体に染み付いている、流れるような自然な動きで上体を逸らし、その一撃をかわすと。

しなやかなバネのごとき反動のおもむくまま、返す拳で思い切り

……僕の額を打ち抜く。

とっさに出たカウンター、あるいはジョルトだろうか。

みしりと、まるで人の頭蓋に拳を叩きこんだかのようなリアルな感触に思わず顔をしかめる尋を前に。

ひよる長い僕は、まるで作り物とは思えない生身の肉体が刎ね飛ばされる感じで地面を滑って転がった。

そのまま、ピクリとも動かない。

「……」

尋はしばらく様子を見ていたようだったが。  
転がった僕は、最初に倒した者達のように金属化することもなく、  
その場にいやな静寂をもたらしている。

「あ、あれ？ な、なに？ もしかして……ほんものだったって  
オチじゃ、ない……よね？」

そう言う尋の声色は強張っていた。

悪夢のようにちらつく最悪の想像を、できるだけしないように努  
めながら、

動かないそれに近付いていくのが手に取るように分かる。

尋は、呼びかけながらうつ伏せになっていた僕を起こし、はっと  
息をのむ。

その額には……明らかに思い切り殴られた人体が起こす鬱血が起  
こっていたのだ。

「えっ、そ、そんな……なんで？ どういうこと？」

もう、狼狽……なんてレベルじゃなかった。

もともと雪のように白い尋の肌が、さらに色を失っていく。

……と。

「……っ……………」

起こされたことで意識が戻ったのか。

もはや虫の息のひよろ長い僕は、微かに瞳を開けた。

そしてそこに尋が確認すると、何かを伝えようと、声にならない唇を上下させている。

まるで、最期に何かを伝えようともしているかのようだ。

「……なに？　なんて言ってるの？」

尋はそれを聞き届けようと、もっと顔を近づける。

するど。

ひよろ長い僕はほんの僅かだけ笑みを浮かべて……………言った。

オマエモ、ミチヅレダ！

「……………え？」

尋は一瞬、何を言っているのか理解できない、という顔をしている。

改めて聞き返そうと再び顔を向けると。

そこにはドロドロに溶け出す、元僕だったものが横たわっていて。

鉛色したそれは。意志を持つように波打って。

「きゃあああっ!?!」

驚愕の表情に染められた尋を、為す術もなく飲み込んでゆく……。

(第59話につづく)

59、天井。全てが跳ね返ってくるのに

そして一方では。

雪菜は、尋と同じように少女の姿をした僕を……それ以上先のない屋根の上に追い詰めていた。

「追い詰めました。これ以上の抵抗はしないことをお勧めします」  
「あはは。まいったな、もう。……僕もこれまでみたいやね」

僕は雪菜の有無を言わせないような高圧的な物言いに、苦笑して両手を上げる。

いわゆる、降参のポーズだ。

「それで、どうするんや？ 抵抗せんでも消すんは間違いないんやろ？」

「それも……貴女次第です。貴女はどうしてこの世界に来たのですか？

何故……吟也さんに取り憑いたのです？」

あっけらかんと他人事のように、言葉をぶつけてくる僕に、雪菜はそんなことを聞いてきた。

雪菜が、お遊びの試験ではなく、詩奈が目的だと分かったのはその瞬間で。



「そんなん何故って言われたって分からへんよ。

気付いたらここにいて、気付いたら……こうなってたんやもん。  
そっちこそどうなん？」

何でこないなことすんねや？ どうせ最期なんやから……教えてくれてもええと思うんやけど」

「それは……」

何のためにやっているのか……雪菜はそう訊かれて、すぐに答えることができないようだった。

それはきつと、彼女自身が詩奈を襲ったその人ではないからなのだろうけど。

「それは……貴女が、この世界に存在してはならないものだからです」

代わりに出たその言葉のなんて軽いことか。

言った雪菜本人ですらその意味を図りかねている、そんな言葉で。

「ふーん？ そんなんや。お偉いことで。……それじゃ好きにしてええよ。もう抵抗せんしな」

それでも……僕はそれで納得しておくよと言わんばかりに、上げていた両手を広げ、

雪菜を受け容れるように手を伸ばす。

「ほんなら、ばっさりやってくれや」

そして、そのまま一歩一歩雪菜に近付いていく。

「……っ」

だが、雪菜はそう言われても刀を構えることも動くこともできないようだった。

きつと、本気で切るつもりなど毛頭なかったんだろう。

目の前にいるのは元々は僕の身体だし、気絶……あるいは行動不能にさせて連れて行けば、  
なんて思っていたのかもしれない。

なのに、雪菜は無抵抗に立ちはだかれて、そんな行動すら起こせないみたいだった。  
僕はともかくとして、中にいる存在は消え去ることに変わりはない。  
い。

きつと……その本人に殺す理由を問われて、その答えが雪菜の中になかったんだろう。

「何してんねや？ ほら、もうすぐそこやで。一突きすれば終い

や

「……っ！」

さらに、そう考えているうちに、少女の僕は雪菜の懐に入ってしまっ

そのまま抱きしめられるような体勢になり、雪菜は声にならない声をあげて。

硬直しうつろたえる、その瞬間。

僕が笑みのまま手を伸ばしたのは……雪菜が右手に持つ『漆黑・十六夜』。

奪われる！と思ったらしい雪菜は、一瞬身体をこわばらせたが、逆にその手を柔らかく包み込まれ、さらに狼狽していて。

「できないのなら……ジブンでしたるわ」

終いにはそう、言われ。

ぐっと腕を引っ張られて。

ずぶり、と刀が僕を貫いても……雪菜は動けなかった。

「どっ、して……？」

やっと動いたのは、口。そんな疑問の言葉。

「どうしてだっ？」

かすれるような雪菜の言葉を……刀を生やしたままなのにもかかわらず、朗らかに反芻する。

それから僕は……それに答える、決定的な一言を、口にした。

「あんさんの、足止めに決まっとるやん」

「……」

雪菜は言われた言葉の意味が理解できなかったんだろう。

そんな中、急にズンと刀が重くなって、よくよく視線を向ければ。

そこには今まで僕だったドロドロな鉛の塊がアメーバのように張り付いているではないか！

「……っ！」

そして再び。

雪菜の声にならない叫びがその場に木霊して……。

(第60話につづく)

60、答え合わせ。もう取り返してつきませんよ

『吟也さん……悪趣味ですよ』

「ふははは。褒め言葉と受け取っておこう、優しさだけじゃ癒せない痛みもあるってな」

尋と雪菜が二人して、ドッキリまがいの足止めをくらっていたその頃。

本物の僕と詩奈は、さっさと目的地に向けて歩みを進めていた。

その手には、二画面に分かれた、どこか違う場所の映像が映し出されている。

そこには、悲鳴を上げて鉛をもちかぶりの尋と。

言葉を失って立ち尽くす、または鉛まみれの雪菜の姿がある。

確かにシユミがよろしくないかもしれないが。

どろどろのあれは、無害なものだし、ここまでしなければ二人を突破できなかつただろう、

と言う点も加味してもらいたいね、なんて思ったり。

「だがっ、ぐへっ……んにゃろう、思い切りぶんなぐりよって。

尋のやつ」

お腹の辺りを押さえながら、思わずついて出るのはそんな泣き言。そもそもどうやって僕はあの場を突破したのか……真相はこうだ。

自分の身体が、比喻でもなんでもなく赤く光っていること。

ターゲットとしてマーキングされていたことにはつきりと気付いたのは、

実は一旦自室に緊急避難したときだった。

自室に戻って調べたかったもう一つのこととはすなわちそのことで。

今回はそれをままと利用したのが突破できた理由の一つでもある。

それから、僕は……長釘の姉妹の力を借りて、自らの身代わりを作り出す《ネイル・ドーンズ型代》の能力を発動したのだが。

僕はその内の一体に赤く輝く身体すらも再現させ、  
僕自身はそれ以外の一体……大食漢な僕の中に包まれるようにして隠れていたのだ。

やられるフリをしてホントにやられてしまったらどうしようという不安もあったが。

あれでも言うほど本気ではなかったのだろう。

……特に尋は、本当の得物であるばかりでかい斧を持っていなかったし。

まあようは何が言いたいのかというところ。

大分芯まで響くパンチがしんどかったが、こうして全ての身代わりたちに取り付けておいた視界型カメラで、おめおめと逃走をしながら一部始終を見ていたわけである。

だけど……。

『大丈夫ですか？ 騙したただなんて分かったら……後で酷い目にあつかもですよ？』

少なくともわたしなら滅殺ものです。乙女心は傷つきやすいんですからね』

「う。そんなん頭になかった……」

ひょっとしたら自分はとっても愚かなことをしてしまったのかも  
しれない。

だが、それに気づくにはちょっと遅すぎたんだろう。

結局、僕自身もそれほど余裕がなかったということだ。

そう呟いても、後の祭りであるのには、言うまでもないのだった  
……。

（第61話にじゅうく）



6 1、莫迦なひと。かつこよく表現したいとき（前書き）

なんだかんだで、十万字越えましたね……。

61、莫迦なひと。かつこよく表現したいとき

それから。

気を休める暇もなく、僕たちは進み。

最終目的地である区画へ行くためには必ず通らなければならない、建物を区切る門扉のあるところまで来ていた。

そこは、詩奈が襲撃を受けた場所であり、

僕自身が相手ならば必ず何かを仕掛けるだろうと考える場所でもある。

そして案の定。

僕にとって避けがたいしかけは……そこにいた。

「ふ、ふえーん。そ、そのきれいなお姉さん。罨にかかっちゃって、い、いたいですう。

助けてくださいーっ」

動物が何かを捕らえるぎざぎざしたいかにも典型的な罨……トラバサミに挟まれ、

泣きながら座り込んでいる少女。

それは、隣のクラスの安中榛名尹沙あんなかはるな・ゆさだった。

元々カールして、綺麗に纏められている灰色の髪も、  
抜け出そうとして暴れたせいなのか乱れており、同じ色の瞳は涙  
で溢れている。

その罨は血がにじみ出るほどに尹沙の足に食い込んでしまっ  
ており、確かに痛そうだった。

「待つてるやはるなゆ。今助けたるでっ」

僕は尹沙に向かって、有無を言わず駆け寄っていく。

『吟也さんっ、ちょっと待って！ どう見ても罨じゃないですか  
っ？』

それを見た詩奈の、当然すぎるお言葉。

僕はそれに答えるよりも早く、さっと取り出しのはスパナと先ほ  
ども使った長い釘。

そして、そのまましゃがみ込むと、器用に罨のねじの間に滑り込  
ませ、外しにかかった。

「もうちつと我慢してくれな。すぐに外したるから」

僕は罨に視線を落とすままで、そう呟く。

だから……その時僕を見下すように愉悦の笑みを浮かべる尹沙が  
いたなんて、

気付きようもなかったんだけど。

「心配しなくてもいいわ。これはダミーだから」

尹沙のそんなセリフとともに、僕の背後から弧を描いて地面からせり出してきたのは。

極限まで薄く伸ばされた鋭い刃が、一連に連なったもの。

それは、完璧に避けられない、まさにそんなタイミングであったが。

「いや……うん。そんなことは百も承知やで」

ぼつりと言ったその言葉は、詩奈と尹沙の両方のセリフに答えたものだった。

ガガキインッ！

故に、背後を振り向くよりも早く。

僕の背中から生えた虹色の翼がごとごとくその刃をはじき返す。

「くっ！」

初太刀の一手を潰されたと悟ったらしい尹沙は。

先程までの演技はどこへやら、ろくに怪我一つしていない足で地を蹴って、改めて僕との間をとった。

「さすがね！　ここまでくるだけあるじゃん！」

「残念ながらな。あんさんが暗器使いなのは知ってたからな。」

……このくらいはできてしかるべきや思うねん」

『それじゃ、畏だと分かってて、どうして近付いたんです?』

得意そうにそう言う僕に、詩奈がそんな疑問を投げかけるのは当然のことだっただろう。

「ならどうしてわざわざ引かなかったフリなんてしたのよう?」

同じような尹沙の言葉も含めて、僕は得意げに答えてやった。

「……そこに泣いとる女の子がおったなら、その涙ぬぐうてやるんが男つてもんやろ。」

たといそれが演技でも嘘でもな」

それは端から見ればとても愚かなことのようにも思えるかもしれない。

だけど、僕はどこまでも本気だった。

だってそれは、このジャスポースに来て、より大きく強固なものとなった、僕の信念だったから。

「なるほど、イロイロと危険な相手みたいね。尹沙の命を脅かしかねない存在だよ。」

……これは、本気でいなくなっちゃ」

「搦め手主体なんが真つ向勝負しとる時点で先は見えとる気いすんねんけどな」

身体のうちここに仕込まれた暗器を、わずかに軋ませながら。

オペをする医師のように、様々な武器を指と指の間に挟ませ、尹沙は凄みのある笑みを浮かべる。

対する僕は真似するように八本の長釘を両手のひらの指の間に挟みこみ、

爪を装着したかのように構えて見せた。

今日あれだけのドンパチがあって……初めて見せる、僕の構えを。

(第62話につづく)

62、まいっちんぐ。仕込みは上々であります

「あら？ 呪術用の五寸釘ってやつ？ 尹沙も持ってるわよ。大丈夫かしらそんなもので」

僕の構えに対して。

返ってきたのは、案の定の、詩奈と同じ言葉。

「アホウ。けつたいなモンに使わずなや。この釘はもともと建築境界用やつちゅーねん」

それは……一戦交える前の、他愛もないやり取り。

それが終わるや否や、既に僕らは互いの得物を駆使して激突していた。

右手中指と人差し指から繰り出される手裏剣、左袖から投射される吹き矢。

肩越しから覆いかぶさるように襲い掛かるように迫ってくる湾曲する刀。

左足つま先に仕込まれたナイフ、右足から蹴り出されるかんしゃく玉。

僕はそれを、手に持つ八本の釘を駆使し、

オーケストラを指揮するコンダクターのように受け流しはじき返す。

そして返す動きで肉薄すると、両脇から包み込むように釘を添えた両手をえぐるように伸ばした。

「……甘いよっ!」

だが、尹沙は僕の持つ得物の判定距離まで把握しているのか、無駄のない最小限な動きでそれを全てかわしきる。

それから左手小指に巻きつけるように回転させて苦無を振り上げる尹沙。

そして向けるは必殺の笑み。

なるほど、悪くない。

それが崩れると思うと余計に、なんてヒドイことを思いつつ。

それを受けた僕はおんなじ笑みをそのまま返した。

「甘いんやない、わざと当てへんかったんや」

さらにそっぴい捨てるど、迫る苦無をものともせず、もう一步深く踏み込んだ。

「……リンリョーション」  
「《断谿・八手》!」

「……っ!」



金属と金属がぶつかり合う音と、僕の肩口を切り裂く苦無の音。

……吹き出る鮮血。

一見、尹沙には何も影響がないように見えたが。

しかし……その時点で既に、勝負はついていた。

「え？ えええ？ な、なんでっ……」

驚き狼狽する尹沙を尻目に、ばらばらと、まるでパズルのピースが零れ落ちるかのよう。

仕込んでいた装備がはがれていくのが分かる。

「どうして？ 釘の効果範囲から離れたはずっ……」

「だから……言ったやろ。この釘は呪術に使う五寸の釘やない、建築境界用最大の、二十センチの釘やって」

「くうっ……」

そう言われて自分の敗因に気付き、それでもこぼれ行く暗器たちを拾おうとするが。

まるで主の意志に反するがごとく、尹沙の手につかない。

守るものが無くなったと実感した尹沙は、無意識にも僕から離れようとしたから、

僕はきっかりと言葉で釘を刺してやる。

「……動かんほうがええで。」

僕の《断谿（ライズ。リソリューション）》は無機物やろつが何やろつがもれなく分解する。

あんま動くと、着てるもんはじけ飛ぶで。……いやーん、まいっちんぐ、てな。

ま、僕的にはむしろかまわへんのやけど？」「  
「き、きやあつ！？」

尹沙は、そのおどけた口調の中に……男の僕の姿を見たのかもしれない。

たとえ姿かたちが変わろうとも、僕は僕。

いろんな意味で眼福であると、赤くなってしゃがみこんでしまった尹沙に苦笑しながら、

意気揚々とその場を去ろつと背を向けて。

『吟也さん……』

「わーってる。皆までゆーなって。……嘘に決まってるやん」

それは巻くための口実だと、声を上げる詩奈に僕は小声で言い訳する。

『吟也さんっ……！』

しかし、それでも食い下がるように詩奈の声でした。

僕はそれに対してもう一度、言い訳を口にしようとして。

その声に、今までにない焦りが含まれていることと。

尚且つその場の空気が芯から一変していることに気付かされることとなる……。

(第63話につづく)

63、残滓。青色の空を求める蝙蝠（前書き）

やっと、青空の話数を越えたぞー。話数だけだけど。

### 63、残滓。青色の空を求める蝙蝠

それは、ヒースの異世である赤い雪の世界に類似した……現実とは異なる世界。

「……油断したわね。罨は二重、三重にしかけてこそ、でしょう？」

意識して相手に恐怖心を与えるような……深い海の底のような少女の声に。

僕は背中に流れる冷や汗を感じながら、ぱつと振り返った。

そこには、先程までいたはずの尹沙の姿がない。

「はるなゆはどこへ行きよった？」

「ふっ、心配しているの？ 安心なさい。世界から切り離されたのは、あなた。」

もう戻ることもないでしょうけどね」

僕の言葉に酷薄な笑みをこぼし……その声の主は、霞が濃くなり実体化するように、目の前に出現した。

いつの間にか陽は隠れ、灰色の雲が覆い。

冷たい風が現れた少女の……雁字搦めに、縛めるように結ばれた黒の前髪を舞わせる。

そして……それまでその髪に隠れていた凄絶の果てに深い黒に染められし瞳が、僕を射抜く。

無意識か本能か。

気付けば僕は、一步、二歩と後ろに下がっていた。

『こ、この感覚、もしかして昨日の……？』

一方の詩奈は、昨日味わった恐怖に近いものを、その感觸を思い出していたようだった。

靡く黒髪が僕の瞳を通して、彼女の目にも映っていたことだろう。

「えーと。よっしー？ 何でいきなり、ジエノサイドモードですの？」

をよっ、ま、マジ怖いんやけど……」

だからこそ、明るく繕うようにその少女……ひじり・よし聖仁子に僕はそう言うが。

その場のとんでもないプレッシャーは増すばかりだった。

「……あなた、これ以上しゃべらないで。私、もともと加減ができるほうじゃないから」

どこかで聞いたばかりのような言葉だが、またしてもいつもの僕のもつもりで話しかけたせいかな、

変にそれが彼女の琴線に触れたらしい。

そしてそのまま仁子は、僕に向けて矢をつがえる様な構えを取る。その空間には、弓も矢も存在しなかったが……。

「……っ！」

その構えを見ただけで、どっと噴き出す汗が止められなくなる。このプレッシャーに比べれば、今までのやり取りなど遊びもいところなのだろう。

自分に向けられる……明確な殺意に。

僕は背を向けて全力で逃げ出すことで答えた。

『吟也さんっ、ダメですっ！ この空間はっ！』

だが……ここは異世。

この世界を創り出したもの、仁子のフィールドであり、方向感覚も距離も、全て創造者……彼女の思う通りに顕在化される。

「わーってる！ よっしーの思い通りになる世界なんやろ？」

確か……その境の終わり、世界と世界の境界の壁を破って出ればいいねん！」

それでも僕には、ただ逃げるだけでなく考えがあった。

思えばいつもそう。

僕は今回の戦いを全て逃げる、という方法を大前提にっていた。

それには全てわけがありポリシーがある。

それは、相手ではなく僕自身のひとりよがりなわがまま。

僕に言わせれば、女の子に手を上げるなんてもってのほかだという理由があるのだが、

それを言ったらきつと相手は怒るだろう。

ここに通っているものならば、それを一種の侮辱ととられるかもしれない。

……だから、僕は何も言わず逃げる。

ただひたすらに逃げるのだ。

だが。

そんな僕の気遣いなど不要だと、そう言っているかのように……  
仁子は僕の前に立ちほだかる。

最初の時のように、目前に急に現れる形で。

「そんなこと、できると思った？」

そして……その場に似合わない、柔らかな笑みを浮かべ。



全てに達観したかのような、その果てない黒色に染まった瞳で僕を貫くと。

さっきまでそこになかったはずの。

まるでそれ自体が光生む恒星のごとき輝きを持つ、光の矢を出現させて……。

(第64話につづく)

## 64、ボス。意外といいひとが多かったり

仁子は、その場に似合わない、柔らかな笑みを浮かべて。

全てに達観したかのような……その果てない黒色に染まった瞳で僕を貫くと。

さっきまでそこになかったはずの、それ自体が光生む恒星のごとき輝きを持つ、

光の矢を出現させる。

「……【セザール・ディバイン】ッ！！」  
「ちいっ」

避けられない。

そう判断した僕は、小さなピスを取り出し弾いて。瞬間、鉄で作られた盾を創り出す。

でも、それでも。

「ぐあっ」  
『きやつー！？』

その生成が間に合わなかったのか、それとも意に介しないほどに強力なのか。

その盾を光の矢はやすやすと貫き。

そのまま僕の……ちょうど尹沙の苦無で受けた肩口の傷をさらに深くえぐり、

その背後で大爆発を起こした。

僕はその前後からの凄まじい衝撃に空高く跳ね上げられ、地面に叩きつけられる。

『っ、吟也さんっ！大丈夫ですかっ！』

「……っ、げほっ、げほっ。あ、あんまり。っーかマジで本気やあの人」

その衝撃に、一瞬意識を飛ばしかけた僕だったけど。

詩奈にそう声をかけられ、かつと目を見開くと、言うことを聞こうとしない身体にムチ打って、

強引に立ち上がった。

止まらない血……染まる制服。

まゆから借りたやつなのに。

なんて謝ろう？　なんて心中の見え見えのやせ我慢も、長くは持たないかもしれない。

一刻も早く、打開の策を考える必要があった。

(いつものように逃げようにも、異世に放り込まれとるしな。

ここはよっしーの庭みたいなもんや。僕がどうにかできるシロモノじゃ……いや、待てよ？

ここはよっしーの作った空間、なわけやから……そうやっ！)

僕は考えに考えて、あることをひらめいた。

それはまさに天啓。

僕にとって最後の奥の手でもあった。

けれど……全ては遅かったらしい。

仁子は、そんな考える時間すら、僕に与えてはくれなかったのだ。

「さようなら、同郷人<sup>なかま</sup>よ。この旋律が……あなたへの手向けです。  
……………トウエル！　いくわよっ。【第仁聖光】っ！！！」

仁子の手に縋るように、一体化したのは極光に霞む、翼あるもの  
のように見えた。

だんだんと光の強さを増し、姿を変え……仁子の背丈ほどの青銀  
色した武器へと進化する。

その姿は、銃のようにも、クロスボウのようにも見える、僕の知  
りえない未知の武器だった。

それは……元のあるべき姿を体現するように美しく。

僕は不覚にもそれに見惚れてしまっていて。

「……………あ？」

ズシャアツ！と、先端の青銀の刃が自身を貫くのを、人事のよう  
に見ていることしかできない。

一拍遅れてくる、突き抜ける激しい衝撃と、全身の神経にまで響  
く痛み。

だが…………その攻撃は、それだけでは終わらなかった。

無意識に抜け出ようとともがく僕の身体を縫い付けるように。

一撃目、三撃目と、白銀の刃が飛び出して僕に突き刺さり。

さらに踏み込んだ仁子の一撃は、大爆発を起こしてくの字に折れ  
る僕を跳ね飛ばした。

『ぎ、吟也さんっ！？　そ、そんなっ……………いやあああっ！』

朦朧とする意識の中で……………聴こえるのは、詩奈の悲痛な叫び。

僕はそんな悲しみを、痛みを与えてしまった自分をもどかしく思  
いながら、意識を失った……………。

(第65話に つづく)

65、真面目なキツカケ。それでも僕は疾り続け

ひとりぼっちだったぼくが、「お兄ちゃんになるのよ」と、おかあさんにいわれたあのひ。

ぼくはうれしかった。

うまれてくるきょうだいに、たよりにされるおにいちゃんになるうっておもった。

おとうさんはそんなぼくに、うまれてくるきょうだいはいもうとで、

なまえは『しいな』だっておしえてくれた。

「お前はお兄ちゃんになるんだから、ちゃんと守ってあげなくちゃ駄目だぞ」って。

ぼくは、それにうなずいて『しいな』がうまれてくるのをまっていた。

たくさん、たくさんまっていたんだ。

だけど……………。

『しいな』はいつまでたっても、やってきてはくれなかった。ぼくはさびしかった。

そしてかなしかった。

おかあさんは、かなしいかおで「めんねって、ずっとなっていた。

『しいな』にはもうあえないって。

『しいな』は……うまれてくるまえに、ひとりでとおい、とおいところについてしまったって。

とおいところでひとりぼっちだなんて、きつとさびしくてかなしくなっているかもしれない。

ぼくはおにいちゃんになったんだから、たすけにいかなくちゃっておもった。

だけど……。

『しいな』をぼくは、とつとつたすけることはできなかったんだ。

『しいな』のいるばしょは、とつてもとつてもとおいばしょだったから。

そして……。



その日から、『詩奈』は。その名前だけが残る、会うこともこともできない……

姿なきたった一人の妹として、僕の中に生きていた。

話したくても、助けたくても、守りたくても、もう叶わないまほろしとして。

だが、僕は時間が経つにつれ……風化するように、だんだん彼女のことを思い出さなくなった。

そうやって逃げることしか僕には術がなかったからだ。

なのに。

その、焦がれて止まない詩奈の声が聞こえるんだ。

なにかとても悲しいことがあったのか。

浮かぶ涙が、その叫びが僕を激しく揺さぶる。

そんな詩奈をそのままにして、僕は今、何をしている？

詩奈のことを助けるって、守るって……そう、誓ったんじゃないのか？

「いそいで、いそいでよっ！　しいながないてるよっ！」

幼いジブンが……そう叫ぶ。

だから僕は。

怒鳴るように……それに答えたんだ。

僕が助けしないで、誰が助けるんやっ！

（第66話につづく）

66、ウィニングショット。まだ試合は終わってない

「……」

仁子が、倒れ伏して動かない僕を何の感情も出さないままに見下している。

やはりどこか手加減している部分があったのか。  
僕は、かるうじて生きている。

つい少し前までの彼女ならば、躊躇わずに殺したのだろうか。

だけど。

僕が変わったように……彼女も変わったんだろう。

初めて会った頃の、触れればただ傷つけるような、自棄めいた雰  
囲気はそこにはない。

だから僕が、動くこともままならないはずの傷を抱えながら立ち  
上がったのを見ても、  
それほどの驚いている様子はなくて。

仁子は再び、自らの武器に手をかけたところで……しかし硬直し  
たようにその手を止める。

それは、僕自身と異世の変容に気付いたからなんだろう。

ぐらぐらと、大地が揺れている。

空には迸る雷。

巨大な虹色の光を放つ翼を生やしている僕。

今まさに仁子がつけたはずの傷が、まるで逆戻しを見ているかのように……修復を始めている。

「何故？ どういう、ことなの……？」

それは彼女にしてみれば、信じられない光景なのかもしれない。

自らで創った世界であるはずなのに、制御を失ってしまったということも。

僕が、僕にしか使うことのできないはずの力を使っていることも。

「やっと……やっと守れるんや。たとえそれが幻だったかてかまへん。」

兄として……男として……詩奈は守るっ！」

「……っ！」

全身から電気を撒き散らし、僕がそう叫んだのを聞いて。

仁子は初めて表情らしい表情を見せた。

それは……動揺、驚き、そして忘れ去ったはずの悲しみと懐郷。

そのせいなのいか。

そう叫び、ぶれながらスパークし、迫り来る僕の手が目前に迫ってきてても。

仁子は金縛りにでもあつたように動かなかつた。

それは……僕の力に圧倒されたのでも、  
相手を取り違え勘違いしていたせいでもなかつたのかもしれない。

その本当の理由は。

きっと仁子自身でなければ分かりようもなかつたのだらうけど。

しばらくして……世界が元のあるべき姿に還ると。

何も起こっていない様子の自分の身をいぶかしげに思っている仁子の姿が目に入った。

すぐに、僕と目が合う。

そんな僕は、それまで血に染まるように赤かった髪を、銀色の髪に変えているに違いない。

それは、詩奈の探し人に気付くヒントになったのは確かだったが。

それでも魔法料理の効果は切れていないようだった。

相変わらず女の子のままの自分に。

まだ終わっていないという感覚とともに思わず苦笑がこぼれて……。

(第67話につづく)

## 67、活人事件。この名で錦を飾りたい

「……………あれー？ 私……………？」

だが、とりあえずは仁子との決着はついた。

それを、彼女自身も気付いたらしい。

「お？ いつものんびりモードに戻ったんか、よっしー。

目えつむつたまま動かへんから、心配したで？」

「何で……………今私、あなたの攻撃を受けたはずなのに、どうして無事なのー？」

「どうしてって、そもそも攻撃なんかしてへんもん。

今のは、よっしーの創った異世から出てきただけや。パソコンで言つと、シャットダウン、みたいなもんか？」

あんさんを攻撃するはずないやろと言わんばかりに僕はそれに答える。

仁子が聞いたのは、そう言う意味ではなかったのだろうか。

目の前にいるのは僕に取り憑いた誰かではなく、正真正銘の僕自身であるからして。

それは聞いても無駄なことなのだろうと、仁子に納得させるよう

に。

「それに、何だかんだいって、よっしー手加減してくれたやる？  
あのウイニングショットもまだ何発も余力残ってたろうし、あの  
異世だって、

僕が人工のモン操れんの分かつとってそれでも正々堂々誘い込んで  
くれたみたいやしな」

「……」

僕の奥の手《アルミクティ・ゲロウファイア全言統制》は。

ご存知の通り、あらゆる機械、人工物をそもその媒体にし、操  
り支配することのできる能力だ。

それは仁子の創り出した異世にも当てはまるのわけだが。  
彼女の異世は、あの試験の会場よりも大きいものだった。

あれから研鑽を積んで強くなったつもりだったけど、結局要領才  
ーバーで、  
ジブンの生命力まで削られてる始末。

虚勢を張って、ピンピンしているように振舞ってはいるが、実際  
は満身創痍。

僕が得意のやせ我慢をしていることに、仁子はきつと気付いてい  
たんだろうけど。

「でやな、そんなやさしーよっしーをお願いなんやけど、僕のこ  
と見逃してくれへん？」

後ちよっとの間でええんや」



《全言統制》は、僕にしか使えない能力。  
であるからして、仁子もきつと僕が身体を乗っ取られたわけじゃ  
ないことに気付いただろう。

本来ならば、詩奈を狙ったのは仁子なのか、もしそうなら何故詩  
奈を狙ったのか、  
理由を聞くべきだったんだろうけど。

そこで僕は、あえてそう口にした。

それよりやるべきことがあると、含みを持たせて。

「……分かったわー。私もちょっと用事できちゃったしー」

すると、詩奈を襲ったのは彼女ではなかったのか。  
言葉通り、何か誤解でもあったのか。  
そう言って頷いてくれた。

「ええの？ さすが！ ハナシの分かるお人や〜。伊達にナイス  
バデーなだけあんな」

言ったからには取り消しは効かへんで、とばかりにそんな捨て台  
詞を残すと。

気が変わらないうちにと、僕はそのまま駆け出してゆく。

「……」

じいっと、視線外さず見つめ続けている。

そんな、熱ほったい視線を、背中に感じながら……。

(第68話につづく)

68、チェリーレッドのナイフ。ふるつのは今にあらず

そうして。

僕たちは、最終目的地へ向かう真正銘最後のポイント、  
丁字になっていて、右へ折れれば女子寮、左に折れれば職員寮、  
学院長室へともれなく辿り着ける場所に来ていたのだが。

「うぐっ……いかに私最後の砦ですってカオしよってからに」

思わず僕が、苦い表情で呟くその視線の先。

女子寮の入り口へと続く、細い飛び石にある道に立っていたのは、  
薄桃色のおさげ髪に、無表情ならジェノサイドモードの仁子に  
も負けない、

アンティークドールのような顔立ちをした一人の少女。

隣のクラスで仲の良い友人の一人（少なくとも僕はそう思ってい

る）、  
寂時沙柚（じやくまき・さゆう）の姿がそこにある。

「……」

僕の呟きは、沙柚にも届いたらしい。

まるで照準でも合わせているかのようになり、ぴたりと僕のほうにチ

エリーレッドのように赤く、  
深く脆い瞳を向けてくる。

僕は、そのまま動かないでいてくれればいいのになあと淡い期待  
を抱きつつ。

意味のない抜き足差し足で、迂回しながら……

沙柚のいる道とは逆、職員寮と学院長室のあるほうへと歩みを進  
めた。

すると、そんな僕の願いが通じたのかなんなのか。

沙柚はその場をどこぞのゴーレムのように動かずに、視線だけを  
僕に向けている。

「なんや……見逃してくれるんか？」

ひょっとして、彼女はあのふざけた試験には参加していないのだ  
ろうか、なんて事も考えるが。

普段から僕をいびるのが常の沙柚である。

こんな絶好の機会に彼女が乗らないはずはないはなかつと、

これはもしや罠なのかもと、僕はあえてそんな沙柚に近付いてみ  
る作戦に出ることにした。

「……………(びくっ)」

「……………え？」

すると沙柚は、野生の猫のように、近づく僕にあからさまに怯える様子を見せる。

それは、普段の沙柚ならば絶対にしないだろうリアクション。僕は驚き、思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

ますます怪しく思い、さらに近付くと……。

「来ないで、お願い」

そんな、蚊の鳴くようなむしろその赤い瞳に涙すら浮かべている沙柚を見て。

ついにはぎよっとなった。

「な、なんやねん。僕がいじめとるみたいやないかっ」

「……っ」

思わずそう叫ぶと、再び身体をふるわせる沙柚。

よく見てみたら、いつも携帯していて僕の肝を冷やし続けている赤茶色のナイフすら持たず、

沙柚はただそこに立っていた。

やっぱり別人なのかもと思うくらいの変貌振りである。

『吟也さん、本当にいじめてるみたいで……可愛いそうなんです  
けど』

「……せやなあ。ふだんは可愛いそうなんて似合うキャラやないのじ。

まあ、ええか。もたもたしとつたら追っ手増えるかしらんし。ほなな。近寄んのやめといたるから、もうそんな顔すんなよな」「…………え？」

そう言ってきびすを返すと、何かに驚いたような、そんな小さな声が背後から聞こえる。

僕はそれが気になったが。

それよりも先に、やることがあると。

そう思いながら、その場を後にするのだった……。

(第69話につづく)

## 69、泡沫。どうか想い、散らないでいて

そして。

もう少しで日が暮れ、茜色に空が染まる……という時分。

僕たちは、学院長室へつながる最後の細道を歩いていた。

「さて、この先にご所望であろう目的地があるわけやが……その前に、ちょっとお別れでもしとこうか」

『え？ それって……』

その短い道中、唐突にそう言った僕に、詩奈は聞き返すような声をあげる。

「いや……な。さっきよっしーと戦った時の会話聞いたと思  
うんやけど……」

勝手に名前とかつけたって悪かったな。君は本当は詩奈やのうて、  
本当の名前、あるやろ？

今のうちにけじめつけとこ思てな」

あの時の僕の感情は、彼女にも伝わってしまっただろうか。

僕が、決して会うことも守ることも叶わなかった、

その名前だけが存在して残る『しいな』という妹に、彼女を重ね

ているというのを。

『どうして今になって……そんなことを？』

だけど彼女は、そんな押し付けがましい僕の感情に寛容でいてくれたらしい。

そんなの気にしないって感情が、はっきりと伝わってくる。

それでも僕は、それを振り切るように言葉を続けた。

「だって、君には本当の名前があるやろ？」

詩奈ちゃうねん。事情があんなら教えてくれとは言わへんけど……

……大切な人と会うんやろ？

こっからはジブンに戻るべきや思うねん。 だから、お別れ。 ……

……僕と詩奈の、お別れや」

『……………』

気付いたのは、いつだったか。

彼女が自分の名前を忘れたのではなく、言おうとしなかったことを。

それはもしかしたら……初めからだったのかもしれないけれど。

僕ははじめをつけたかった。

『しいな』という、想いを懐いたままに。



だけど、彼女を迷わせ留まらせるような、未練を断ち切るために。

『分かりました。……わたしの本当の名前のこと、本当のわたしのこと、話そうと思います』

「……ああ、頼むわ」

僕は、そんな彼女の決心に感謝の気持ちを込めて、改めてそれを促す。

『わたしは……わたしとして生れ落ちて本来の名前を知らないのは本当です。』

お母さんの名前が我屋ですから名字は……ううん、これもやっぱり違いますね。

それで、その……その後、吟也さんがつけてくれたみたいに新しい名前をもらって……

その名前はとても気に入っていたんですけど、わたしは、一番大切な友達に、

その名前をあげちゃったんです。自分がもう長くないことを知っていたから……』

「……」

彼女がそう話した後。

しばらくの間、静寂が訪れる。

正直に言えば、彼女の事情を知らない僕にとって、その言葉は難

解すぎた。

彼女も必死に説明しようとしてくれるのだが、  
どうにもややこしいらしく完璧には伝えられないでいるようだ。

それでも僕が分かったのは、彼女が僕の想像もつかないくらい重い人生を送ってきたということ。

自身の名前も知らず、母を知っていても会ったことはなく。  
与えられた自分の名前に、あげてしまった名前。

自分の末路を重々承知しているとしても言いたげな超然的な態度。

それはまるで、意思ある『もの』のようだと、僕は思ってしまった。

その声が届かなければ、果たしてどんな結末が待っているのか、  
想像に難しくなくて。

「その、友達が……これから会う大切な人なんか？」

僕は、震えそうになる口調を必死に誤魔化し、そう聞いてみる。

『……あっ』

すると彼女は、何でそんなことを忘れていたんだと言わんばかりに声をあげて見せて。

さつきよりも長い沈黙が、お互いの間に降りて。

都合よく忘れていたのは。

きつと……その友達へのささいな嫉妬だったのかもしれないね。

それはきつと、独り言だったのかもしれない。

あるいは、彼女の心情が届いたのか。

どこか吹っ切れたように……彼女は苦笑してみせて。

『ううん。違うよ。会いたかった大切な人は……その友達とわたし  
の大好きだった人なの。』

おかしいよね？ もうわたしはいなくなるって分かっているのに、  
こうして大好きな人が幸せにしているのかなーなんて夢を見てるんだ  
から』

ちよつと砕けた口調でそう言う彼女は、とても寂しそうだった。

自棄ではなく……それは自分への諦め。

僕は、そんな彼女の力になってあげたいと思った。

苦いものじゃなくて。

ただ笑って欲しいと、そう思った。

それが、僕の願い、存在意義だったから。

「死して尚愛を求める存在、か。うん、そんなところ気に入った。気に入ったで。

僕は……紅恩寺吟也や。全ての、女の子たちの笑顔と幸せが野望のナイスガイや。

……しっかり覚えときや。生まれ変わったら……迎えにいつた  
る」

それは……誰になんと言われようと、本気の、生きる理由とも呼  
べる宣誓。

『ありがとう、吟也さん。ぜったい、忘れないから……』  
「あ……あ」

僕には、見えなくても分かる。

彼女が今、僕の望んだ笑顔を浮かべていることを。

僕はその言葉に、しっかりと頷いて見せて。

そして……。

学院長室の、扉を開けた。

(第70話につづく)

70、まはるご。誰か近く、ねむらひのまじり(前書)

くるす、おーばー。

70、まぼろし。誰より近く、おんなのあじと

SIDE……???

吟也さんとお別れの儀式みたいなことをして。

わたしは、ちよっぴり幸せな気分になって。

『学院長室』と書かれたプレートのある部屋の扉を開ける。

すると、西日のあたる、古ぼけた書物と、年季の入った家具に囲まれた真ん中のおつきな机には。

真っ白な雪よりも白い髪と、おんなじ色の伸びたあごひげを蓄えた初老の男性が、

こっくりこっくりと居眠りをしていた。

「わたしがこんなに苦労……っていうか、わたしは何にもしてないけど、のんきなものね」

その白い髪も、ようやく年齢にあってきたようで。

今の彼が……わたしを見てどうリアクションするのかって考える  
とちよっと面白かった。

そのままふらふらと回り込むと。

肩肘をつく彼のそばに、彼とわたしの親友が仲睦まじくしている  
様がよく分かる写真立てがあった。

最近のものらしく……見ているだけで幸せにあてられそうです、ち  
よっと複雑な気分にもなっただけ。

「幸せに……なっただね」

でも、それでも。

こうして彼が幸せにいてくれるのが分かって、安心と嬉しい  
気持ち断然大きくなる。

これなら、うん。安心して、わたしも眠れるよ。

なんて、ちよっと達観した気分になった時だった。

ふわりと。一陣の風が吹いて、クリーム色のカーテンが彼にかか  
る。



「……ん？」

それで目が覚めたのか、起き上がる彼。

わたしは、思わず隠れようとして……そんな彼と目が合ってしまった。

「あれ？ きみは……ああ。そうか、会いに来てくれたんだね」

それは……心地よいバリトン。

わたしは、彼が確かにわたしを捉えているのを見て。

その時初めて、吟也さんの身体から抜け出し、もとのわたしに戻っていることに気づいた。

吟也さんは、気を遣って席を外してくれたのかもしれないな、なんてことを思う。

……どうやってかは分からないけれど。

目の前の彼は、今まで誰にも見えなかったわたしが見えるらしい。

「なに当然のように言ってるのよ。そ、それに……わたしはあの子のことか心配でっ、」

あなたのところに来たのはついでなんだからね！」

「……ふふふ。そんなところも変わらないんだね」

「当たり前でしょ。変わってんのはそっちじゃないの……って！  
ち、ちよっと!？」

わたしが膨れてそう言うど。

彼は何を思ったのか、ダンディな苦笑を浮かべ、いきなりわたしを引き寄せ、抱きしめてきた。

まるで……ここまで変わったんだよって見せ付けるみたいに。

「来てくれて、ありがとう」

「……あっ」

そして、わたしの耳元で……そんな事を囁いてくれる。

彼は、知っているのだ。ぬくもりを知らなかったわたしが、そうされるのが好きだってことに。

わたしは単純だから。

それで満足しちゃったんだろう。

自分の身体がだんだんと霞み……消えてゆこうとするのを悟る。

「また、会えるかな……」

それは、まるで昔に（わたしにとっては最近だけ）戻ってしまったかのような……彼の囁き。

わたしをふったくせに、調子いいあなんて、思いつつ。

わたしはそんな彼に向かって……。

「そうね。またそのうち会いにくるわ。その時はわたしの自慢の彼も一緒に連れてくるから」

「……はは」

わたしが片目を瞑ってそう言うと、彼は苦笑して、ちょっとだけ複雑そうな顔をする。

わたしは、それをしてやったり、なんて思っつて。

わたしがその世界から消えたのは……その瞬間だった。

それは、決して悲しいものなんかじゃない、希望のある……夢。

わたしは……この世界で過ごした日々を、忘れないだろう。

大切だったひとはもちろん。

こんなわたしを助けてくれて最後まで後押ししてくれた赤い髪の。

笑顔がステキな男の子のことを……。

(第71話につづく)

71、手違い。ハンティングナイフのこついのをくれる

『ありがとう、吟也さん』

僕は……そんな最後のとてもきれいな声と純粹な心を持った少女の言葉を受けて。

全てを見届けると、何だかすがすがしい気持ちで、その場を後にする。

僕は僕で、この後厄介そうな後始末がいくつも残っているのだ。大いなる野望のためには……休んでなどいられなかった。

「……とは言え、正直マジしんどい」

そう言えばあのはた迷惑な試験は終わったのだろうか？

もしこれで終わっていないのなら、文字通り抵抗すらままならな  
い。

悲しき定めサンドバックだ。

さすがに死にはしないと思うが……。

「ま、かつたるいし、初めに捕まったもんに泣きつこ」

僕はあえてそんな事を口にして、自らを鼓舞するように歩みを進める。

すると。

全くさっきと同じ場所に……沙柚がいた。

その、なんだか置いていかれた迷子のような姿に。

僕は苦笑を浮かべつつ、彼女の元に歩き出す。

「おい、沙柚ー？ まだそんなトコ突っ立つとんかー？」

「……っ」

そう言うと、またしても同じビクつくようなリアクション。

声をかけただけでそんなリアクションをとられると、いささかへこんでしまう僕であったが。

いつまでもそんな顔させとくのは自分のポリシーに反するとばかりに、さらに言葉を続けた。

「何？ 向こうになんかあんの？ そうやって入り口ふさいどるってことは」

「……貴女を、ここから先に通すわけには、いかない」

すると、何だか……まだ終わっていないですよって雰囲気満々なお答えが返ってくる。

なんだか滑稽に見えるそれに思わず苦笑しつつも。

それと同時に、未だ自分が女の姿でいることに僕は気付かされた。そう言えば、効力は一日続くってまゆのやつ言ってたっけか。

本当に長い一日だよ。

どうやら、その辺りでまたいろいろな誤解があるようだけど。

「……それでも通るっていったら？」

「貴女の……命はない」

試しにそう聞いてみると、案の定そんな言葉が返ってくる。

僕はそれに溜息をつき……天井になってまうけどしかたないか、と呟きながら。

さらに沙袖に近付いた。

「そうか、んじゃ、やってみいゃ。……ほれほれ、抵抗はせんで

」  
「……うっ」

さらに加えて降参のポーズをしてそう言つと、何故かたじろぎ泣きそうな声をあげる沙袖。

男（僕）には強気だが女には弱気になるところがあることを知ったのはつい最近で。

やはりいつもと違うそのリアクションに、面白い、と思ってしまう駄目な僕は。

さらにさらに調子に乗ってゼロ距離まで近付いてしまつと。

唐突に沙柚を包み込むように抱きしめた。

「ほらほらっ、いーから、いーからー」

「……あつっ」

こうなったら今までの恨み晴らさしておくべきか？　なんて邪なこ  
とまで考え出す始末。

思わず緩みきった笑顔を浮かべる僕がそこにいたけど。

突然、ガガガッ！　と銃の乱射されるような音がして。

これも天井やー！　と歯軋りしながら沙柚を抱えてその場を離脱。

そしてすぐに沙柚を離して間合いを取る。

「外したかー……………ちっ」

でもって、そんな事を呟いて近付いてきたのは仁子だった。

「や、やややあ、お日柄もよくっ……………だ、誰でもいいとは言っ  
たけど、

本気で殺されるんはちょっとー」

僕が条件反射で震え上がってそう言うと、仁子はふっと陽だまり



のような笑みを見せる。

とりあえず、のんびりモードのようだが……油断はできない。  
何が起ころうともいいように、そんな仁子を見据え、構えていると。

仁子はそんな僕を無視し、沙柚に向かって語りかける。

「もう、全て終わったってさー。ちょっと手違いがあったみたい  
で。

それ、本物の吟也さんだから……刺し入れちゃってももうまんだ  
いー」

「……なんだ、そうか」

眠くなるような仁子の言葉に続き、僕の理解できないところで理  
解しあい、頷く沙柚。

すとんっ！

そんな二人のやり取りを、ポケットと眺めていると。

いきなり僕の顔面すぐ側にあつた煉瓦の柱に、何の抵抗もなく、  
いつの間に取り出したのか、沙柚の赤銅色のナイフが深々と突き  
刺さった。

「……次は貴様だ」

「ひ、ひいーっ!?!?」

何でって考える間もなく、僕の身体は動いていた。  
いつもの調子に戻った沙柚に、ちょっと安心しちゃてる自分が嫌  
になりながらも。

行く先もわけも分からずがむしやらに足を動かして……。

(第72話につづく)

72、黒幕。彼女はゴッド・フェイク・ファー

「……………あ、関西弁のお兄さん」

すると……………そんな勢いそのままでも女子寮に入り込んでしまったらしい。

そう呼ばれてピタリと立ち止まり、顔を上げると。

女子寮の玄関のドアに寄りかかるようにして、見上げてくるまゆの姿があった。

「……………」

おまえそんなとこで何してんねん、と言おうとして。

しかしその扉の向こうから、扉を叩く音と、誰かの声が聞こえたので……………

すぐさま話題を切り替える。

「ん？ まゆ、後ろで何か騒いでんで？ そこにいてええんか？」

「そ、そうですね？ 聞こえないですけど」

僕の言葉にそらとぼけるまゆ。

まったく役者やな。

僕はそんなまゆを見て感心すらして言葉を続ける。

「そうなんか僕にはあんさんの大好きな姉様が出せ出せ騒いどる  
よつにも聞こえるんやが」

「そ、そうですか？」

「そや、吟也とすうも遊びたいよ〜って」

「……嘘ですよね？」

「そやな」

そうして会話をしていくうちに……ほんのわずかだが、最初より  
もさらに扉を押し込むように、

塞ぐように前に立つまゆ。

「……鳥海白眉？」

「な、何ですか？」

そこでいきなり普段使うことのない低い声色で、恐怖のフルネー  
ム呼びをすると、

イタズラがばれた子供のように硬直するまゆ。

僕は……それに答えるように、畳みかけるように、決定的な一言  
を口にした。

「なるほどな。すうを守りたかったんか？」

「……………」

確信を持ってそう言うこと、まゆは恐る恐る僕を見上げてくる。

「なんや？ よっしーとかに聞いてないんか？ もう終わったんやって。」

かわいそうな吟也くんが、かわいそうな目におうたんは、誰かさんの手違いだったそうやで？」

考えるに……女性化してしまう魔法料理ですらカモフラージュだったのかもしれない。

隠したかったのは、例えば……対象に憑き物が憑いているかどうか分かる魔法料理、だろうか。

その効果はきつと、もし何かがついていれば、その対象が赤く発光するのだ。

だとすると、おそらく生徒全員に試さなければ意味がないだろうし、

（これは結果的に僕が当たりだったので、他のものに迷惑をかけたわけではないからまだいいが）

魔法料理の効果は二つ以上同時に現れないというのも嘘ということになる。

まあ、僕にしてみれば、そうだろうなとわかっただけで最後まで付き合ってたわけだからどうこう言えないのだが。

それにそもそも、これらの考えは全て……僕の想像の域を出ない。

証明してみると言われても無理なので、こうしてまゆをいぢめて  
いるわけなのだ。

「……」

そう言うと、僕を見据える視線が一層強いものになる。

僕はその黒い瞳の中に、一瞬だけ普段のまゆと違う色を見たよう  
な気がしたが。

「ああ、テストのことですね？　なんだ、もう終わっちゃったん  
ですか？

逃げ回る吟子さん、ぼくも見たかったです」

なんて、にっこり笑うものだから……何だか調子が狂ってしまっ

仁子たちをけしかけ、あるいは自身の手で詩奈を襲ったの  
はお前か、まゆ？

本当に聞きたいのは、そのこと。

ただ、その帽子に隠された髪が黒であること、くらいのもので。

ちゃんとした証拠は何もないし、やっぱり僕の勝手な想像である。

僕が……そのことを言及するかどうか迷っている。

まゆはどう思ったのか、いきなりひょいと、玄関前から移動した。

するとそのとたん、バターンッ！ と扉が開いて……。

(第73話につづく)

73、主役。おいしいところをいただきます

するとその瞬間。

バターンッ！ と扉が開いて。

「すうも、吟也と遊ぶですーっ！」

どげっっ！

「……………ぐはあっ！？」

蹴破るつもりで？ タメをつくっていたのか。

その瞬間、クラシッククシヨコラの髪を羽根のように揺らしながら、そんな事を叫んで飛びしてくる、男子用の制服を着た少女、すうことスウラ・オージーンの様子が目に入った。

すうはとんでもない速さで僕のお腹に頭から突っ込み、一緒になってごろごろときりもみしながら、十メートルは転がっていく……………。

「あ、吟也？ どうして寝てるですか？」



「……………つぐぐぐぐ」

そして何事もなかったかのように馬乗りになって。

ブルーベリーの瞳を嬉しそうに輝かせながらそんな事を言うてくるすうに。

僕は突っ込みやらなんやらいろいろ言いたかったが。

それらは全て苦しさのあまり言葉にならなかった。

……と。

「吟さんついにダウン。カウント、ワン、ツー、スリーっ、カンカンカン」。

スウラ・オージーン選手勝利です。試験クリアですっ。

……そんなスウラさんには。臨時試験協会から、特典がおくられまーす」

いきなり、そんな声が聞こえてくる。

もう一人の、今回の件全てを把握しているかもしれない相手。

だから、そんな状態になっても、人というものはやるうと思えばやっつてやれないことはないらしい。

突然の、あまりといえばあまりな新たな闖入者のその声に、僕はついに爆発した。

「くるあーっ、おまいかーっ！ この諸悪の根源め！ さては全てもかもお前の仕業やな！

何が臨時試験協会や！ あんな特典きいてへんぞっ！ あの写真は秘密や言つたやろーっ！」

がばあつと大魔神が変身するように起き上がった僕は、乗っかっていたすうを跳ね飛ばし、今をもって降りかかった厄介ごとの全てを、目の前で人を食ったような笑みを浮かべる、

坂額恵美……さかびたい・えみ通称えっちゃんのせいだと決めつけ、そう叫んだ。

まさしく異議あり！ と宣言でもしそうなポーズをとって。

「ぐふふ。ばれちゃーしょうがあるめえー」

すると、恵美は、そう言う僕の言葉に含まれる真の意図を悟ったのか。

真っ向から受けて立つとでも言うように、底意地の悪そうな表情のまま、

それでも顔に似合わない笑みをこぼす。

そこにはもはや、何人たりとも入り込めないような殺伐とした空気があって。

「ザツツ、エスケープ！」

「逃がすかあああああっ！」

マイペースそうな見た目とは裏腹に。

ものすごいスピードで逃げ出すえっちゃん、もとい恵美を。

僕は負けるわけには行かぬとばかりに追いかけてゆく……。

「えっと……」

「わーい、吟也と一口食い倒れー、吟也のおごりで食い倒れっ」

なんだか複雑な表情を浮かべたまま呆然とするまゆと。

何も知らず能天気になんか口ずさむ平和なすが、ただその場に残されて……。

(第74話につづく)

73、主役。おいしいところをいただきます（後書き）

次で、一応？ クライマックスになります。

## 74、白幕。いつの日か、オンリーワンナンバーワン

そして。

校内の中心に位置する大通りまで僕らは駆けてゆき。

急に歩きのスピードまで緩めて、そのまま歩き出すえっちゃんの隣に、急ブレーキをかけると。

そのまま僕らは……何事もなかったかのように歩き出す。

「……吟さんは、超のつくお人好し。しかもやっぱり歩く女の敵だった」

「うっさいよ、えっちゃんだって相変わらず超友達思いのくせに」

僕らは互いを見ないままにそう言って、そのまましばらく歩き続ける。

「でも、さっきのはちょっと吟さんらしくなかった。……あのままだったらキレてた？」

「いや、まあ。そのことに関しては止めてくれて助かったけども。だって、なあ。あれはやりすぎや。詩奈はもちろん、他の子にも危険及ぶ可能性もあったんやで？」

「……しいな？ ふうむ。それが今回、吟さんが守ろうとした子？」

「あ？ いや……うん。そうやけど」

いきなりえつちゃんにそんな事を聞かれ……正直に僕が答えると、何故かえつちゃんはそんな僕のすねを蹴り飛ばした。

「いった!? ……なんやねん」

「べえっーにい。そうやって全部一人でやろうとする吟さんどうなの、って思っただけ」

「……な、なんやと? いろいろ画策しおったおまいが言うか? なんやあの企画、

トラブルにいらんおぶざけかぶしよって。あんさんにだって責任あんねんど?」

痛いところをつかれて……僕はとっさに話題を切り替えるようにそんな事を言う。

すると、その言葉を待ってましたとばかりに……えつちゃんは口の端だけで悪そうな笑みを浮かべた。

「いいじゃん別に。結果みる結果。吟さんのせいではっぴーで終わったじゃないかね?」

「せい、ってトコに引っ掛かりを覚えるが……そう言われるとぐうの音も出えへんな」

確かに、結果だけ見れば僕が憂うようなことは起こってない。詩奈だって、最終的には笑顔で帰れたのだから。

「だから……まゆのことも今は許しとけ吟さん。

あの子が何背負ってんのか……あの子が話してくれるまで待つが  
いい」

「……そうやな。今日んところは、そうしとくか」

守りたい笑顔、その中には当然まゆだつて入っているのだ。

今ここで無理に真実を知ろうとするのは……その決意に反するこ  
とだとも言えた。

そんなこんなで、ご察しの通り。

二人の追走劇はやらせである。

本当は、まゆが何をしたかったのか、何を背負っているのか、聞  
きたかったのだが。

そんな彼女が守ろうとしていたすうの手前、無理に聞くのもどう  
なのかと思い始め、

悩んでいた所にうまいタイミングでえっちゃんの登場である。

初めからどこかでずっと眺めていたのか、状況をすぐに察したえ  
っちゃんと一芝居打って。

とりあえず今日のところは、とばかりに引いたわけだ。

そういう風につまいところでフォローしてくれるところこそ、  
いつもトラブルとヴァイオレンスを引き連れてやってくる悪友の



憎めないところなのだろう。

「んで？ どうすんねや？ このままえっちゃんが全ての首謀者だっただって思い込んでるふりして、

どっか遊びに行くか？」

「……そうだな。このまま濡れ衣を着せられて、

哀れにも吟さんに追いかけられるフリもありだけど。

もっとおもしろいこと……あつたりして」

そう言って、ぎゅっといきなり僕の腕にしがみ付いてくるえっちゃん。

それってどういう意味なの！？ と、僕が相好を崩しかけたとき。

「吟也さん、まーてーっ！」

その背後から……地鳴りを起こしつつ、僕を呼ぶ、そんな声が聞こえてくるではないか！

「え？ ちょっ、何！？ 終わったんやないの！？」

え、  
ぱつと振り返ると、鉛の恨み晴らさずにはいれない尋や雪菜に加

今まで巻いてきたたくさん女の子たちの姿が見える。

それは、なんだか一見すると、とてもおいしい光景に……

「実はあの特典、最初のひとりってわけじゃなかったりして。そして今から外解禁」

なるわけが……なかった。

「うあああつ！？つて、えっちゃん！ 離れてっ、死ぬ、死んでまっつ！ー！」

「ぐふふ……」なきじじー」

ますます人の悪い笑みを浮かべ、一層しがみついてくるえっちゃん。

それを受けてえっちゃんの言っていた、もっと面白いものがないのか。

分かりすぎるぐらいにわかってしまった僕は。

「たーすーけーてーっ！」

そんな本当は心にもない絶叫をともにして。

今日も今日とて、終わらない逃避行を続けるのであります……。

それは、欲張ってオンリーもナンバーワンも選ばうとしない、

どうしようもない僕の大いなる野望の、その一幕。

( 終わり？ )

74、白幕。いつの日か、オンリーワンナンバーワン（後書き）

どうも、伊吹ノアです。

N e g a i、これにて了です。

ただ、もう既におなじみになっておりますが、お話自体は終わっていません（オイ）。

シリーズタイトルの通り、このお話は『雨上がり』と言うお話の外伝的なものなので。

『雨上がり』で言うと、一章＋ になります。

二章として、二希観弥子視点のお話がありますが、いつ公開されることになるやら……また忘れた頃だと思いたいで、

のんびりお待ちいただければ、と思えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3260p/>

---

N e g a i

2011年8月19日08時45分発行